IBLARD Naohisa Inoue
－See Things with IBLARD Eyes－

IBLARD（イバラード）井上直久

ー世界はもっとキレイにみえるー

監修 井上直久

編集・制作 山野邉友梨

青心社

イバラード

IBLARD 井上直久

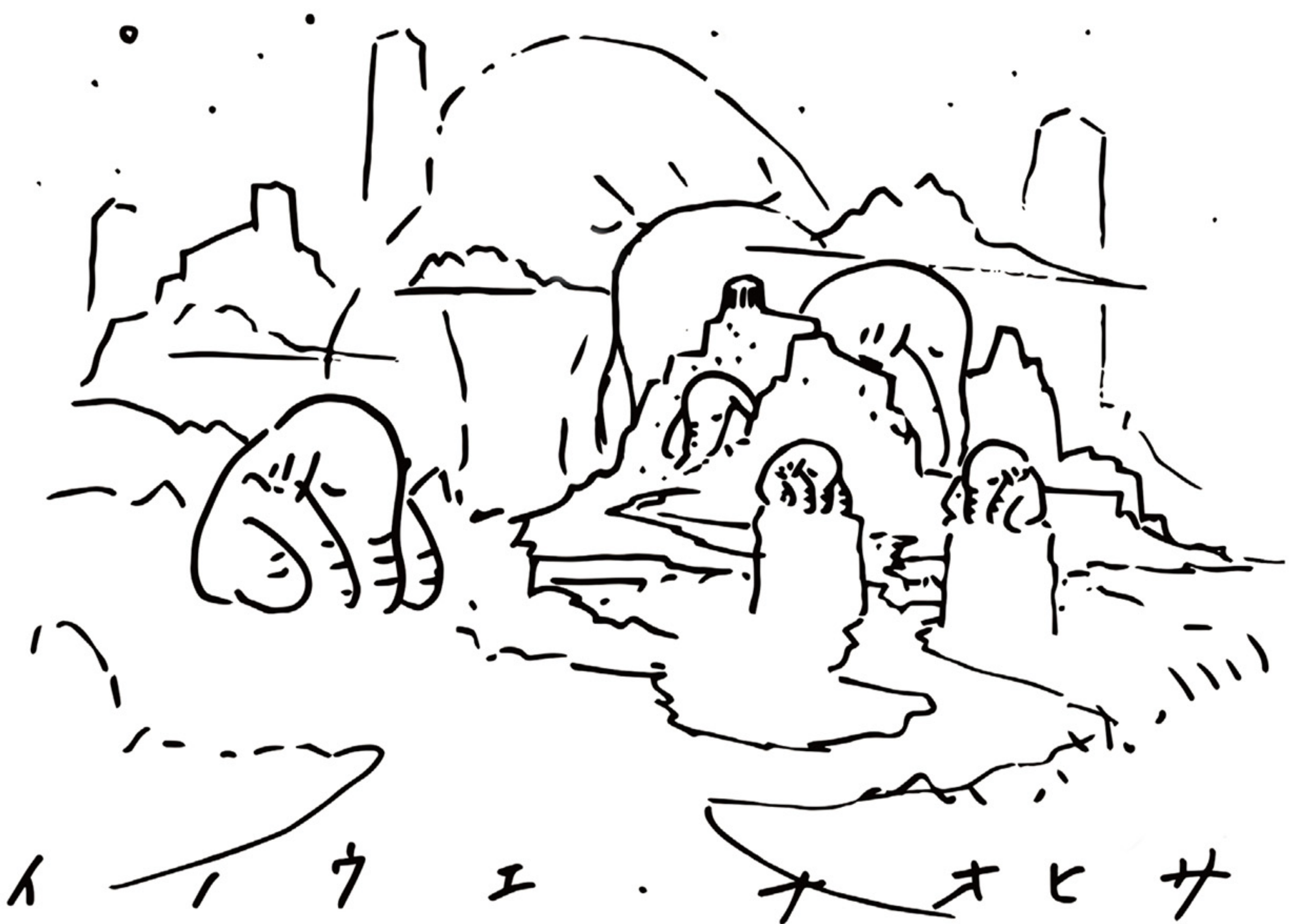
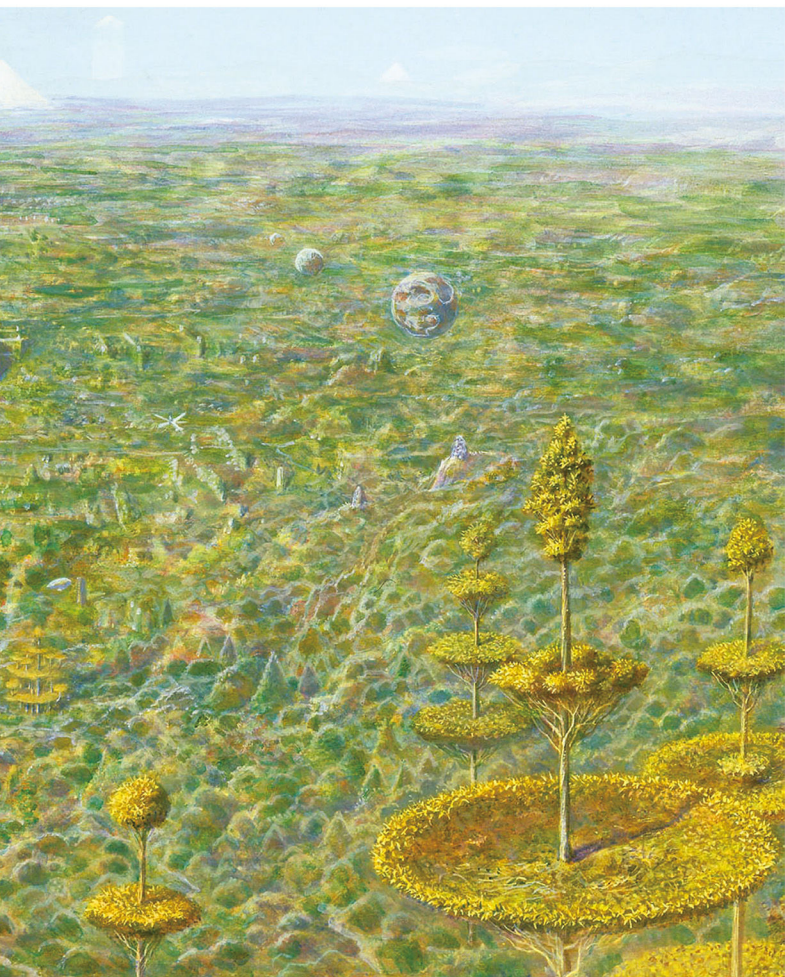
—世界はもっとキレイにみえる—

イノウエ・ナオヒサ

青心社

2010年5月撮影

Photos courtesy of Naohisa Inoue

「アトリエへの入り口」2010年5月14日、18日、21日、22日に少しずつ描きた足して仕上がった1枚

《イバラード眺望》1993

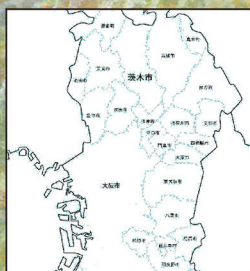
What is IBLARD？

目の前に広がるイバラードの風景

空にはラピュタと呼ばれる飛島や小惑星が無数に浮かび、街の建造物は植物で覆われている。まるで迷路のような市場には所狭しと物珍しい不思議な商品が並べられ、ものの見え方や感じ方なども常に変化している。魔法が存在する幻想的な世界『イバラード』。

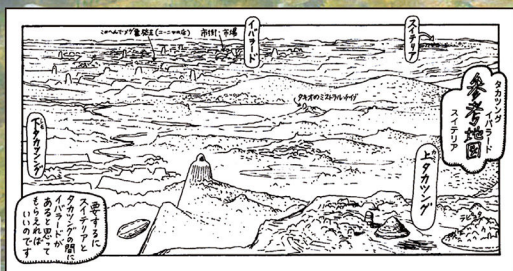
住民は人間をはじめ、培養人間、龍、森の人、トカゲ、モグラやカエルのような多種多様な生物が共存し、人々はシンセスタという思念に反応する鉱物などを用い、ソルマ（虚像）という技法で、自分の思い浮かべたものを形にすることができる。イバラードには2つの大きな都市が存在し、東のタカツングは山岳の国であり、ラピュタや稀少鉱物が多く生成されていて、西のスイテリアは水の国であり、高度な文明が築かれ、バイオとハイテクの技術が発達している。

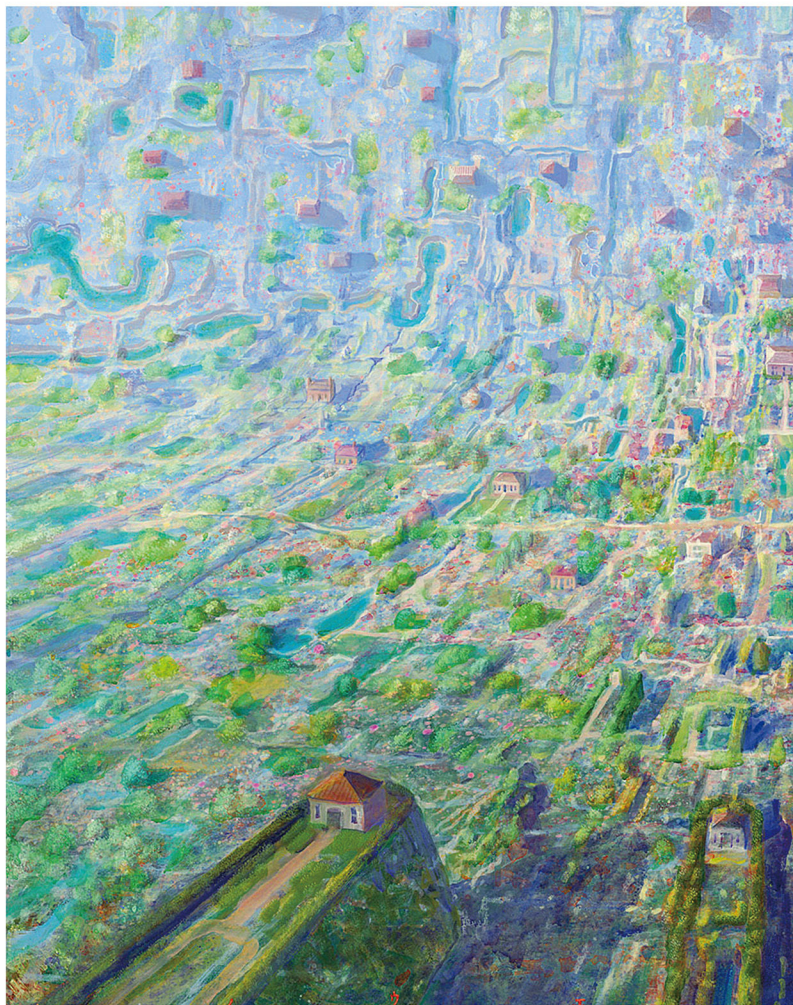
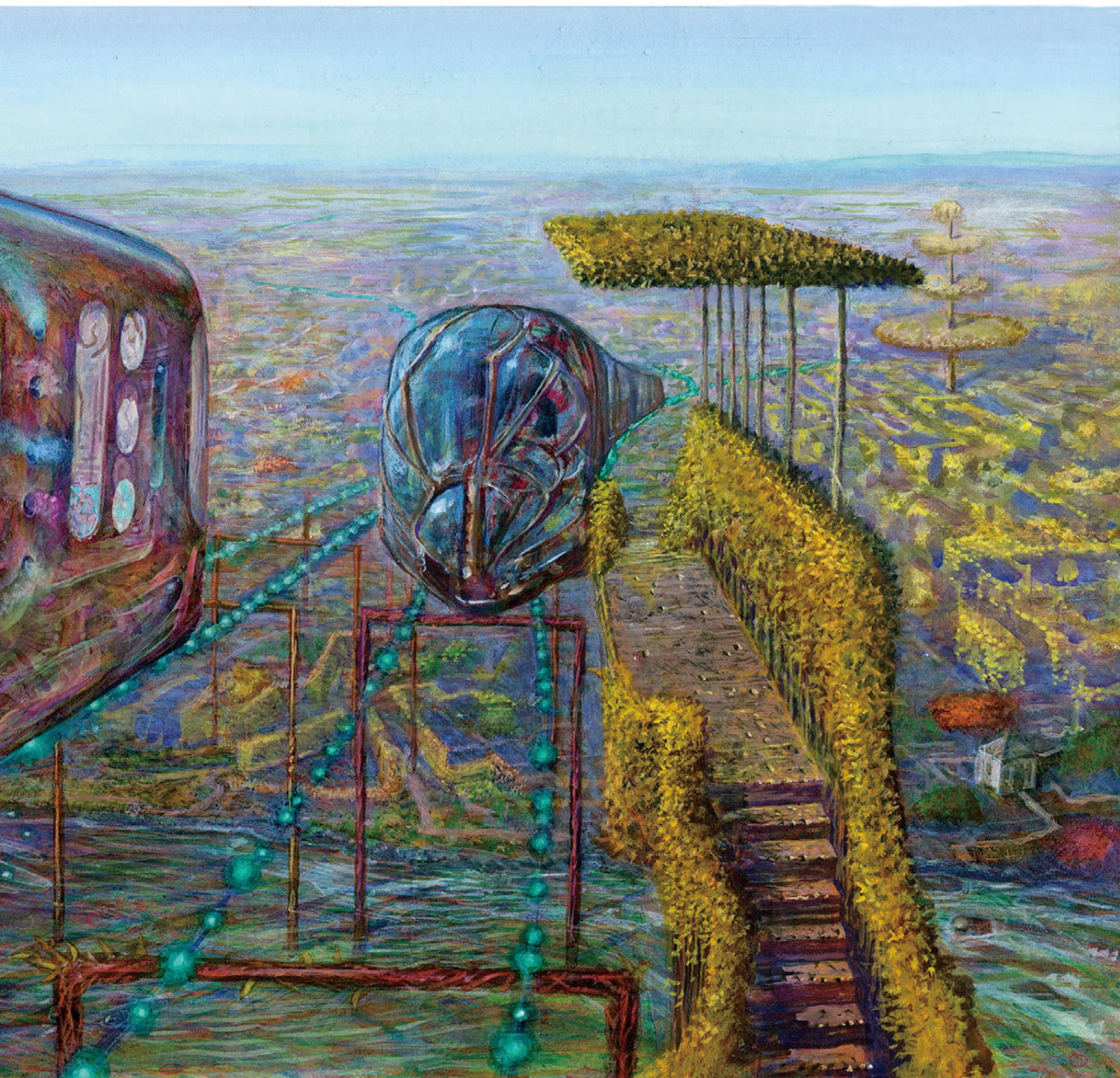
『イバラード』とはただ想像してできただけの架空の世界では決してなくて、実は今目の前に広がっている現実世界でもあるんです。なぜなら、もともとのモチーフは、自分の家の近所や行ったことがある場所など、何気ない日常の風景だからです。

かの宮澤賢治は、自分の出身地である岩手県を、愛着を交えエスペラント語風に、『イーハトーブ』と呼びました。そして、僕も同じように住んでいる茨木市を、『イバラード』と呼んでみたんです。そしたら、全てのものがキラキラと光り出し、今までとは全く違う、不思議で生き生きした景色に見えました。もしくは、気づかされたと言うべきかもしれません。この世は驚きと歓びに満ちていて、誰の目にも見えているのに、なぜか誰も気づいていないだけ。当たり前だと思っ

茨木市の位置
茨木市（いばらきし）は、大阪府の北東部に位置する市。大阪市と京都市の中間にあり、西に高槻市、南東に吹田市がある。

ている普段の景色は、実は奇跡みたいに素晴らしいものなんだということに気づきました。もしくは、小さい頃はキラキラと輝いていた景色が、毎日同じものを繰り返し見てしまったことにより、ありがたみも何も感じなくなってしまったのかもしれません。それまでも今の画風のような絵を描いてはいたのですが、その時はただの空想を描いているつもりだったんです。それをここ茨木市から『イバラード』と名付けたことにより、今まで描いていたバラバラな空想風景が、実は一つの世界を描いていたんだとわかりました。自分の周りはとても素敵なもので溢れているんだと、ネーミングで実体を把握できたという感じですね。そして、茨木市の近隣も同じように、吹田市を『スイテリア』、高槻市を『タカツング』としました。

僕たちも何気ない日々の中で、昔の思い出や記憶を美化したり、何かを夢見て憧れたり、みんな気づかないうちに、描かれたイメージのフィルターを通して風景を見ていると思います。家までの帰り道も、何気ない毎日も、目に映るもの、周りにあるもの全てにもっと愛着を持つことができたら素敵だなと常々感じます。だから、そのイメージや見方を、作品の中に提示し、もっと多くの方に普通の景色の面白さに気づいてもらうことができればと願います。

自分の記憶やこうあってほしいとか、本来こうあるべき、という想いで景色を描くと、その絵に共感し、『どこかで見たような懐かしい気持ちになる』と言ってくださる人々がたくさんいらっしゃるので、親しみが持てたりとか素敵だと思える景色は、みんな共通なんじゃないのかなとも思います。」（井上直久さん談）

新装増補版『イバラード物語』91ページより。イバラード、タカツング、スイテリアの位置関係です。

《エントランス》2008-2010

《小さな駅》1982

目次

一朝一夕では身につかない造形世界
こうして技術が磨かれていく

創作を支えるキーパーソン

めげゾウ
イバラードに登場するキャラクター。
めげゾウを見ると、優しい心を持った者にはプラスの効果を発揮し、励まされ力を与えられるが、打算的で計算高い者にはマイナスに働き、魔法の力ややる気などがなくなってしまう。

CONTENTS

<ruby>IBLARD<rt>イバラード</rt></ruby> 井上直久

ー世界はもっとキレイにみえるー

井上直久

画家。大阪府茨木市在住。デザイナー、高校教師、大学教授などの経歴の傍ら、絵画、漫画、絵本やアニメーションなどジャンルを超えて多岐にわたる作品を手がけてきた。自身の描く作品を『イバラード』と名付け、「どこかで見たような懐かしい」気持ちにさせてくれる絵画として、国を問わず多くの人たちから親しまれている。スタジオジブリとの関わりも深く、映画の背景画やジブリ美術館の壁画の制作に携わる。

マップ制作：後藤隆さん／画像追加：井上直久さん

北

箕面
神戸

名神
茨木I・C

← 神戸

名神高速道路

中央
図書館

府道

茨木工業
高校

弁天

保健健康増進
センター

三島府民センター

茨木けいさつ

中央
郵便局

春日丘高校

春日商店街

JR西日本 東海道線

JR
茨木駅

P

ユーアイホール
(市民会館)

クリエイト
センター

養精中学校

グランド

茨木
市役所

中央公園

茨木童子像

ハローワーク
消防署
図書館

桜
通
り

茨木
高校

茨木童子の碑

中央環状線
奈良

茨木市
中央体育館

阪急 京都線

中央環状線
南茨木

高槻大阪線
三島江

← 梅田

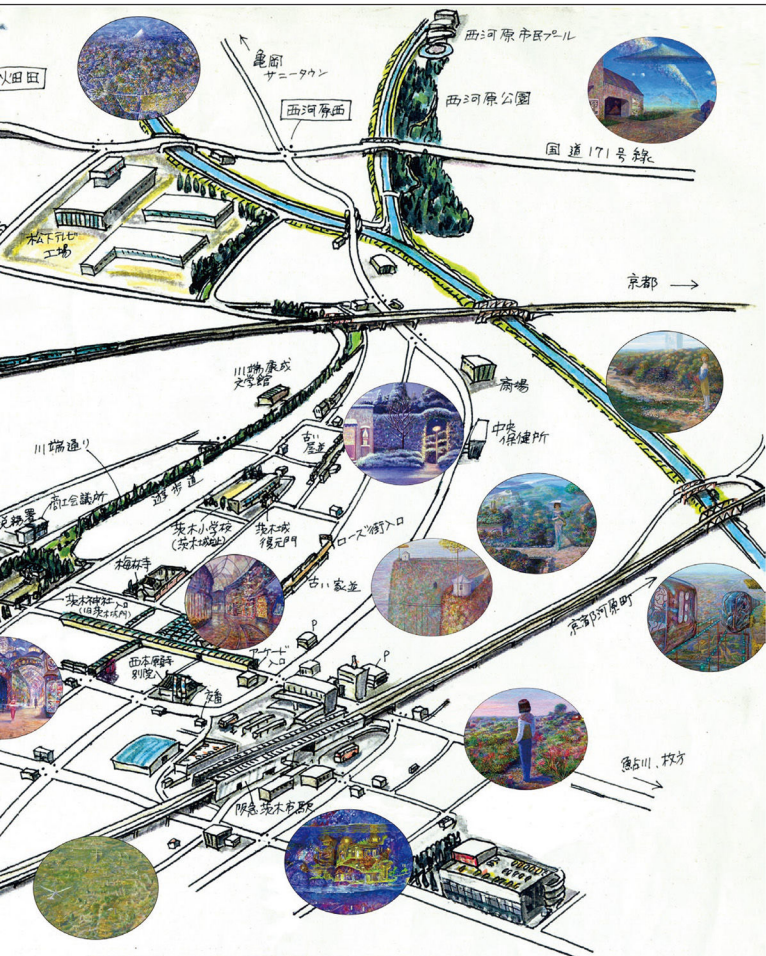
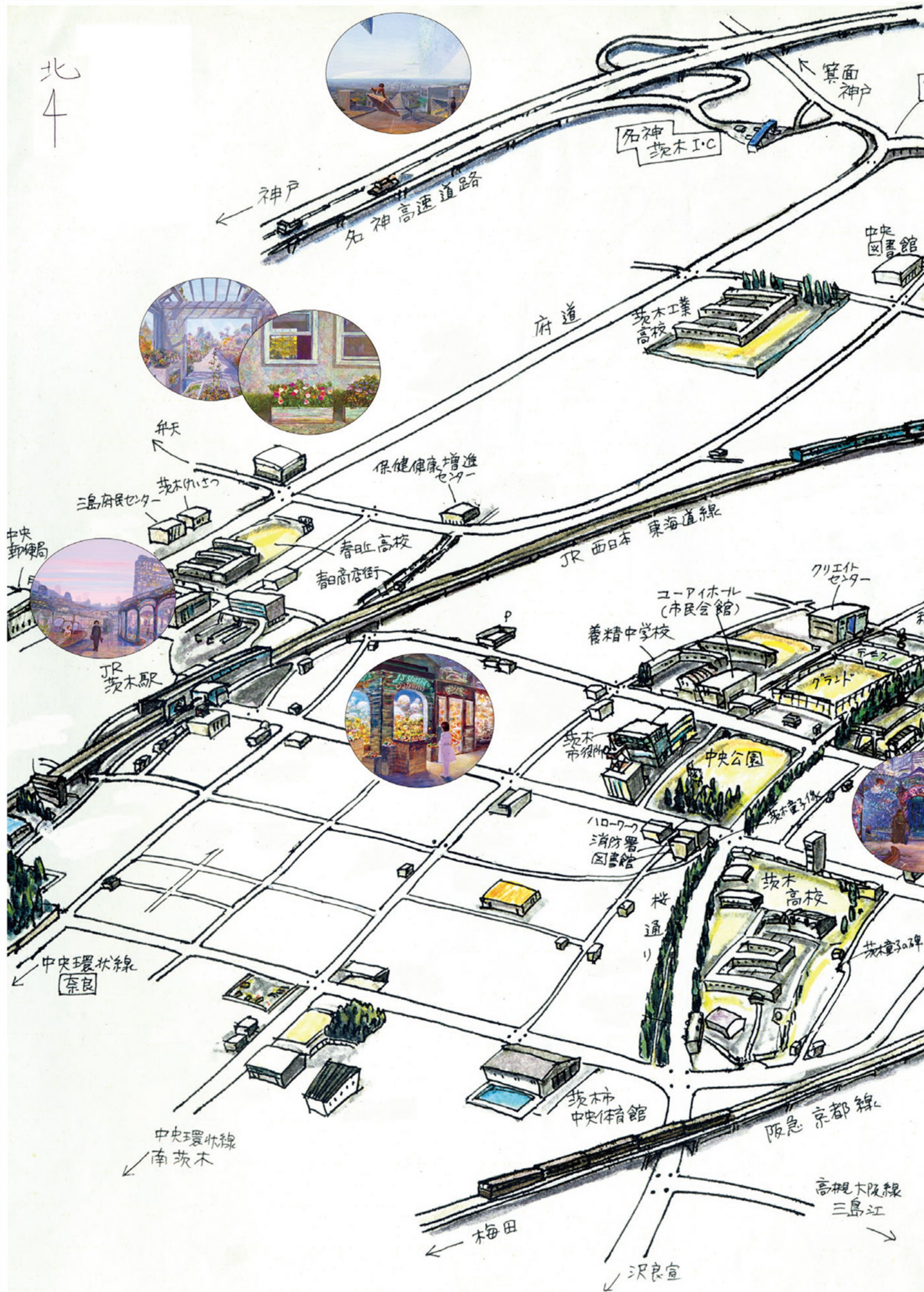
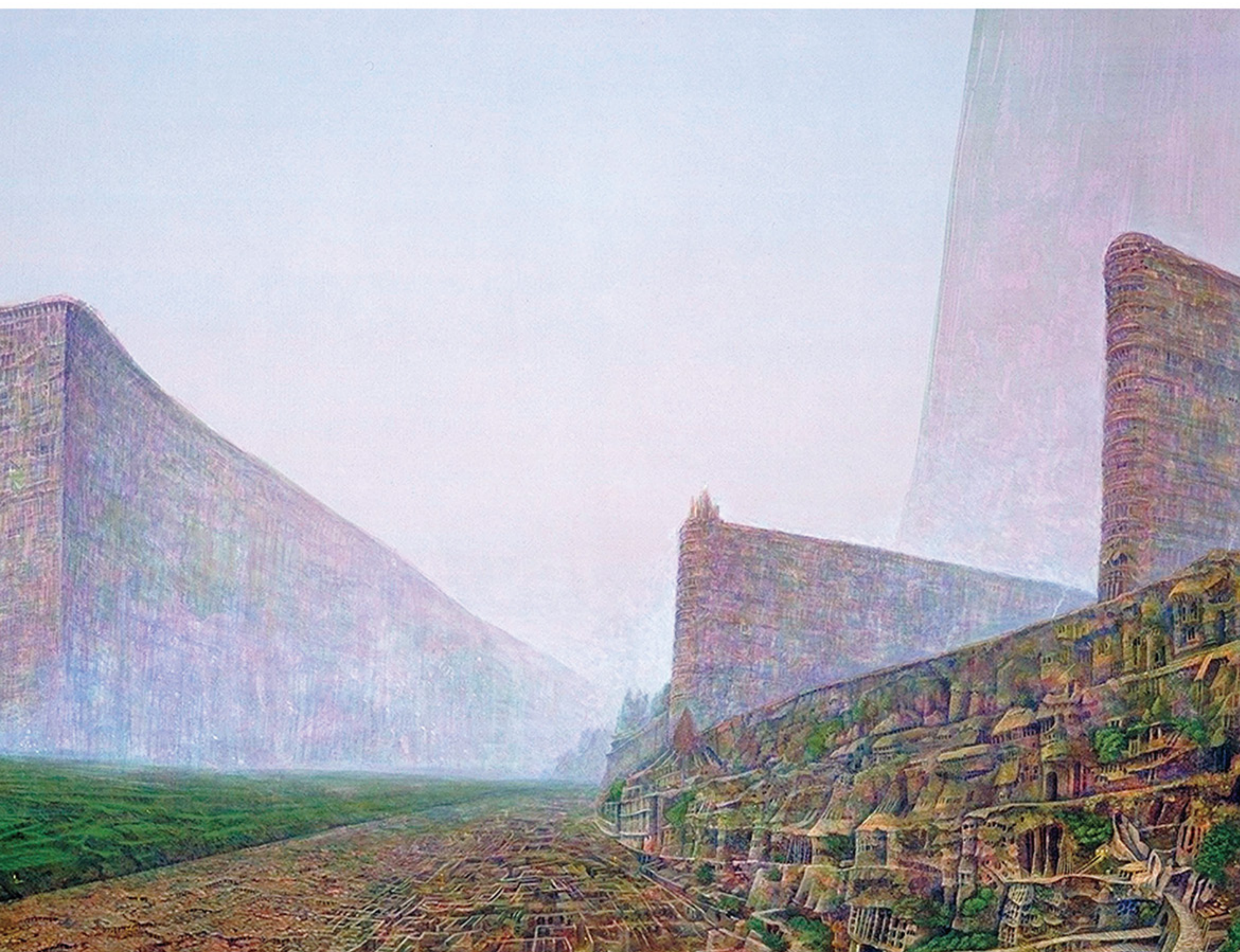
沢良宜

春日丘高校前の交差点。高校教師時代に撮影

Photo courtesy of Naohisa Inoue

《駅前》1980

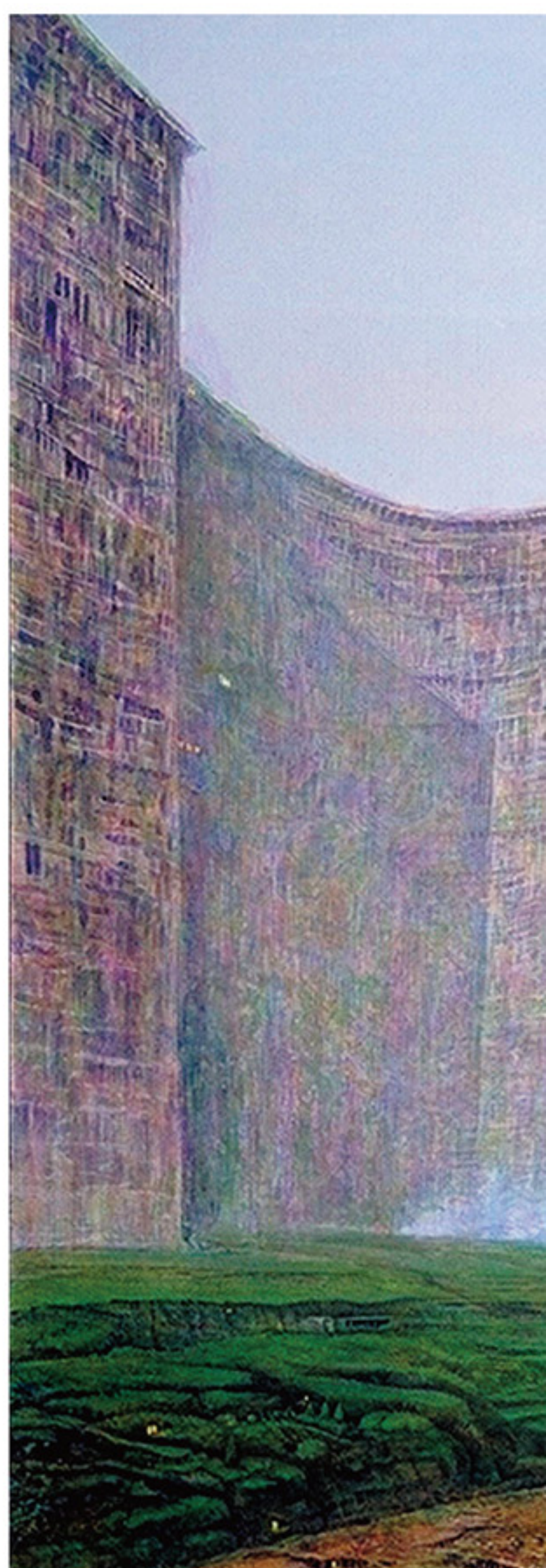
《駅前 II》1998

茨木市・本町商店街
1990年代撮影

Photo courtesy of Naohisa Inoue

《アーケードのにぎわい》1982

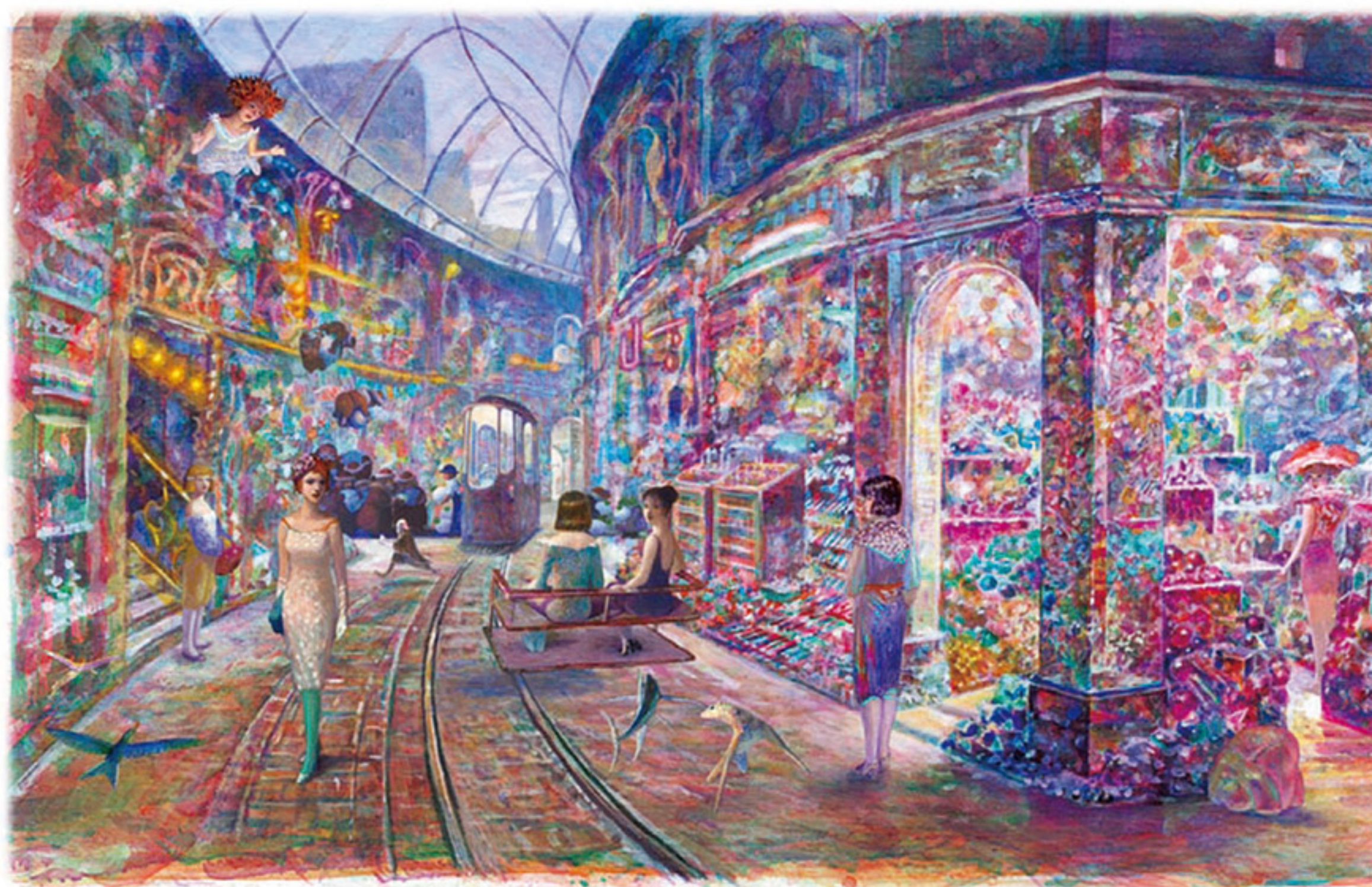
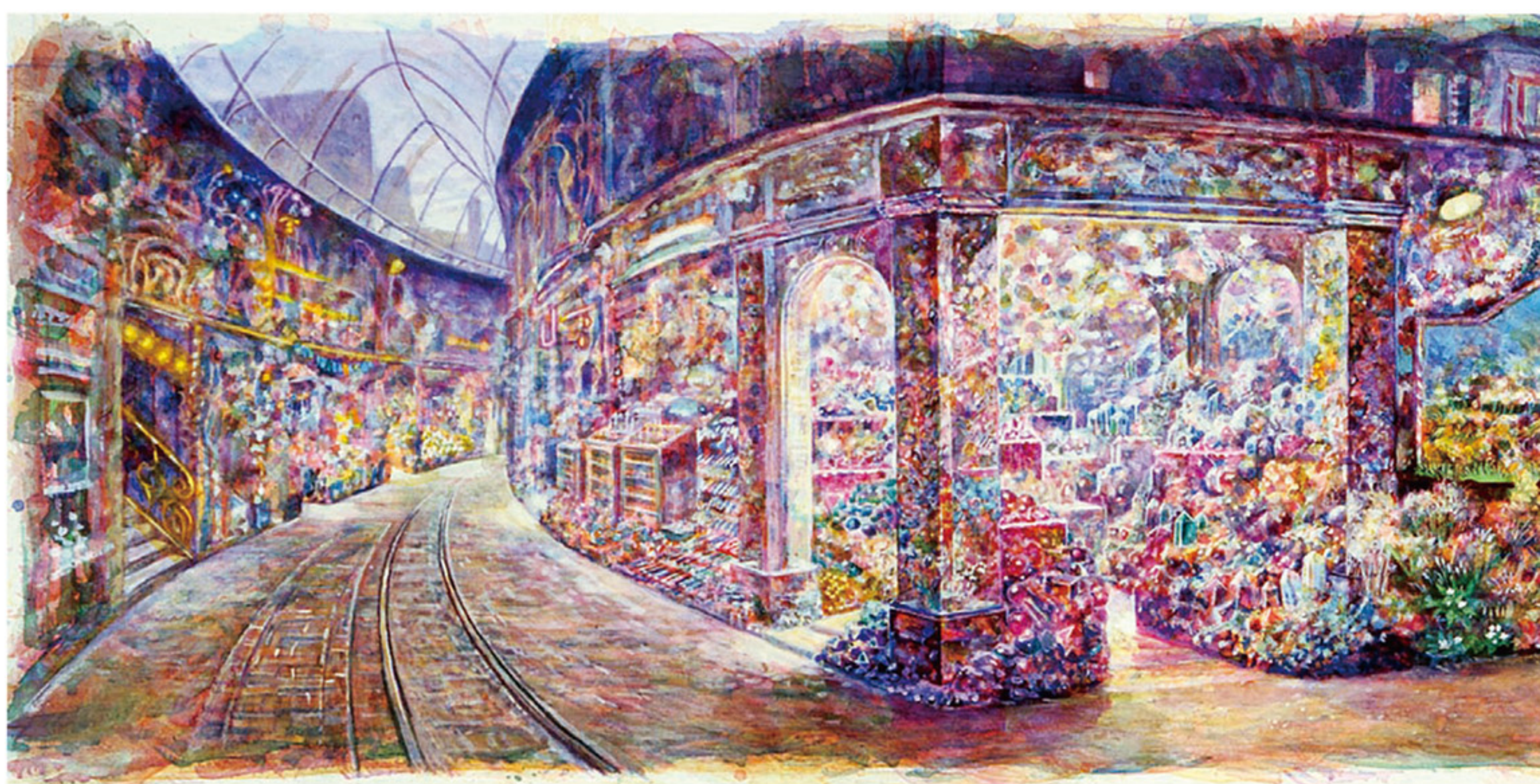
《アーケードの辻》1994

《アーケード 2009》2009

Photo courtesy of Naohisa Inoue　茨木阪急本通商店街
2004年代撮影

《アーケード》1979
６歳まで居住していた大阪市平野区の
市場のイメージも元になっています

イバラードの住人

イバラードに描かれる住人は実在の人物がモチーフ。でも子供と女性が多く描かれているので、「男性の大人はあんまりいないの？」「男性はイバラードへ行きにくいの？」などの質問があります。しかし、オトナもおじいさんも、男の子もいます。イバラードの住人は多かれ少なかれ、ほぼみんな魔法使いなので、見つけるのが難しく、絵にも描きにくいのだそうです。

Chronicle

井上直久とは？

1948年7月7日、井上直久さんは布施市（現在の東大阪市）に生まれました。絵に関する類いまれな才能をすくすくと伸ばし、今へと繋がる創作を紡いできました。1948年から2017年までを記録した井上さん直筆の貴重な年譜と共に、これまでの作品と秘蔵写真を紙幅の許す限りご紹介します。

NAOHISA CHRONICLE

井上直久の軌跡
1948年〜2017年

井上直久さん直々の手書きの年譜と写真と作品で、歩んできた半生を辿ります。
これまでの軌跡のほんの一部ですが、ご紹介いたします。

僕の妹とスケッチしている様子です

妹誕生

1948年、布施市（現在の東大阪市）で生まれる

高校の修学旅行です。今の奥さんとのツーショット

ボーイスカウトは、小６から中３までしていました

生駒山遊園地にて

大学時代の作品

大学３年生の時の作品
《エンツウジ》

大学２年生の時の作品
《青い立石》
圓通寺をイメージして

大学２年生の時の作品
《軍艦島》

大学２年生の時の作品
《異国の姫君》
ジョルジュ・ルオーをモチーフに

新婚旅行は奈良へ

1971年に結婚

日本画のような色とセザンヌのようなタッチで卒業制作を描きました。６枚一組の絵となっています

高校教師時代の作品

《赤い二つの星》

《家を刻んだ塔》

《飛行船と３つの塔》

《凧揚げをした日》

高校教師時代（1982年？）の作例。生徒に見せるために描いたものです

大阪府立春日丘高校に1973年赴任

《彫刻家のアトリエ》
20代の頃の作品

《花 1》1978

《カップの山》1977

《野の工房》
20代最後の作品

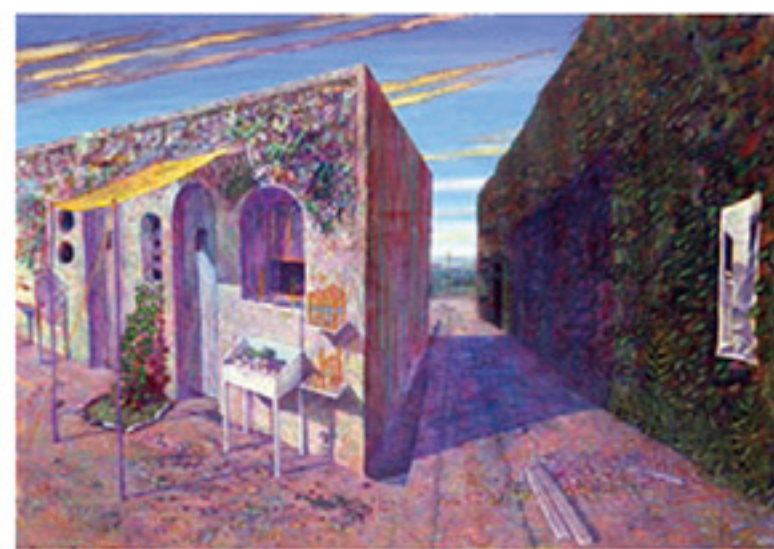
《瑠璃の髪飾》

《春四角》

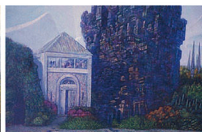
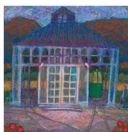
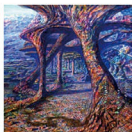
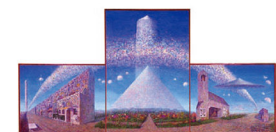
《コズミック・ハット》
20代最後の作品

奥津にて

水泳部顧問

《インカ鉄道（旧い道）》1975

《コダツノ 1》

春日丘高校からの帰路

美術部顧問

《Kotto Shop》1990

自宅で多重録音していた 1990 年頃の自室

高校教師最後の教室
20 年教えた教室ということで感慨深いものがあり、全景を描いておこうと教壇から見た視点で写生しました。粘土の授業の後にいい加減な雑巾で拭いたため、ツヤツヤの机にうっすら埃が残っている感じとか今見ても何か胸に迫るものを感じます

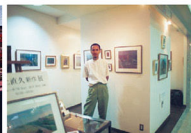
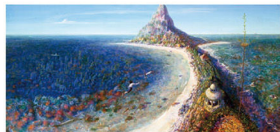
《駅のネイチャーショップ》

茶屋町にて 1992 年

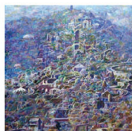
《バルコニー》1981

《キヨミズ》

《多層都市》

杉真理さん、松尾清憲さん、小室和之さんと

出版～耳すまの年

《海の回廊》

《エアシップの木》1995

《人形師の店》1994

《水路の丘》

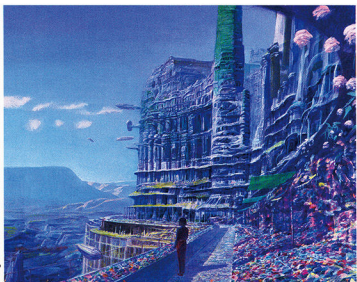
《海の娘》

《ヤシマ》

《イーストコースト》

《モトマチ》

1枚のDMから

これまで開催されてきた100回を超える個展の度に、関係者や友人などに送付されたDM。その1通1通から井上さんの想いが垣間見えます。

架空社からの画集出版記念展の開催にあたり、宮崎駿監督にも送付されたDM。東京初の個展は青山にあるPinpoint Galleryにて催されました

POST CARD

緑の美しい季節となりました。お変わりなくお過ごしでしょうか。　私こと

このたび、永年勤めた大阪府立春日丘高校を退職し、かねてより念願の、制作ひとすじの生活に入ることになりました。金沢美大を卒業してから大広でデザイナーとして2年、高校教諭として18年、勤務の一方で作品も発表し、終わってみれば、あっという間の楽しい歳月でした。その間、よりよい作品をと温かく見守ってくださった方々へ、これからは、そのためにすべての力を注いでまいります。

これまでの身にあまるご厚情ありがとうございました。どうぞ変わらぬご交誼をお願い申し上げます。

表面の作品は、近作〈麦秋'92〉です。春の実りのあとに、緑濃い夏と、豊饒な秋を迎えたいと願っています。

1992
April
井上直久

使っている写真は実際に井上さんが仕事部屋の窓辺で撮ったもの。高校教師を辞める際にたむらしげるさんに送り、これをきっかけにたむらさんが架空社を紹介してくださったそうです

個展の際にリピーターのファンの方に毎回送られるDMたち。これでも今までの量のほんの一部に過ぎません

interview

時間を辿るように

ほんの些細なきっかけから、壮大な物語が紡ぎ出されることがあります。人生においても、人との巡り会いという一見小さな出来事が、後の大きな展開を導くこともあります。ここでは、井上直久さんがまさに画家として歩み始めるタイミングで出会われた人たちとのお話をご紹介します。

たむらしげるさん
蒲田に生まれ、すぐに八王子に移り住む。印刷会社にデザイナーとして勤務後、1976 年、絵本「ありとすいか」出版と同時にフリーに。イラストレーション、絵本、マンガ、映像作品など幅広く活躍中。

対談 井上直久×たむらしげる

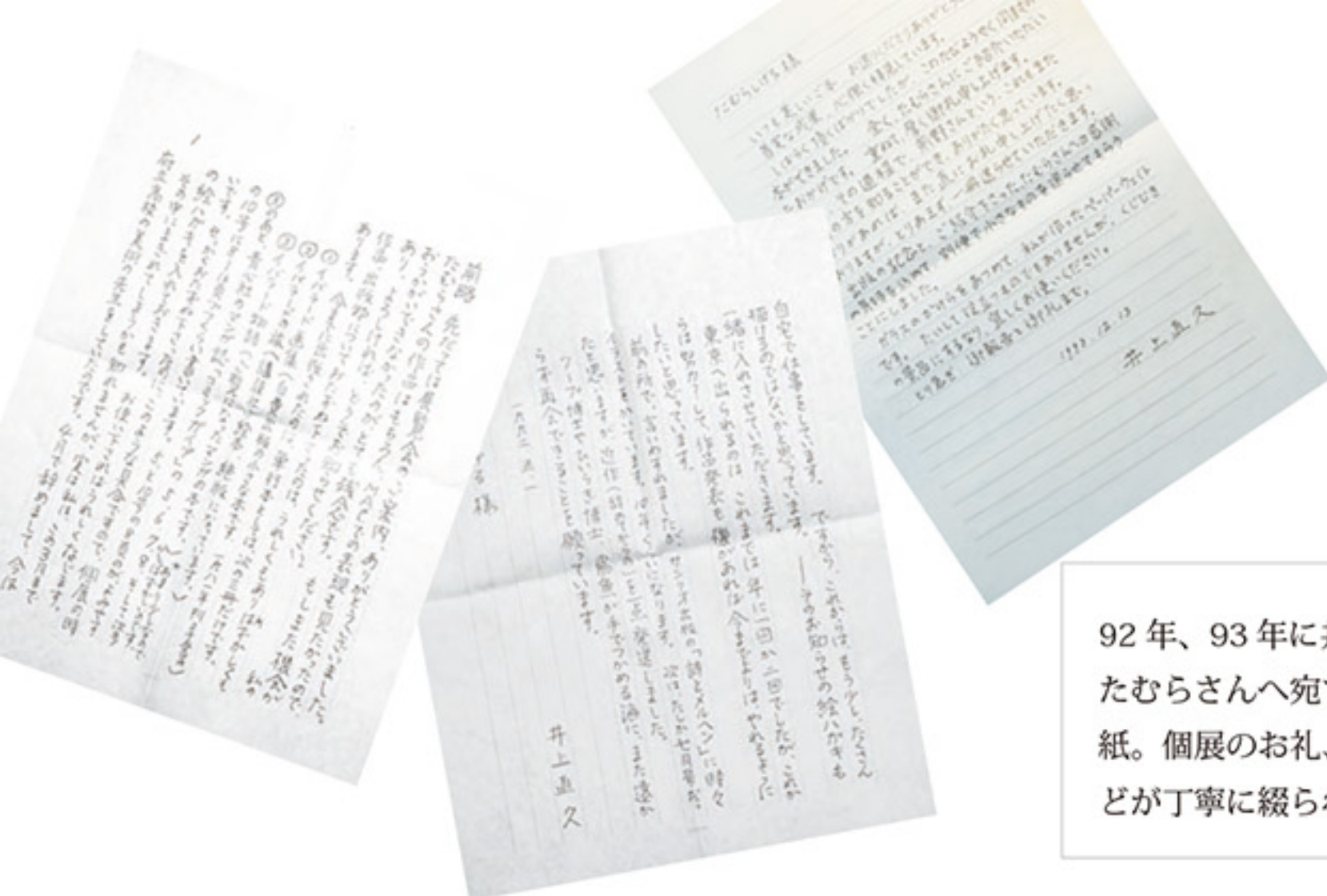
自分の世界を追い求めて——。表現への憧憬を語り合う。

今から 20 年以上前、高校の教師をしながら絵を描いていた井上直久さんは、19 年間の教師人生に休止符を打ち、画家一本に専念することを決意。その際に送った 1 枚のハガキから、たむらしげるさんとの絆が生まれました。お二人の出会いから、作品作りに対する姿勢をたっぷり語っていただきました。

たむらさん　最初にどうコンタクトが来たのか記憶にないんですが、井上さんから連絡が来たのが嬉しかったのはよく覚えています。

井上さん　僕が高校の先生をしている頃にたむらさんの漫画に出会い、「こんなの描く人って、いくつぐらいの、どういう人なんだろう」といろいろ想像してました。そこらの漫画家と次元が全然違う、それこそ宇宙人みたいな人かな、なんて（笑）。それで、僕が教師を辞める時、何の面識もコネもないのに、「とにかく辞めて、絵で生きていきます」という報告のハガキを送ってみたんですよ。それがなければ、たむらさんと出会うことも、出版社を紹介してもらうことも、その後のことも起こることはなかったと思いますね。

たむらさん　そもそも作品が良くなければそうはいかないですよ。実は、ハガキが来る前に『イバラード物語』の最初の漫画集をどこかの書店で

買い、今までにないアイデアを持った素晴らしい作家だと思っていたんです。ある意味、少しジェラシーを感じるぐらいの衝撃と、一コマずつ相当時間がかかっているので、このクオリティーでこれから描き続けて食べていけるのかなといった、ちょっとした心配がありました（笑）。
　お会いする前は、内向きで気難しく、自分の世界をひたすら描いている感じの人かなと想像していたんです。でも、実際は非常に外向的で、いろんな方面に広がりを持っていらしたので意外でした（笑）。

92年、93年に井上さんからたむらさんへ宛てられたお手紙。個展のお礼、近況報告などが丁寧に綴られています。

井上さん　たむらさんは外向的と言ってくださいますが、うちの奥さんからしたら、人の言うことを全く聞いていない、聞いているようで自分の事しか考えていないとよく言われます（笑）。

たむらさん　僕もそんなもんですよ、家族からは（笑）。

究極の形

たむらさん　僕の作品作りってね、組み合わせなんですよ。ブロックではないけれども、違うものがカチカチっとうまくはまった時にいい作品ができる。例えでよく言うんですけれども、炭素の原子がいろんな形で組み合わさり、石炭ができますが、ある組み合わせだとダイヤモンドになる。それに近いです。

井上さん　ダイヤモンドは、究極の形ですよね。

たむらさん　結晶は正8面体が多い。本当は市場価格ほど希少ではないらしいですが。

井上さん　何の役に立つかというと、観賞のためとか、ものを切ったりですもんね。

たむらさん　僕はそんなに「素材」が多いわけではないんですよ。組み合わさるのを静かに待っている感じです。

井上さん　それは、たむらさんのお人柄にも通じているような気がします。覚えていますかね？僕はたむらさんに、フープ博士やひいらぎはかせのような人物になれたらいいなとお話ししたら、たむらさんはあっさり「あれはお話ですよ」と。この人はやっぱり普通の人と純度が違うんだなと思いましたね。この方としゃべる時はちゃんと言葉を選ばなくてはと。譲れない情熱的な部分と社会評価されている部分もよくわかっていらっしゃるし、言葉の選び方だとか、ものの考え方だとか、論理的な思考の密度も、本当にすごいと思いました。

たむらさん　井上さんは当然、何か描く時にある程度考えて描いていらっしゃると思うのですが、他にももっとこうなるかなとか、どんどん描き足していける広がりを無限に持っていて、そこで終わらないのが素敵です。
　漫画の中の「不思議世界」が多方向からの視点でしっかり描かれていて3次元空間＋時間を感じます。こういう漫画は見たことないなと。自身の世界がちゃんと構築されていないと描けないですよね。僕が絵本を描き始めて、そういう部分をしっかりやらないとな、と悩んでいた時期に井上さんの漫画にちょうど出会ったので、それが羨ましくもありました。

井上さん　でもそれは途中で沸いたイメージで描いたやつなんです。実は僕は意外に行き当たりばったりなんですよ。ストーリーの流れとか人間関係にはあんまり興味が持てなくて、どちらかというと空間内の位置関係とかの方が好きなんです。たむらさんも、人情の絡みとかよりも、世界の不思議さがどんどん見えてくる作品なので面白いです。

たむらさん　ちょっと考え方をずらすと、すごく面白い世界が出てくるんですよね。実は今ちょうどそういう本を作っているところなんです。少しシンプルなものなんですが、それを自分自身と通じると言ってはあれですが、世界を創るってこういう事なんだろうなと。結局井上さんや僕のような絵だと、アシスタントを雇うということはできないので、全部自分一人で描かなくてはいけない。少しの心の揺れというのがダイレクトに伝わり、ほんの少しでも気に入らないと最初から描き直しです。今制作中の絵本は、印刷インクの色ごとに別描きしたハーフトーンのモノクロ水彩画です。それをスキャニングしてレイヤーにするとA4-400dpiで各色20層ぐらい。

井上さん　たむらさんの作品

は、さらさらさら～っと描いて、「あ、できちゃった」という感じで作られているのかと……違ったんですね。絵本を描くのにレイヤー分けしているなんて。ここまでしている人は他にいないんじゃないかな。

たむらさん　読者の方にしたら、そんなのは全然関係ないので。苦労して描いている印象を与えてしまっては、絵本が重苦しくなってしまうので、さらっと描いていると思われるのが理想です。絵本の内容にもよりますが。

遊びのような仕事とは違う

たむらさん　僕たちの仕事は、遊びのような仕事とよく思われがちですよね。

井上さん　知らない人には「好きな絵を描いて、好きな漫画描いて生活をしていていいですよね」とよく言われますけれども、こういうのって結構大変なんですよね。その期限までに出さないといけないとか、出すからには面白いのにしたいとかね。

たむらさん　仕事になっちゃうと義務が出てきちゃうんですよね。売れないと暮らせていけない上に、好き勝手描いて良いかというと、それではホビーなんで。厳しい世界ですよね。販売する絵本や絵は商品ですから。

井上さん　そういうのとは別になんですが、画商さんにどんなのが売れ筋かたまに聞くんです。今のお客さんに喜ばれるのが何か教えてくれたら、それを描くからと。そしたら、「今までのと違った作品を見たら喜ばれますから、井上先生の好きな絵を描いてください」って。

たむらさん　わあ、いいなあ。よく個展に足を運んで見てくださるお客さんは、いつもと違う作品があると嬉しく感じるものですよね。

井上さん　好きに描いていても、《多層海》シリーズだと大きくて高いから買えないので、小さいのを描いてほしいという人も（笑）。でも、それはそれで面白いと思います。最小限何があったら、《多層海》になるのかなと。

たむらさん　井上さんは描いていて、デジャヴを感じませんか？　僕は雑誌の表紙連載でしょっちゅうです（笑）。

井上さん　僕は逆に、物忘れがいいから（笑）。いいアイデアだと思っていたのが、遡ってみたらすでに描いていたりします。でも、忘れて描いているから、生えている植物の種類とか季節が変わっているんですよ。

世界が広がった先

たむらさん　実は、2000年代ぐらいまで、僕が描く絵本は子供が好きなはずと思っていたんです。絵本の王道を描いていると。

井上さん　違うんですか。

たむらさん　多くの子には書店や図書館で僕の絵本が見えない。少数の子にだけ見えるらしいのです。井上さんの作品もそれに近いのかなあ。

井上さん　そうですね。

たむらさん　子供は自分から周囲に世界を広げていくんです。最初に自分自身がいて、お母さんがいて、お父さんがいて、とりあえず家の中で完結する。それがある日、公園に出掛けた時なんかに、周りのいろんなものに繋がり、世界が広がっていくんですよね。僕たちの描いているものは、はるか遠い世界なんです。

井上さん　そういう世界をひと通り見てから入っていけるようなね。中には、並行して入って行く方もいるかもしれないですけれども。

世界の共有

井上さん　描いた時期と読んだ時期の時系列はわかりませんが、僕の漫画は、たむらさんの漫画も影響していると思います。その世界がどういう世界なのかを見せるだけの、淡々と流れていく漫画があってもいいんだと。とても面白く感じました。

たむらさん　僕らは世界を共有できるのがいいですよね。井上さんの世界を借りて、僕自身が描いてもいいし、逆もいい。そもそもその漫画を偶然手にしていなければ、僕らは出会っていないわけですし、今の僕たちの繋がりも、20年以上にわたる関係もないですからね。

井上さん　本当にそうですね。今日はじっくりお話しできて本当に良かったです。

画家・北見隆
独立を後押しした恩人

北見隆さんは、井上直久さんが独立の決断をする後押しをしてくださった方の一人だそうです。古くからのよしみである北見さんに、井上さんについてお話を伺いました。

はっきりとは覚えていないのですが、おそらく月刊誌『詩とメルヘン』のパーティー会場で初めてお会いしたのではないかと思います。１９８０年代の前半と記憶しています。

常々、『詩とメルヘン』で井上さんの絵を拝見していて、作品のサインの入れ方が印象的で、どんな方なのかなと思っていました。右下に小さくサインを入れるのが一般的なのですが、井上さんのは赤のカタカナで、絵の下の左端から右端いっぱいに、等間隔に隙間を空けてサインされています。几帳面なのか目立ちたがり屋なのか、どういう人なんだろうと、気になっていました。井上さんがかつて広告代理店でデザインの仕事もされていたと伺い、納得しました。スタイリッシュな方でもあるのですね。

独立を悩まれていた当時は、僕だけでなく、いろいろな方にご相談されていたのではないでしょうか。井上さんは、広告代理店を退職後、学校の先生を勤めながらの二足のわらじで、『詩とメルヘン』に絵を執筆されていました。先生という職で固定給を取るべきか、大好きな画業に専念するべきか迷われていたようです。井上さんはことあるごとに、僕のアドバイスで独立を決めたとおっしゃり、「僕がリスペクトしている方で、この業界に入るきっかけをくれた人です」と、会う人ごとにご紹介してくださるのですが、僕はその時何を言ったのか全然覚えていないのです。無責任な話ですよね。嬉しいやら気恥ずかしいやら……冷や汗ものです。

印象深いエピソード

変なエピソードしか覚えてないのですが（笑）。立食パーティーなどで、グラスとお皿で両手が塞がると料理を食べにくくなりますよね。会場で井上さんとお会いした時、僕がお皿の上にグラスを乗せて、料理を取ったり食べたりしている様を見て、「このスタイルは便利だ！」と、えらく感心されたのを覚えています。妙な事で驚かれたものです。

昔と変わらない律儀さ

実は１９９５年秋に、僕の仕事場が火事になり、その年の暮れの『詩とメルヘン』パーティーで、僕は話の種のつもりでそのエピソードを井上さんにお話したんですよ。そしたら、井上さんは後日、わざわざご丁寧なお手紙と共に、お見舞金を送って来てくださったのです。そんなのこちらは期待していたわけではないので、本当に律儀な方だなとびっくりしました。その時の事は今でもとても感謝しています。律儀といえば、井上さんはいつもコメント付きで個展のＤＭを送って来てくださるんです。ＤＭだけでなく、見に行った展示の礼状までいただく事もあります。僕なんか友人として、ただで絵を見させていただいて、その上たわいもない話をして帰るだけの客なのに……人として誰でもできることではないと思います。個展でも、お邪魔した時にはわざわざ席を作って、雑談に応じてくださいますしね。昔と変わらずにお付き合いし続けてくださるのは、本当に嬉しい限りです。

尽きないイマジネーション

イマジネーションの無限の広がりにいつも感服しています。何気ない風景からよくぞここまで空想の翼を、という思いを毎回抱かされます。以前、版画家の柄澤齋さんにお会いした時、この方はこの世ではないような光景を、最近絵に描かれているのですが、風景が全部自分の頭の中で見えていて、それらを取り出すように絵を描いていると、霊媒師のような事をおっしゃっていました。もしかしたら井上さんも同じタイプの作家さんかも知れません。怖い話もいろいろご存知と伺っていますし。以前井上さんに「井上さんの絵は目をつぶって、網膜にもや～っと浮かんだ物を描かれているんじゃないですか」とお訊きした事があります。目をつぶっても、完全な暗黒ではなく、良く観察すると、残像とかアメーバのようなものが見えますよね。井上さんはそれを視覚化しているのではないかと、僕は推理したわけです。そしたら、井上さんは「それじゃあ、飛蚊症ではないですか！」って笑っていました。

浮かんで来たイマジネーションを的確に表現でき、それを過不足無く人に伝えられるという技術は、並大抵のものではありません。井上さんのイバラード世界は今後もイマジネーションが尽きる事がないと思いますので、ご本人とお会いすることも含め、作品を拝見するのをとても楽しみにしています。

北見隆さん
東京生まれ。宝塚大学新宿キャンパスで教壇に立つ傍ら、フリーランスとして書籍の装丁、挿画、絵画、版画、立体作品などを手掛けている。

北見隆さんブログ情報：
TAKASHI KITAMI from the studio
URL：http://www.ne.jp/asahi/takashi/kitami/

「何観た？」「何読んだ？」

「何聴いた？」「何した？」

井上直久さんは、これまでに何を見て、何を感じ、どんなことをしてきたのでしょうか。創作の源となるものが一体何なのか、少しでも知りたいと思うのは、熱心なファンだけではないと思います。

そこで今回、井上さんが心を動かされ、影響を受けたという「読んだ本」、「観た映画」、「聴いた音楽」、また創造力や発想力の源ともなっている「趣味」をご本人にセレクトしていただきました。

「何読んだ？」

――今回の特集のために、お好きな作品を、読まれた本、観た映画、聴いた曲、とそれぞれ選んでいただきました。それらは自ずと井上さん自身の血肉となり、作品創作にも影響を与えているものもあるかと思います。井上さんの興味の幅が広い分、挙げていただいた作品も多く、残念ながら割愛となったものも多いと思うのですか、いかがでしょうか。

井上さん　絞るのは本当に大変でした。もっと挙げたいものがたくさんあったのですが……。無理やりではありますが、まとめてみました。

『少年ケニヤ』作・山川惣治

3～5歳の頃大ファンでした。老いて見捨てられたかつての勇者と、父とはぐれた健気な日本少年が、アフリカの奥地で助け合いながら、誇り高く困難に立ち向かうという冒険絵物語です。

当時は産経新聞に連載されていまして、後に単行本になりました。敗戦からの復興に立ち上がる日本人を励ます良いお話でした。僕は父の膝の上で、毎日ワクワクしながら、読み聞かせしてもらっていました。毎朝のそのひと時がそれはそれは楽しみで、今思えば、この上なく幸せな時間でしたね。

宮澤賢治

大学生の時の通学の中、列車の中で繰り返し読み、感動したのを今でも覚えています。あらゆる人の幸せを願う、無私の世界観、作品の中に感じられる色彩感、小さなものに対する愛情、ユーモアのセンス、なんともいえない幻想性……挙げたらきりがないくらい、魅力に溢れています。

全作品、大好きです。なので、今の僕の思想自体が、彼の大きな影響の下にあると言っても過言じゃないです。

『ロビンソン漂流記』
作・ダニエル・デフォー

僕は、この本が大好きな少年でした。いろいろ工夫して生き延びる姿勢だけでなく、たった一人で生活するという境遇も魅力でした。しかしその境遇も、船の積荷にあった火薬や鉄砲、麦の種、何より文明社会から持ってきた知識の恩恵によって保たれていて、やがて仲間もでき、文明社会に帰れたんでしたよね。そこが、もし晩年まで孤島で一人孤独のまま死んでしまうという日記で終わっていたら、あまりに悲惨で読めない話になっていたと思います。

「アシモフの科学エッセイ」
作・アイザック・アシモフ

この本を読み、もし宇宙があらゆる秩序で無数にできたら、地球の周りを太陽が回っている天動説の宇宙や、地面が平たくて端へ行くと海が滝になっている宇宙があっても面白いのでは、と思いました。

アシモフの科学エッセイ10巻『存在しなかった惑星』は、繰り返し読みすぎたせいで、バラバラになってしまいました。

手塚治虫

幼い頃に読み、知らなかった世界が広がりました。

『けいおん！』作・かきふらい
『へうげもの』作・山田芳裕

世の中から2周遅れながら読みました。これ、前者はたいした事件もなく、ささいな人間関係の妙味を描いた作品なので、日本伝統ジャンル『枕草子・源氏物語』型に似てますね。後者は大事件に翻弄される物語なので、日本伝統の『平家物語』型だと思いました。マンガながらも、日本文化の継承と革新をしてるところに感心しました。

前者はほのぼのとしていますが、後者は少し〝厭世的〟で、人間関係と絵にえぐい部分が多少あるので、苦手な方もいるかもしれません。

おかげで利休の意図した「侘び」を考え直す契機になり、清貧を尊ぶ、世界に誇れる珍しい日本の文化がここから来ているのかも、と再考させられ、いろいろ勉強になりました。一方『けいおん！』はこれも日本的な細やかな心遣いの典型ともいえる、4コマずつ縦に描かれた絵巻の様ですね。

その他、Bertrand Russell『哲学入門』、Franz Kafka『家長の心配』『城』『審判』、Jonathan Swift『ガリヴァー旅行記』『桶物語』、Lewis Carroll『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』、大伴家持『万葉集 』、Jean-Eugène Atget『アジェのパリ』、吉田戦車『伝染（うつ）るんです。』、山上 たつひこ『がきデカ』、魔夜峰央『パタリロ！』、杉浦茂『 少年西遊記』、Albert Camus『異邦人 』、Stendhal『赤と黒 』、鴨川つばめ『マカロニほうれん荘』、稲垣足穂、J. R. R. Tolkien『指輪物語』、夏目漱石『吾輩は猫である』、Laurence Sterne『トリストラム・シャンディ』、W. Somerset Maugham『太平洋』、九井諒子『ダンジョン飯』　など　（順不同）

「何観た？」

『Groundhog Day
（恋はデジャ・ブ）』
監督：ハロルド・ライミス

冬眠から覚めた小さな動物グラウンドホッグが、自分の影を見て、また冬眠するか、それとも春の訪れを知るかというのをイベントにした日のお話。そのこと自体、自分のあり方が、冬眠の果てしない繰り返しか、春の到来かを決めるという映画のテーマになっています。原題は、この映画が単なる成就した恋の話ではなく、世界観の表明であることを示しています。ラストの雪融け、無限ループから抜け出した日の心温まる描写が心に沁みます。しかし、『恋はデジャ・ブ』ですか、そうですか……。あなたにはこの映画、あんまり響かなかったんですな、という邦題に思えてならないんです。それはまぁ、わからない人がいるのは当たり前なので、ちっとも構いません。しかし困るのは、この能天気な恥ずかしい題名のおかげで、この素晴らしい映画を誰かに薦めたい気持ちが萎えてしまうことなんです。

『The Illusionist
（イリュージョニスト）』
監督：シルヴァン・ショメ

素晴らしかったです。10分も見ないうちにもう一度観に来ようと思った数少ない映画です。アニメ映画では久しぶりに目頭を押さえました。背景の風景が素晴らしかったです。人物の描写もさすがが、バンドデシネの国。くるりと肩が回るところなど、実に自然な立体感で、見事な描写です。特筆すべきは色彩の統一感。深みのある渋い色で抑えた中に、意味のある切ない色が……。ヒロインのワンポイントも初めて買ってもらった落ち着きのある赤い靴から、オフホワイトのコート、白い靴、水色の爽やかワンピースと色が変化し、これが心の変化を語る。セリフは少ないのに、優しい心遣いが随所から汲み取れ、仕草と表情で気持ちが痛いほどに伝わります。

その他、『Pride and Prejudice』、『Chitty Chitty Bang Bang』、『Blade Runner』、『Week-end』、『Les Parapluies de Cherbourg』『Miss Potter』など　（順不同）

「何聴いた？」

The Beatles（ザ・ビートルズ）

特に好きなのが、「In My Life」ですが、全曲、大好きです。なんせ僕が高校1年生の時に、ビートルズがデビューしたので。つまり、リアルタイムで影響されたんです。大学生の時に雪の金沢の下宿で初めての全世界同時中継で「All You Need Is Love」の演奏を生放送で観たんですよ。歌詞も曲も音響効果もアルバムのコンセプトもその美術も、全て自分たちで作るという姿勢からは、音楽だけではなく創作活動全般や生き方についても示唆されました。ビートルズの曲は楽曲としても演奏としても素晴らしく、しかし、僕のように40数年以上も聴いていると、さすがに同じ録音はもう聴けなくなって、アウトテイクや海賊盤を探し、それも尽きれば、そっくりの録音のトッド・ラングレンやお見事なパロディーのラトルズにまで転んでいきます。もし、ビートルズよりもさらにテクを磨きこんで、録音も最新のクオリティーの音で勢いも本家以上、曲の解釈も納得できる演奏をしてくださるミュージシャンがいるならば、間違いなくそのレコードを買ってしまうと思います。クラシック音楽の世界はそういう楽しみで成り立っていて、パロディーやコピーではない、アートとしての演奏だと思っています。

「William Tell Overture（ウィリアム・テル序曲）」
Gioachino Antonio Rossini

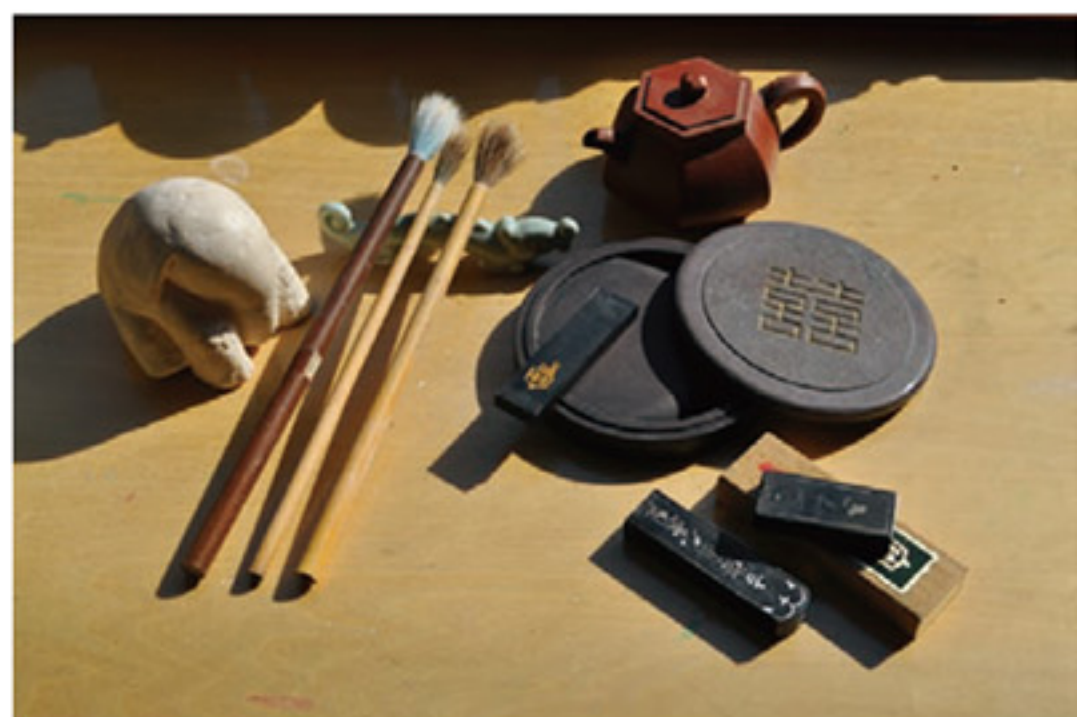
4歳くらいの時に父の膝の上に乗って聴いてました。「ここは夜明けのシーン」「ここは馬に乗って走っているとこ」。父が膝でリズムをとってくれたのが何よりの解説でしたね。

その他、ナポリ民謡「Santa Lucia」、Bob Dylan「Knockin' on Heaven's Door」、The Honeycombs「Have I The Right 」、Glenn Gould「Goldberg-Variationen」、Queen「The Show Must Go On」、Sylvie Vartan「Cherchez l'idole」、Franz Liszt「Hungarian Rhapsodies」、Roberta Flack「Killing me softly」、Bob Hope「Buttons and Bows」、Paul Simon「A Church Is Burning」、Pat Boone「Love Letters In The Sand」、The Rolling Stones と「Paint It Back」などでの Brian Jones の演奏、Herman's Hermits、Kraftwerk、Pink Floyd、The Hollies、Depeche Mode、The Animals、Sparks、Johann Bach、など　（順不同）

「何した？」

陶芸
Pottery

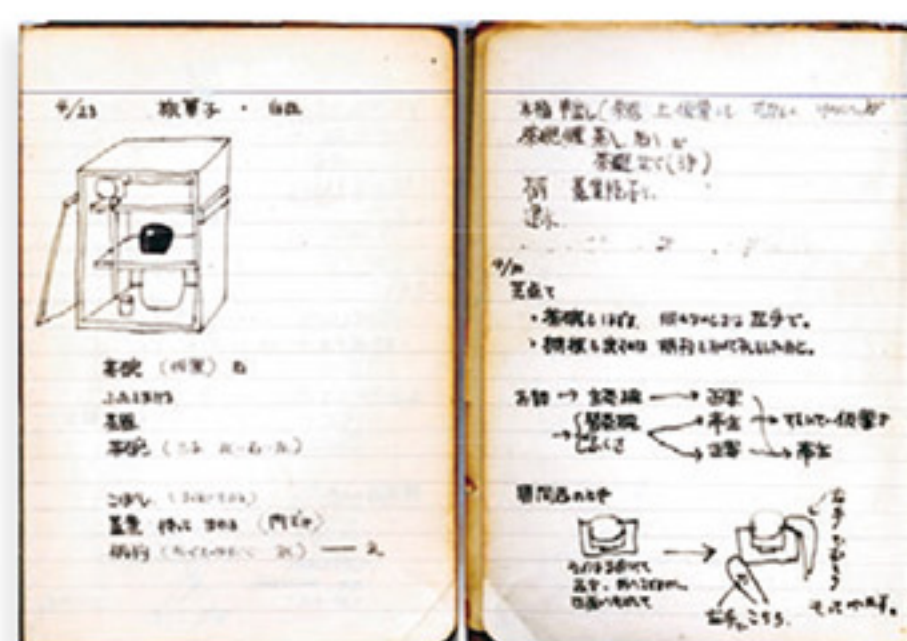
高校教師の頃、授業で陶芸をしようと校庭のはずれに耐火レンガを積んで陶芸窯を作りました。しかし、温度が上がらず、楽焼きでしかできませんでした。結局校費で電気釜を買ってもらい、授業に陶芸を取り入れました。

書道
Calligraphy

金沢美大生だった頃、隷書、良寛、会津八一の書に目覚め、自己流の手習を続けました。

茶道稽古の際の覚え書き

茶道
Tea ceremony

写真は大学生の時、金沢で私が習っていた表（千家）の村上宗信先生。きっかけは、友人が茶道部の女子生徒に憧れまして、しかし男子生徒一人だけではということで、僕は無理やり入部を頼まれたのが始まりなのですが。大学時代の４年間通い続け、免状と地方講師という小さな看板のようなものまでもらいました。大げさな言い方かもしれませんが、今にして思えば、お茶を習いに行ったのではなく、お茶人というものを見るために通ったのかもしれません。大学で４年間通ったのは、貴重な日々でした。

Photo courtesy of Naohisa Inoue

ギター
Guitar

ギターは 30 年ほど前に買った　S.Yairi が最初です（最近同名のブランドが復活したとも聞きましたが、私のは初期型です）。
当時５万円、普通の右利きのモノですが、弦を逆に張り替えただけでもこういう形だから大丈夫だろうと左用に使っていました。
今よく弾いているのは Martin HD-28V です。

植物
Plant

多肉植物、特に育てにくいリトープス（女仙：メセン）が好きです。胡蝶蘭、デンドロビウムなど冬になるとアトリエの窓辺は鉢だらけになります。

リトープス（多肉植物）

カメラ
Camera

ウジェーヌ・アジェとかウィン・バロックが好きで一時は写真にも凝っていました。大学入学時、学校の課題でカメラが必要だったので、父にオリンパスペンＦを買ってもらいました。（株）大広に入社のお祝いに、ニコンF2を買ってもらいました。どこに行くにもカメラを持ち歩いています。

シンセサイザー
Synthesizer

上：Roland V-Synth
中央：YAMAHA DX-7 Ⅱ
下：YAMAHA PORTATONE
最初はRoland System-100（101、102のユニット）。
その後YAMAHA DX-7 Ⅱ、ドイツのDoepfer A-100、ローランドV-Synthなどいろいろ試しました。

ハーモニカ
Harmonica

個展の演奏会の時などに持ち運び、ピアノの演奏にあわせて吹きます。Ｇ調 Ａ調 Ｂｂ調 Ｄ調 Ｅ調 Ｆ調全て揃っています。ハーモニカはトンボの複音をキー音別に10本ほど持っていて、キー音さえ合えばすぐに演奏できるようになっており、最近愛用しています。

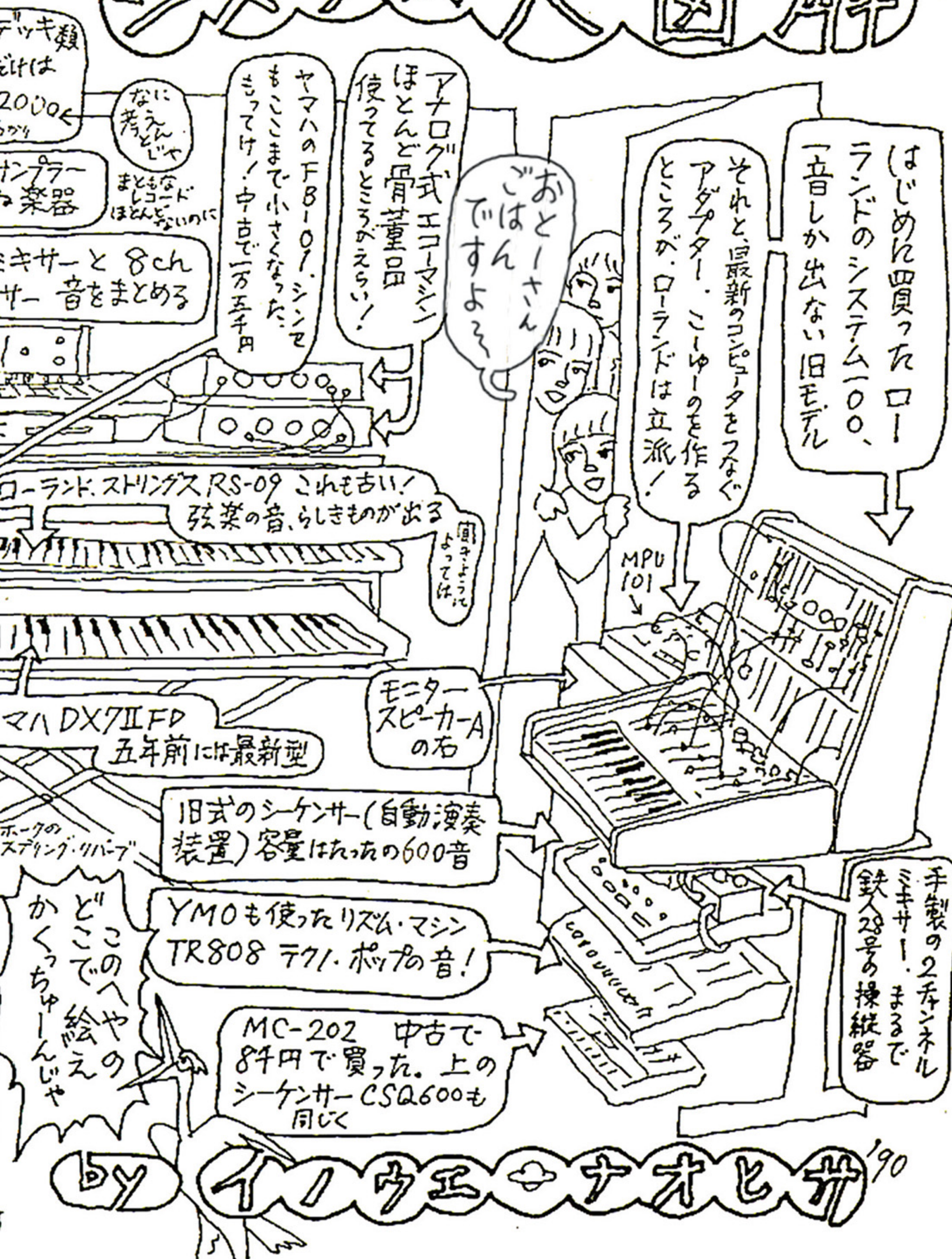
旅行
Traveling

マレーシア、スウェーデン、アメリカ、フランス、中国など、日本以外にもたくさんの場所を訪れました。40歳くらいまで海外に行く機会がなかったのですが、環境の違うところへ行ってみると、いろいろ想像していたものが、旅をすると本当に実在していたり想像以上だったりするので面白いです。

自作の曲を録音したミニディスク。
・公園の歌
・カエルの歌
・青磁のテーマ

いろんな楽器でいろんな曲を作るのが楽しいです。梨が好きなので、大学時代に『Pear Afternoon』という弾き語りの曲を作ったこともあります。

その他
ピアノ、アコーディオン、リコーダー、熱帯魚、ボーイスカウト、キャンプ、山歩き、スキューバダイビング（シュノーケルでの素潜り）、飯盒炊爨、水泳、3D立体視（ステレオグラム）の製作、ブーメラン、など

右がS.Yairi NewYorker type, 左がMartin HD-28

1990 年頃の井上さんのアトリエの様子を描いたイラスト。音楽好きが高じて、ピアノ、シンセサイザー、ギターなども置いていたため、一時はレコーディングスタジオに近い状態になったこともあったそうです

モニタースピーカーBの右。箱は自作
アルテックのシングルコーン
マルチトラック・テープレコーダー
A3340S〈4チャンネル〉とMSR16
〈16チャンネル〉どちらもTEAC社製
アンプ、カセットデ
レコードプレーヤお
すごい。Y社GT-
ローランドのサ
S-330 ものまね
24chミ
ラインミキ
イコライザー
サンプラー用のディスプレイ
MPU 401
この人は美術の先生です
モニターAの左
ヤマハの2本ヨンキュウパくらいの
PC-9801F
8インチドライブ付き! こんなの
今でも使ってる人いるんだろうか?
キーボードおよびマウス
ソフトはダイナウェア社のプレリュード
コード類
音が出ないので
スパゲティのようになった
コードをチェックする筆者
コードの半数は自作のため…
…よく接触不良をおこす
きこえてない

イバラードの作り方

無いものを形にするシンプル・メソッド

過去の講演で配布された井上さん直筆の資料を手がかりに、
「イバラードの作り方」のエッセンスに触れてみましょう。

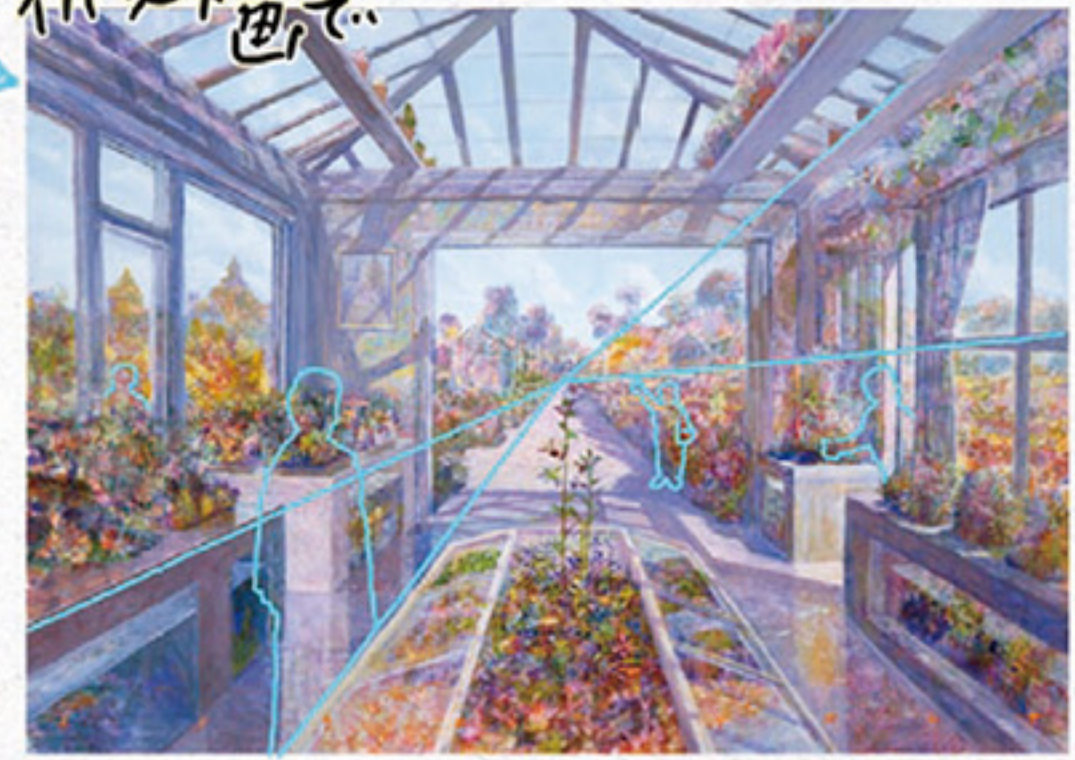
井上直久 1/12

(1) イバラード（不思議の町）の作り方

① 無いものを形にするには方法Aがある
② 無いものを思いつくにも方法Bがある
③ 形にする方法(①)がないと、思いついても(②)形にできない。

(2) 無いものを形にする方法を図解

のでまずA　わかりやすくイバラード画で

① 遠近法（透視図法）
② 彩色技法（色彩遠近法）
③ 陰影法（光線追跡法）

B (3) 意識していないものを、思いつく方法

① 遠い記憶（「おぼえている」からにはそこに何かがある）
② 夢 —— 夢の景色は、心にあるものでできている
③ あいまいな形の中に連想を探る　無意識にてがかりを

(4) 以上の図解説明パネル・作品にあわせ、その方法がわかりやすく現れた「イバラード画」を展示する。

interview

カギを握る人

これまでにどんな方に出会われたのかは、その人を語る上でとても重要です。井上直久さんには、「人を惹き込み、巻き込む力」があるのでしょう。そんな「やってみたい」や「面白そう」といった、ビジネスだけの感情を超えた結びつきで一緒にお仕事をされた人たちとのお話です。

エッセイ

井上直久さんのこと

鈴木敏夫

2008年に開催された「茨ラード絵画展」パンフレットより、スタジオジブリプロデューサー、鈴木敏夫さんのエッセイを再録。井上さんとイバラードに対する敬意と、もっと深く楽しむためのメッセージがつまっています。

井上直久さんと僕が初めて出会ったのは、スタジオジブリが映画「耳をすませば」を制作したときなので、もう15年前のことになる。

宮さん（宮崎駿）が、映画の中に出てくる主人公の中学生・月島雫の空想シーンを井上さんが描く〝イバラード〟の世界で作れないだろうかと考えたことが、そもそもの始まりだった。宮さんは「耳をすませば」の準備中に、たまたま井上さんの個展（東京での初個展）の案内ハガキを受け取り、ふらりと出かけて見た井上さんの絵がとても印象的だったのでそう思い立った。井上さんご本人にもその時初めて会って、面白い人だと思ったようだ。この映画の監督は近藤喜文だが、製作プロデューサー・脚本・絵コンテは宮さんが担当している。

井上さんの〝イバラード〟ならば、雫が生み出す空想物語の世界を他の部分とは違う魅力を持った背景美術で作ることが可能だ。また、〝イバラード〟は、その発想というか物の見方というか、「現実にある風景も見方を変えれば、こんなに魅力的に見える」という点が「耳をすませば」という映画のテーマと相通じるものがあると宮さんは考えたのだ。

最初、宮さんはジブリの美術スタッフに井上さんの画風を真似て背景画を描いてもらうことを考えていた。しかし、どうせなら井上さんご本人に映画で使う絵そのものを描いてもらったらどうかと僕が提案し、井上さんにお願いしてみたところ快諾いただいた。こうしてトントン拍子で楽しいコラボレーションが実現した。

このときは大小取り混ぜて確か60点以上の絵を、映画のために井上さんに描き下ろしてもらった。大体の作業は茨木市にある井上さんの自宅で描いていただいたが、山場の1週間ほどは、井上さんに東京都小金井市にあるジブリに来てもらってスタジオの中で背景画を描いてもらった。それも宮さんと机を並べてだった。二人はおしゃべりしながらそれぞれの作業をしていたが、井上さんの明るい人柄もあって、いつもと違う刺激を宮さんも僕も、そして他のスタッフも受けていたように記憶している。特に背景画を描く美術部のスタッフは大きな触発を受けたようで、その後も井上さんと個人的にお付き合いさせてもらっている者が何人もいる。ちなみにこの〝イバラード〟が使われているシーンは、そこだけ宮さん自身が演出している。

「このシーンを設定することで、中学生同士の恋という地味な作品が〝映画〟になった」宮さんが、嬉しそうに、そう話し

ていたのを昨日のことのように思い出す。

その後も井上さんにはいろんな形でジブリとコラボレーションや協力をしていただいている。2001年に三鷹の森ジブリ美術館が開館した後に、井上さんに館内の壁に絵を描いてもらったが、このときもお客さんとやりとりしていただきながらお客さんの目の前で絵を描いてもらえたのは、ジブリ美術館にとってとても有り難いことだった。中央ホールではその成果である絵「上昇気流II」を見ることが出来る。

また、ジブリ美術館の短編の1本として井上さんの原作で「星をかった日」という作品を宮崎駿監督で制作し2006年に公開している。これなどは井上さんがジブリ美術館その他で宮さんと交わした雑談がベースになっており、井上さんはその後自らそのお話を発展的にまとめて『星をかった日』という絵本を制作している。井上さんのアイディアを元に、同じタイトルだが、それぞれに違う内容の作品が、井上さんと宮さんの手で別々に生まれたとても面白いケースだ。短編映画の「星をかった日」はジブリ美術館で今でも定期的に上映している。

一昨年は井上さん監督、ジブリ製作で「イバラード時間」というDVD／Blu－rayDisc作品を制作しディズニーから発売した。アニメーションではないけれど、井上さんの絵を井上さん自身の演出でデジタル処理して音楽を付けて、いわば「動くDVD画集」のような作品を制作したが、イバラードの世界に新しい魅力を加えるお手伝いが出来たのではないかと思う。「イバラード時間」はこの種のDVDソフトでは異例の出荷枚数を記録しており、井上さんのファン層の広がりを感じた。

このように、井上さんとジブリとはずっとお付き合いが続いており、井上さんが上京するときは時折ジブリに立ち寄って交流を深めている。話し出すと柔らかい関西弁でどんどん面白いお話が出てくる井上さんの人柄がジブリの水に合っていたということもあるだろうが、きっとジブリ作品と井上さんの描く世界はそもそも相性がいいのだと思う。今回の展示会は〝イバラード〟のふるさと茨木市で開かれる展示会なので、井上さんにとっても大きな意味がある。「イバラード（不思議な町）の作り方」がテーマと聞いているが、その発想の秘密を僕もぜひ、覗いてみたい。

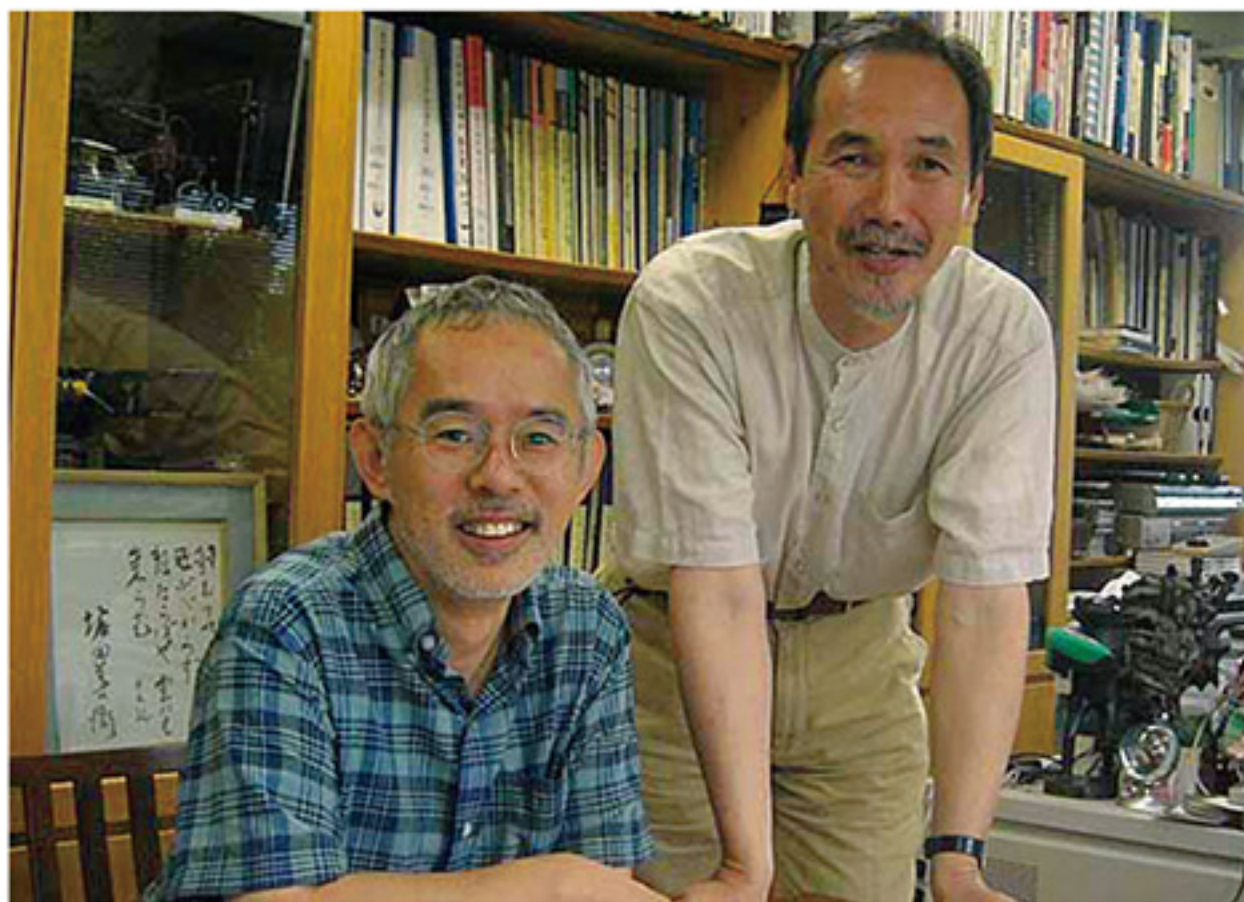



Photo courtesy of Naohisa Inoue

鈴木敏夫さん
1989年株式会社スタジオジブリ入社。
愛知県出身。代表取締役プロデューサーとして多くのジブリ作品を手がけてきた。

「茨（イバ）ラード絵画展」の際のDM

インタビュー

“共に関わってきた22年間”

野中晋輔

スタジオジブリ入社当時から、井上さんとお付き合いがある野中晋輔さん。1995年公開の映画『耳をすませば』の制作時期から共に関わってきた22年間を語っていただきます。

――スタジオジブリの当時の様子と井上さんの最初の印象をお聞かせください。

私がジブリに入社したのが94年の５月なので、その時は映画『平成狸合戦ぽんぽこ』の製作は最後の段階で、『耳をすませば』は、もうすでに準備段階でした。井上直久さんにお仕事のお願いをしたのが、その頃か、ちょっと後ぐらいだったと思います。

私は、鈴木敏夫プロデューサーと一緒に仕事上の契約のやりとりの際に井上さんとはじめてお会いしました。『耳をすませば』の監督は近藤喜文さんなんですけれど、主人公の月島雫の空想シーンは、宮崎駿監督が自ら考えて描いた、特別な、ある種独立したシーンなんです。短い映像なんですが、映画の要となる重要な部分だと思います。このシーンでイバラードの世界観を使わせていただきたいということで、井上さんにコンタクトを取ったんです。イバラードをシークエンスのために使わせてほしいということと、その背景を井上さんに描いてほしいというお願いをしたところ、井上さんは非常に快く引き受けてくださいました。

初対面の時から井上さんの印象というのはお変わりなく、すごく明るく、ユニークでエネルギッシュでした。宮崎監督にはじめて会った時も、鈴木プロデューサーの時も同じ印象を受けました。やはりこのようなご自身の世界観をお持ちの方は、一味違うオーラというか共通した部分があるなとは常々感じます。井上さんが関西弁で話されるところも、当たり前な話ですが、ここ（関東）では、関西弁には触れないからこそ余計、新鮮に感じますね。そこがさらに人当たりの良さと魅力度を増すポイントだと思います。

井上さんはいろんなことに興味をお持ちで、どんなことにも詳しいんです。ジブリは毎年社員旅行をしているのですが、１９９４年の秋に、たまたま奈良に行きまして、その際に井上さんが案内をかってでてくれました。奈良の歴史などにも大変詳しく、解説もしてくださいながら、飛鳥方面などいろいろとお寺を回りました。宮崎監督、鈴木プロデューサー、高畑勲監督などのジブリ最重要メンバーに私もご一緒しまして、井上さん率いる10人ほどのツアーで回らせていただきました。『耳をすませば』の制作の合間だったんですけれども、この時は監督が近藤さんだったので、宮崎監督も高畑監督も行けたんです。自作を監督中ですと、行かないんですけれども。そ

の後も、ジブリの社員旅行で京都に旅行したことがありましたが、その際もわざわざ京都まで足を運んでくださり、お昼をご一緒したりしました。

——映画で画家の絵を直接使われるのは、とても斬新な考えだと思うのですが、よくそのような流れになりましたね。

確かに、実際に画家の絵を使った映画ですと、私がパッと思いつくのは、ヒッチコックの『白い恐怖』ぐらいですか。あれではダリの絵が使われていますが、そんなに、多くないかもしれませんね。

実は、『耳をすませば』はスタジオジブリが初めてデジタル合成を使った映画なんです。宮崎監督が、デジタル合成のことは前々から聞いていたので、そこで、せっかくなので空想シーンで挑戦してみようということになりました。

井上さんには、描き下ろしやらいろいろとしていただきました。しかも、全てカットに合わせて。必ずしも四角い枠に描くわけではなく、パーツのようなものにも描いてもらったり、素材も紙だけではなく、セルに描いてもらったり、宮崎監督のいろんなリクエストに応えていただきました。デジタル合成が前提だったので、雲のパーツとかもバラバラに描いてもらいました。

映画は、一人で作るものではなく、いろんな人の力が結集されて作られるものだと常々思います。当初は考えられていなかったいろんな要素がうまく作用しあっていい結果となり、『耳をすませば』もいろんな出会いとか、運とか偶然とかのタイミングがうまく重なり合わさったことによりできあがった映画なんです。

——短編映画『星をかった日』の制作時のお話をお願いします。

三鷹の森ジブリ美術館は2001年の10月1日に開館したんですけれども、確か開館してすぐくらいのタイミングで、宮崎監督が井上さんに壁画の依頼をしたんです。美術館の壁に2点ほどあるのですが、その一つが《上昇気流Ⅱ》という名で、宮崎監督が以前購入した絵の別バージョンなんです。お客さんが見ている中でも描かれていたので、当時は結構面白い空間になっていたようですね。

私は後からお話をお聞きしたのですが、そこで宮崎監督と井上さんが会話をされた際に、井上さんが口頭でお話をされたイメージをベースに作られたのが『星をかった日』なんだそうです。『星をかった日』の原作は井上さんなのですが、映画の制作の段階ではまだ絵本が現物としてなかったんですね。

井上さんの話をベースに、宮崎監督が自分なりに絵コンテを描き、話を持ちこんだところ、井上さんが非常に快く承諾してくださったんです。最初は、主人公が井上さんの中では女の子、宮崎監督の中では男の子と、どちらも譲らずな感じだったそうですが(笑)。その後に、井上さんも『星をかった日』を絵本として実際に形にしました。

これも後から聞いたお話ですが、『星をかった日』の裏設定が映画『ハウルの動く城』の若き日のハウルと荒地の魔女の話なんだそうです。100%同じキャラ設定というわけではないと思うのですが、宮崎監督の意識の中でキャラクターが繋がっているということなんでしょうね。それには、やはり時期も関係する

のではないかと思われます。『ハウルの動く城』の後にジブリ美術館の短編映画として『星をかった日』を制作したので、たぶんそのハウルの影響というか、流れの中でイメージの投影があったのかなという気がしますね。正解とか正しいというよりは、２つのキャラクターにどこか関連があり、繋がっているってことでしょうね。作品と作品がどこかで関係していたりするので、創造者というのは面白いですね。

――DVD／Blu－ray Disc『イバラード時間』はどういった経緯でできあがったのでしょうか。

『星をかった日』が２００６年に公開されたんですけれども、作ってる最中か公開の後かに、『イバラード時間』のお話がでてきました。『イバラード時間』は一応私がプロデューサーという肩書きになっていますが、どちらかというとジブリ側の管理担当という感じでした。なので実際は、井上さん自身がプロデュースをかなりしているといっていいのではないかと思います。もともと井上さんが自分の絵を使って何か映像作品を作りたいということで構成案を組み、企画を立てられたんです。音楽は松尾清憲さんと小室和之さんにお願いをしたんですが、確か１年くらい前には、すでに何曲か用意されていたそうです。映像は、ただ静止画を動かすというだけではなくて、そこにCGも加えて絵を動かしたいということも井上さんのご意向で、すでに手配もされていました。ある程度そういった枠組みができ、内容も固まってきた段階で、ジブリに、「キャラクターも動かしたい」と井上さんから話がきました。実はこれ、ジブリの最初のブルーレイなんです。ブルーレイディスクは２００５年ぐらいに一般に広まったと思うのですが、ジブリの長編もののブルーレイはこの時点ではまだ出てなかったんですね。動く画集のような感じで、じっくり見ても、流して見ても楽しめる、非常に面白いものができあがったのではないでしょうか。

『イバラード時間』というのは時間が大事なんです。絵はやっぱり止まっているというか、観ている側の時間は動いてはいるのですが、作品の世界の中で時間が流れるというわけではないので、その中で流れている時間を、音楽も加えて、効果音も加えて作り出そうと。井上さんは時間を追った世界を作りたかったということがあったんじゃなかったかなと思います。

野中晋輔さん
岐阜県出身。1994年5月、株式会社スタジオジブリ入社。現在、制作業務部取締役部長。法務・著作権、広報・関連事業等の業務を務める。

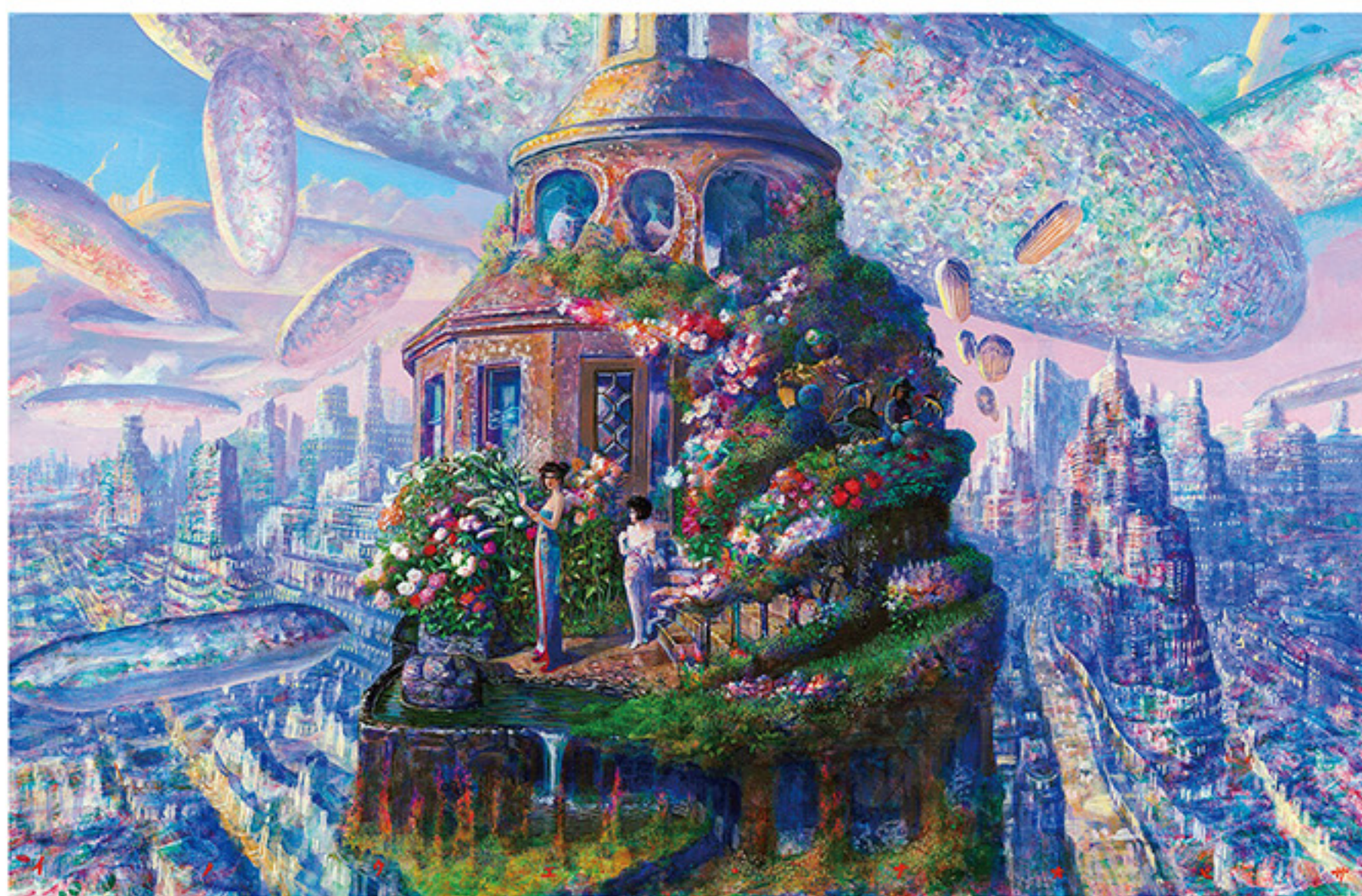
DVD&Blu-ray Disc
『イバラード時間』
時間：30分
監督：井上直久
発売元：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン
DVD：3,800円＋税 / Blu-ray Disc：4,700円＋税

ジブリ美術館短編アニメーション
『星をかった日』
上映時間：約16分
原作：井上直久「イバラード」より
脚本・監督：宮崎 駿
上映スケジュール等は、ジブリ美術館のホームページでご確認下さい。
URL：http://www.ghibli-museum.jp/

1

3

2

4

1. 壁画作成時の井上直久さん。椅子には「はなしかけてもだいじょうぶです」と記されている
2. ジブリ美術館で見ることができる《上昇気流Ⅱ》
3. 同じくジブリ美術館の壁に描かれている《明かりのもれる店》

※館内は撮影禁止となっており、特別な許可のもと掲載させていただいております

4. 《空の泉》2005
   野中さんが個人的に井上さんの個展に足を運んだ際に購入。ぼんやりとした気持ちで赴いたが、見ているうちに欲しくなったという

Photos courtesy of Naohisa Inoue

インタビュー

“同じ画家として”

男鹿和雄

映画『耳をすませば』以来、同業者として、また友人としてお付き合いのある男鹿和雄さんに、井上さんについての質問に自筆でお答えいただきました。

男鹿和雄

Q1. 同じ画家として、井上直久さんの「すごい」ところはどこだとお考えですか？

井上さんは「イバラード」という独自の世界を独特のタッチで表現している点がすごいですね。
それだけではなく、同じ世界を漫画でも描いているし、絵の中から聞こえてきそうな音楽も演奏できる程です。
おしゃべりも大変面白いし、あのご風貌ですから役者をやっても魅力ある存在になれるんじゃないでしょうか。
話には聞いてませんが陶芸家をやっても似合いそうだし、面白い作品ができそうです。
これでもまだほんの一部しか井上さんのすごいところは分っていないかも知れませんが、尊敬と同時にその才能が羨ましいです。

Q2. お仕事で井上さんとご一緒された際、印象深いエピソードはございましたか？

井上さんは「耳をすませば」の映画作りに参加するために、スタジオジブリにやって来ました。
アニメーションのスタジオがめずらしいらしくて、好奇心旺盛な井上さんは、様々な部署をのぞいては、スタッフに話しかけていたようでした。
やはり美術(背景)の部屋には強い関心があったようで、良く来てはみんなとの雑談を楽しんでいました。
職人としての仕事が優先される僕たちにとっては逆に、新鮮な空気と面白い話を運んで来てくれた人、として見ていました。
「耳をすませば」の中で井上さんの描いた絵に直接背景風な一部を描き足す、という役割りが僕にまわって来ました。恐れ多いと思いながらも直接上から描くのではなく、一枚重ねた透明なセルの上から描いて無難に井上さんとのコラボレーションが出来たのはいい想い出です。

Photo courtesy of Naohisa Inoue

映画『耳をすませば』製作当時の様子。写真左から、宮崎駿監督、男鹿和雄さん、井上直久さん

Q3. 井上さんの作品の魅力は何だと思いますか。また、お気に入りの作品がございましたら教えていただけますか？

やはりQ1.で答えた「イバラード」という独自の世界の表現ですね。
これは以前井上さんに聞いたことですが、あの世界の画面構成を考える時、
まったく関係のない風景や物体を画面に入れ込んでみることがあるそうです。
その表面をイバラード風に描いていくと、想像もできなかった面白い不思議な
空間になる、といったお話も聞かせていただきました。
以前池袋の東武ギャラリーで個展をされた時に見た
海の絵がとても気に入りました。
タイトルも詳細も忘れましたが、右のような
静かな入江の絵でけっこう大きい作品でした。
透明感のある深い海の色と、白い砂浜が
印象に残っています。

かなり違っているかも知れません
小舟もあったかどうか？

Photo courtesy of Naohisa Inoue

男鹿和雄さん
秋田県大仙市（旧太田市）生まれ。アニメーションの背景専門会社、小林プロダクションにて『ど根性ガエル』『家なき子』『エースをねらえ』など数々のアニメーション作品に携わり、1987年に宮崎駿監督にスカウトされて以来、スタジオジブリ映画『となりのトトロ』『おもひでぽろぽろ』『崖の上のポニョ』などの作品で美術監督を務める。

右ページの絵は映画で使用される前の井上直久さんの原画。左ページの絵は、映画の中で使用されている「借景庭園＋図書館のある街」のセル画。井上さんの元の背景画の上に、男鹿和雄さんが『耳をすませば』の街並みを加筆した、井上さんと男鹿さんのお二人で仕上げた合作。
井上さん曰く、男鹿さんが「井上さんの絵は、描きこんでいるようでうまく手を抜かれているので描き足しやすかった」とおっしゃっていたそうです。

『耳をすませば』
公開：1995年7月15日
上映時間：111分
監督：近藤喜文
脚本・絵コンテ：宮崎駿
原作：柊あおい

一枚のハガキがもたらした巡り合わせ

映画『耳をすませば』の秘話

1995 年に公開されたジブリ映画『耳をすませば』。宮崎駿さんが井上直久さんの描く作品に着想を得て、ジブリとイバラードのコラボレーションが実現しました。名作誕生までに起こった劇中劇を井上さんに振り返っていただきました。

1993 年作
《上昇気流》

1990 ～ 1992 年頃作
《住まいの多様化》

最初、この絵のタイトルは、《見はらしの良い住まい》や《住まいの多様化》などでした。丘の上にも小惑星にも、あちこちに家があることから、そのように名付けたのですが、娘に「不動産屋の広告みたい！」と言われ笑われました。

そして次第にこの絵を見ていると、やっぱり何か足りない、どこかに人物がほしい気がしてきて、左の空（小さな家の前）が空いているので、そこに何かあってもいいのではないかと思うようになったんです。そこで、空中に少女が浮かんで飛んでいるところを描いてみました。少女の服が風をはらんでいる感じがうまく出たし、その子を描き加えたことにより、家などの大きさが明確になりました。しかし、なぜ女の子が空に浮いて飛んでいるのかという理由が必要になったので、気流に乗っているということにして、絵のタイトルを《上昇気流》と決めたんです。

１９９４年2月、東京で初めて個展をする際、宮崎駿さんに案内状をなんとなく出してみたんです。住所もわからなかったので、とりあえず漫画『風の谷のナウシカ』の本の出版社に気付で出しました。そしたら、個展初日に宮崎さんが来てくださったんですよ。入って来てニコっと笑って。直にお会いしたことはそれまでなかったので、「なんかどっかで見たことがある人だな」とだけ思っていたら、「宮崎です」と挨拶してくださり、その時は、お仕事を一緒にできたらいいですね、なんてお話もしました。その個展の初日は、たむらしげるさんもいらっしゃいましたし、小室和之さんと一緒に松尾清憲さんたちも来てくださったんです。本当に今振り返ってもおとぎ話みたいで面白いなと思います。

しかし、2日目以降はほとんど来場者もなく、おまけに交差点で転んで膝にすごい内出血してしまったり、雪が積もって大変だった日もあったのをいまだによく覚えています。でも最終日に宮崎さんが1点買いたいとのことでジブリの方が来て、《上昇気流》を購入してくださったんです。

もしタイトルが違っていたら、宮崎さんにこの絵を買っていただくこともなく、主人公の月島雫ちゃんの空想シーンも別のものになっていたかもしれません。あるいは僕の絵が、映画で使われることもなかったかもしれませんよね。

その5ヶ月後くらいに、ジブリから「脚本ができたので、もしよろしければ」と『耳をすませば』での絵のオファーがきました。社交辞令ではなかったんだと驚きましたね。嬉しかったです。それで『耳をすませば』に参加させてもらうことになりました。

絵コンテに僕の絵が、宮崎さんの手でもう一回描きおこしてあるのを見た時、今まで、僕ひとりの空想だと思っていた街が、立体感を持って描かれていて「イバラードは他の人にも見えているじゃないか」と感動しました。イバラードが映画の背景に使われたというのは本当に奇跡みたいなことだなと今でも思っています。

長年眠っていた 2人の協奏作品

井上直久さんの作品《街の回廊》に宮崎駿監督が独自に加筆したラフ画。主人公雫ちゃんの空想シーンのアイデアの一つとして練られ、美術ボードに取り組まれていました。元ある絵から、さらに下へさらに手前へとどんどん世界が広げられていくイマジネーションは圧巻。作品の世界を無限に増殖でき、物語が広がっていく可能性が垣間見えます。

結局映画では使われることのなかったこの絵を、井上さんは大変気に入り、映画が完成した後、宮崎監督からプレゼントしてもらったのだとか。しかし一旦、井上さんは自宅に持ち帰ったものの、「やっぱりもらってしまうのは申し訳ない」と三鷹の森ジブリ美術館に寄贈。しかし、その後は館内で眠ったまま日の目を見る事はありませんでした。ところが 2016 年 8 月、井上さんのアトリエから偶然この絵のコピーが見つかった事でその存在が再び明らかとなり、下の《街の回廊 2016》の制作、公開に繋がりました。

《街の回廊》1989
井上さんの作品をカラーコピーし、そこから宮崎監督が加筆している作品

《街の回廊 2016》2016
2016 年 10 月に宮崎監督、同年 11 月にたむらしげるさんにお会いした際、僕の《タニマチ》(116 ページ参照)という絵の話題があがり、その絵の階段が深い谷へ降りていく印象が元になっていることに気がつきました。《街の回廊》の色を補正し、カンバスにプリント。その上からアクリル絵具で下段の部分を描き加えました(井上直久さん談)

右が井上さんの机。映画『耳をすませば』制作当時の宮崎さんと井上さんの作業場。隣り合わせの机で肩を並べて作業していたようです

Photo courtesy of Naohisa Inoue

対談　小室和之×松尾清憲

伏線が張られていたかのような出会い

奇跡のような偶然が起きたのは、今から20数年前のこと。映像画集『イバラード時間』の音楽を手がける小室和之さんと松尾清憲さんが井上さんとの出会いと、ミュージシャンでも舌を巻く独特の感性について語ります。

小室さん　これまた本当に偶然でした。1994年の冬頃、井上さんとは全然関係ない別の方の絵の個展を見に行ってたんです。それで、その個展会場の近くの本屋さんでたまたま画集『イバラード博物誌』を見つけたんですよ。「なにこれ！」って。だいたい「博物誌」と書いてあるのが、当時としては珍しく、変わっているなと印象的でした。その本を開くと——これまたすごい！　でも、その場ですぐには買わなかったんです。よく衝動買いをしていたせいで、家族に禁止令出されてたので。でも、家に帰ってから悶々と気になっちゃって……。1週間後にまた同じ本屋に行きました。そしたら、店主に「あー、あれはもうないんですよ」と言われてしまい。「あー、もうどうしよう」と思ったんですが、一応在庫確認のために店主が引き出しを開けてくれたんです。そしたらなんと、1冊だけ残ってたんですよ。あらためて本を手にしたら『イバラード博物誌』の出版社の「架空社」って名前も面白いなと。だって、架空だよ？（笑）それで、架空社の前野真社長に電話したら、「ちょうど良かった。1週間後に東京で初めての個展をやるので、行ってあげてください」って教えてくれるから（笑）。その1週間の間に、井上さんの画集に興味を持ってくれた人たちに声をかけ、個展に行ったんです。

松尾さん　雪が降ってたね。

小室さん　そうそう。井上さんにしてみても、雪の日で足が悪いからあまり人は来ないだろうと思っていたらしいです。なのに予想外にたくさん来たのでびっくりしたんですって。午前中僕らで、午後が宮崎駿さんたちだったそうです。結局それが、伏線になり、後にも繋がったんだと思います。きっかけは、この本を本屋でたまたま見つけたこと。そうじゃなきゃ、僕ら知り合っていなかったよね。

松尾さん　今考えると、すごいな（笑）。

小室さん　僕はその時のインパクトを元に、徳間ジャパンコミュニケーションズの未来ミュージック『イバラード～イバラード博物誌より～』のデモテープを作りました。

松尾さん　音を作りたくなる絵だもんね。

小室さん　普段の僕らのテイストとは異なるのですが、できてしまったので。勝手に自分たちでカセットに「イバラード」と書き、井上さんに送りました。そしたら、喜んでくれて。ここからもドラマ的にすごいことが起こったんですよ。その時たまたま井上さんにＮＨＫの取材があり、そこでの撮影中、ディレクターが、アトリエで「イバラード」と書かれたカセット発見してくれたんです。そこで、僕らのことが話題に上がり、そこからはもうトントン拍子で。すぐにレコーディングになりました。

いいものは醸造される

松尾さん　井上さんが「絵はもちろん好きですよ、でも音楽は大好きなんです」とおっしゃる時があるんです。

小室さん　そうそう。初めてお会いした際も、僕らが音楽をしていると知った途端、目がランランと輝いたし。

松尾さん　「音楽!?」ってね。

小室さん　井上さんと僕の知り合いが僕の家に集まったことがあるのですが、スタジオとかコンサートでは一緒にやっている連中なのに、みんなシャイだから、集まっても音楽を奏でる人がいなくて。なのに、いきなり井上さんがギター持って、「ＨＥＬＰ！」と歌い出したり（笑）。ビートルズの曲を、しかもプロの前で（笑）。

松尾さん　すっごい度胸だなとびっくりしちゃったもんね。もう弾きたくて弾きたくて仕方がないんだろうなぁ。

松尾清憲さん

福岡県生まれ。1980年、ムーンライダースの鈴木慶一さんのプロデュースでデビュー。小室さんらと結成した、ユニットバンドBOXのメンバー。未来ミュージック『イバラード ～イバラード博物誌より～』にて、松尾さんが作曲を手掛けたのは、「ニーニャの店」。

小室さん　しかも、井上さんは、わからなければとりあえず3つのコードでビートルズ弾こうとするんですよ。イマジネーションで（笑）。

松尾さん　井上さん流（笑）。

小室さん「音楽家って本当にうらやましい」と、井上さんがおっしゃっていたことがあるんです。「絵は一枚描いたものが個展にあり、それをみんなが見に来る。だけど、音楽は、何処でも空間を作れますよね」と。

松尾さん　音楽は目に見えないから、ある意味絵と対照的。だからお互いに引き合う部分があるので、音楽にも興味があるんでしょう。

小室さん　井上さんは、自分の世界を表現したいがために音楽がそこにあると思っているので、「自分のできることで、人の前でやってもいい」と。よく考えたら本当にいろんなことがそうですよね。ここまでできなかったらしてはいけない、ということは絶対にないから。

松尾さん　自由な世界ですからね。

小室さん　すごく僕が勇気づけてもらった話があるんですが、昔イバラードの曲を作って、そのカセットテープを車の中に置きっぱなしにして忘れてしまったことがあるんです。何年後かに、「これなんだ」って見つけて聴いてみると、すごく面白く響いて、良かったんですよ。それを井上さんに話したら、「それは音楽が車の中でね、醸造されたんですよ」って。

松尾さん 出た、面白い！

小室さん　そこから、醸造されるのっていいなと思いました。だって、ダメなものは醸造されないでしょう。絵もそういう風に描いているんだと納得するのと同時に、音楽もそれで良いんだなと。すごく勇気をもらい、救われました。

井上さんの世界にマッチしているかどうか

松尾さん　映像画集『イバラード時間』を制作する際、最初に組んだ事務所がいい加減だったんだよね。

小室さん　井上さんのファンの人たちが集まって、制作しようって話でしたよね。

松尾さん　それで音楽なら僕らがやりたいって。井上さんの映像を見ながらその場で曲作ったんですよ。でも、組んだチームの実務がいい加減で。最初結局宙に浮いてしまったんです。

小室さん　でも、井上さんが「ちゃんと出したいので、ジブリに話してみます」と言ってくださり。

松尾さん　だからアニメーションは、ジブリの制作チームで動かしてもらえることになってね。すごいよね。

小室さん　「これは面白い！」と言ってもらえて。でも、井上さんは、僕らの音楽になかなか納得してくれませんでしたね。

松尾さん　みんなに合うって言われてから、「これ合いますね、いいね」って（笑）。

小室さん　大変なこともありましたね。映像では、海の波が来るシーンがあるんですが、まだCGで波を表現するっていうのが世界的にもなかった時代でして。でも、井上さんが「この波を動かしてほしいんですよ」って、ジブリのスタッフたちに言って「ジブリでできないんですか！」って。

松尾さん　意外と大胆な発言をズバリ言っちゃうところがいいんでしょうね。

小室さん　がっつり組んで仕事したらやばい、と思いました。すごく確固とした部分があり、絶対に譲らない。作品を共同で作ってると、ガツーンとぶつかるんですよね。井上さんが自分の世界にマッチするかどうかで判断しているから、井上さんが見えていない部分をこちらが提示することは、まずないですよね。試しに、これは違うなというのを持って行ったこともあるのですが、当然ながら「困りますね、小室さん」って怒られちゃって、ダメでした（笑）。

松尾さん　逆に「え？あれ、好きじゃないの？」ということもあったり（笑）。そこがまた面白かったりする。

小室さん　読めない。

松尾さん　読めないよね。先に音楽がOK出ていたので、僕ら救われたよね。

小室さん　これが逆だったらと考えると……。

松尾さん 大変ですよね（笑）。

小室和之さん

神奈川県生まれ。1978年、キティからシングル『きまぐれなつむじ風』でデビュー。映像画集『イバラード時間』にて松尾さんと共に音楽を担当する。未来ミュージック『イバラード～イバラード博物誌より～』で収録されている「イバラード」と「ネバーランド・エバーランド」の２曲の作曲と編曲を手掛けた。

インタビュー

“音楽が好きな画家、絵が好きな音楽家”

中村由利子

趣味の域を超えるほど、絵と同じくらいの愛情を音楽にも注ぐという井上直久さん。短編映画『星をかった日』のバックミュージックなどを担当した音楽家の中村由利子さんに、業種の畑は違えども、同じ表現者として関わってきた井上さんについて語っていただきます。

最初にお会いしたきっかけは確か、CD-ROMシンフォレストの『イバラードの世界』だったかと思います。その時は、作曲ではなく、ピアノの演奏を頼まれました。

はじめの印象から井上さんは、全く変わられていません。本当にユーモアに溢れて、明るい方だなと思います。井上さんは音楽もお好きで、ご自身で演奏されたり歌われたりもなさるんですよ。ギャラリーなどで私と井上さん、それとイバラードを通じて知り合った音楽家の方たちとコンサートなんかをする際も、私たちももちろん楽しんでいるんですけれども、井上さんがいつも一番楽しそうで、それを見てこちらまで楽しくなっちゃいます。その時のお顔をお見せしてあげたいくらい（笑）。それがいつも印象的です。

星をかった日の秘話

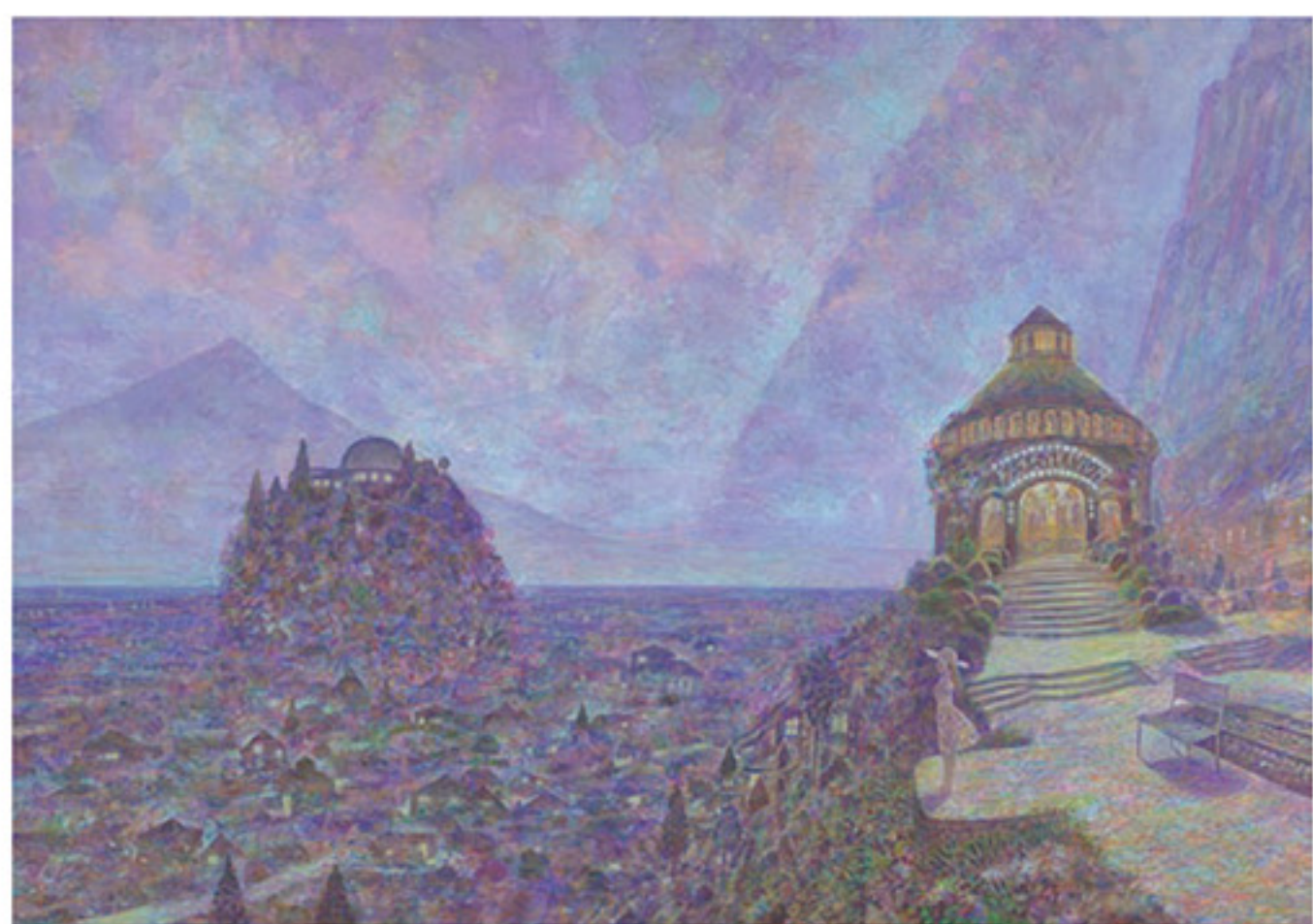
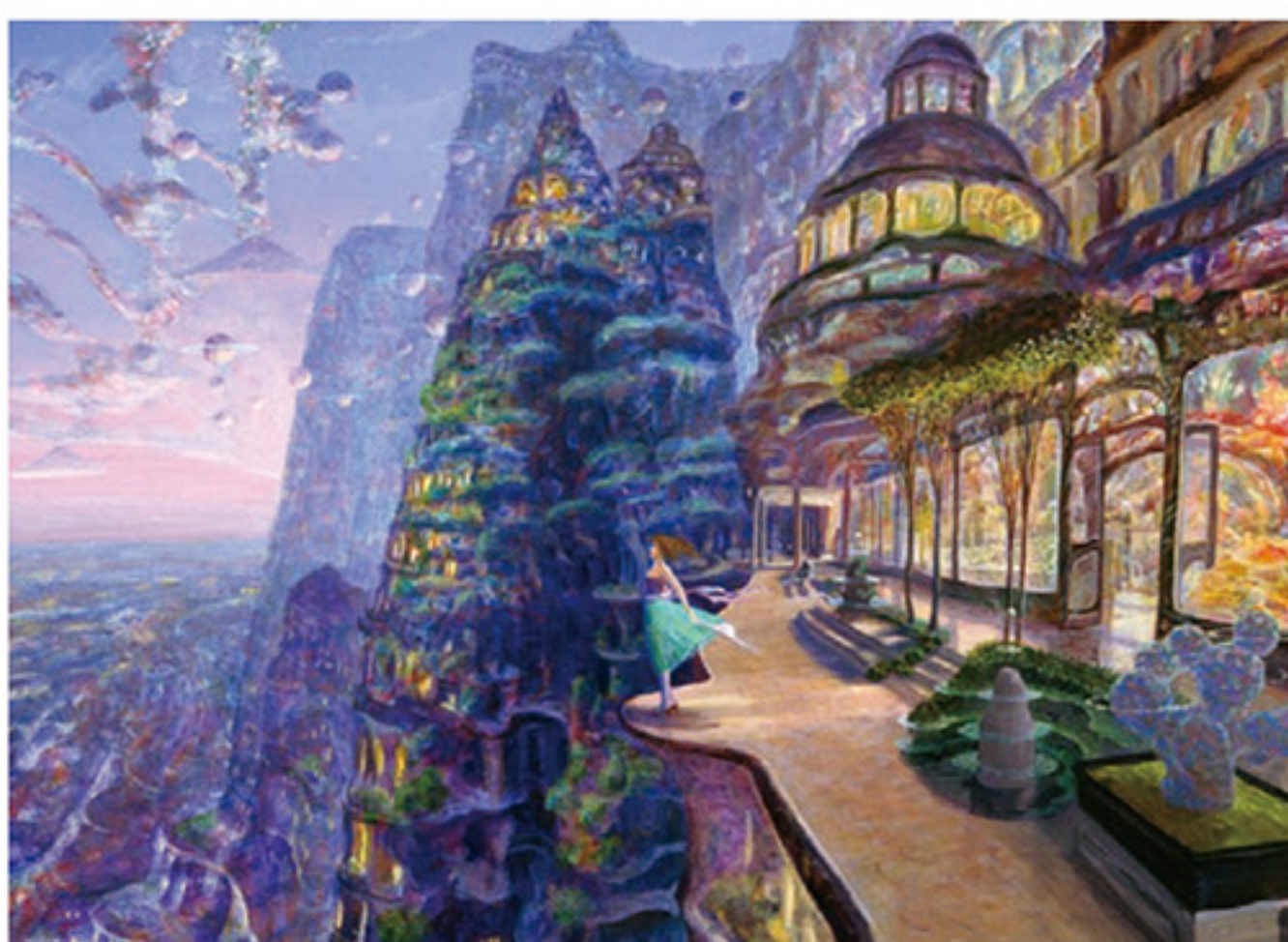
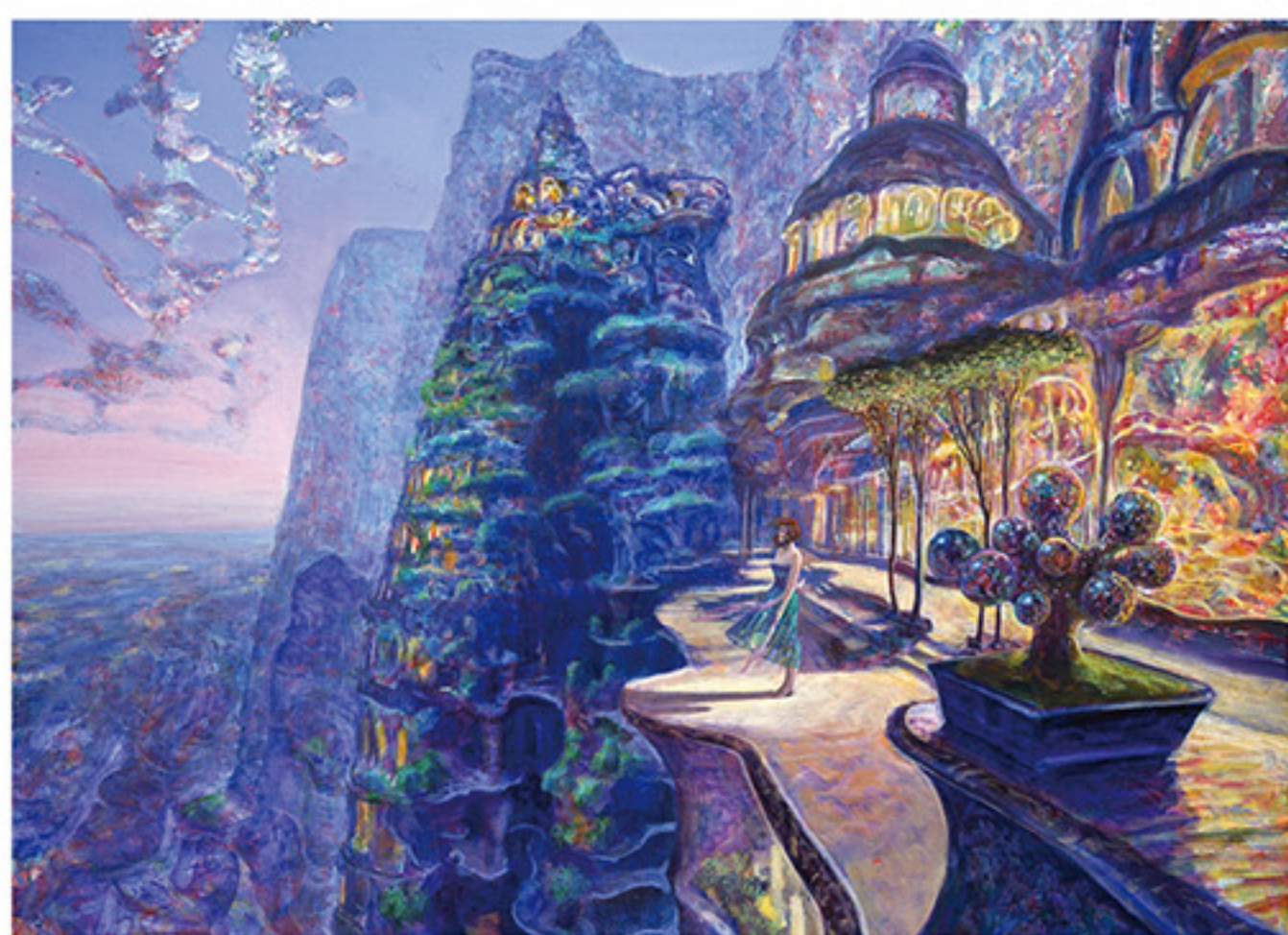
井上さんに、宮崎駿さんの作品でしょう？「できるんだろうか、期待に応えられるんだろうか」という思いも大きかったと思うのですが、良い作品に使っていただけるという嬉しさもまた、大きかったですね。作曲のヒントは、井上さんの今までの作品がイメージのベースにあったのと、宮崎さんからの「どこにもないんだけれども、なんだか懐かしいメロディーを」とのリクエスト、それと「追憶」というキーワードでした。あと、宮崎さんから言われたのが、ピアノ、バイオリン、チェロという楽器編成だけでした。

映画『星をかった日』は、井上さんのオリジナルの世界観に宮崎さんマジックも加わった作品だと思います。ストーリー自体はあまり語られていなくて、〝イバラード〟が何とか、〝時間局（※時間を管理する機関）〟がどうとか説明が十分にされていない部分があるかとは思うのですが、ちゃんと観てくださった方たちに宮崎さんのメッセージがしっかりと伝わり、「ああ、そうだよね」と納得して帰れるような映画になっているかと思います。この作品に携わることで、井上さんの原作が形になるのに時間がかかってしまうわけもわかりましたし、絵本となって拝見した際も、また少し違った井上さんの世界として楽しめました。

最初、井上さんの思い描く主人公は女の子でしたし、宮崎さんの描いた主人公は男の子で、どちらも譲れなかった部分だと思うのですが、それぞれのイメージが作品として表現されていて素敵ですよね。

宮崎さんが井上さんに言わず絵コンテを先に描いてしまったこともすごいのですが、それを見た井上さんが喜んで映像化の話が進んでいったことも面白いと思います。

決め込まない作風

《天文館の宵》という絵を、私の部屋のピアノの脇に飾っているんですが、この作品にはこうなる前の絵があるんです。前の作品と女性の位置や描かれているものが違うんですが、ある時、描き変えたらしいんです。そんな、絵がどんどん進化していっているような、ご自分の作品について決め込まないところが素晴らしいですよね。その日キャッチしたものだったり、気持ちも環境も世の中も毎日変わるように、どんどんご自身の絵も変えていってしまう自由な発想を、私も井上さんを手本に考えるようにしてます。

1 2
3 4

天文館シリーズ

1.《天文館の夜》1982
月刊『詩とメルヘン』昭和57年(1982)11月号に掲載。詩は岡村理恵子「風邪と共に真夏の夜の夢」"今夜の風は／桜島の灰を運ぶ錦江湾からの風ではなく"に始まる鹿児島の街が舞台。天文館は実際の地名と、後になってやなせ編集長の指摘で知った。

2.《ナイトブリーズ》1992
《天文館の夜》をアレンジした長辺27cmほどの小品。1992年、茨木市のギャラリーエスタビエン新作展に出品。夜風を楽しむテーマは同じだが、構図や天文台の位置も違っている。人物を大きく中央に配し、ポーズも自然な感じで風が感じられるものに。

3.《天文館の宵》(初期) 1999
《天文館の夜》の設定を元に建物を大きく配置。"惑星の木"の盆栽を手前において遠近感を強調。ヒロインは大人の女性になり、初めは空中に飛び立とうとするポーズだったが、高い場所ゆえの不安感があったので、少し下がった位置に立つよう修正している。

4.《天文館の宵》(最終) 2002
3の絵に加筆したもの。手前にあった鉢植えを後ろに下げて、ヒロインを浮き立たせ、ナイトブリーズに似た、風を楽しむポーズに変更。遠景にラピュタ、中景の空に小惑星を追加、後ろの建物の入り口を開け多層海の模型をおいている。完成形、個人蔵。

画家はまるで魔法使いみたい

　私の父が井上さんと同じ画家という職業で、作風は全然違ったのですが、人物としては、共通するところばかりが思い浮かびますね。話も好きで、面白く、みんなでわいわいするのも好きでしたし。そして何より、父も含めてご縁がある画家さんもみんな、魔法使いみたいに思えるんです。アトリエというほどのものではなかったのですが、父が自宅で絵を描いている作業をよく目にしてまして、前の日に見た絵が、次の日また見に行くと変わっていて……という驚きをよく経験したので。当たり前かもしれないのですが、ただ黙々と作業を積み重ねているだけではなくて、他に特別な、それこそ魔法か何かをかけているんじゃないのかなって感じてしまうんです。

絵を見る度に発見がある

　私は同じように表現できるものとして、音楽の方が向いていると思い、音楽の道に進みましたが、父から教わった絵のことが、音楽にも生かされていると思います。一緒にスケッチなんかしていると、何を一番描きたいのか、何を一番入れたいのか、あとどこまで入れたいのかといったことを父によく言われてましたので、世界をどう切り取るかという構図のようなものを作曲の際にも意識します。音楽と絵って違うけど、そういうところって一緒かもしれませんね。しかし、井上さんの作風は、どう切り取るのか、構図どうのこうのというよりも、その中にいろいろなものが無限に描きこまれているように感じます。ですが、ぎゅうぎゅうに詰め込んでいるという風ではなく、イバラードの一枠を切り取って描かれているように見えます。絵を描いて表現していることの次元が違うんでしょうかね。

　それと、井上さんの絵には、子供の時の大事な思い出や、忘れてはならない大切な記憶などが描かれているようにも感じ、見る度にいつも原点を思い起こさせてくれるんです。

　きっとみなさん、井上さんの絵を見る度に印象が変わられるのではないかしら。絵がすごく細かく描きこまれているので、見る度に発見があるんですよ。例えイバラードのことを全然知らなくても、見入っているうちに自然にすーっと中に入り込めて、自分の中でいっぱい物語を作り続けていける。そんないつまでも見ていて飽きずに楽しめる作品だと思います。

Photo courtesy of Yuriko Nakamura

中村由利子さん
横浜生まれ。1987 年に本格的に音楽家としてデビューして以来、CM、アニメーション、ドラマ、映画などのさまざまなジャンルに携わり、多くの音楽を世に送り出してきた。

中村由利子さんオフィシャルサイト：
http://yurikopia.com/
Twitter：@Yuripen0603

宮崎さんの絵コンテにあったニーニャを真似てみたものです。意志が強そうでキリッとしてますね

自然とリンクした二人のイメージ

短編映画『星をかった日』の秘話

三鷹の森ジブリ美術館で上映している短編映画『星をかった日』。イバラードを原作として誕生した本作には、何十年越しの井上直久さんと宮崎駿監督の想いが込められていました。相互の世界が広がっていった経緯を井上さんに語っていただきました。

映画『耳をすませば』が終わった後、三鷹の森美術館中央ホールの壁面絵画を頼まれました。お客さまが見てる前で描いてほしいと。美術館閉館後、宮崎駿さんが様子を見に来られ、その際に宮崎さんに短編映画『星をかった日』の元となるストーリーを「女の子が小さな星を買ってきて育てる話なんです」程度だったと思うのですが、お話ししたんです。そしたら、宮崎さんが「それで？それからどうなるんです？もうちょっと詳しく聞かせてください」と少年みたいに目をキラキラ輝かせながら身を乗り出して聞いてこられました（笑）。

次の週に会った時、「井上さん、あの話、映画にできますよ」と。それで、「星を男の子がね……」と続けられるんですよ。「女の子なんですけど」って僕が言ったら「いや、女の子でもいいんです。その女の子が星を買ってくるんですよ。掌に入るぐらいの大きさの星を、ひよこを買った時みたいに大事に手の中に入れて持って帰る、その男の子がね……」と（笑）。もう宮崎さんの頭の中で話ができてるんです。宮崎さんは映画の話になると、次から次へ溢れるようにいろんなアイデアが出て来るんですよね。そんなある日、鈴木敏夫さんができあがった絵コンテを持って、僕のところに来られまして。もともとの僕のストーリーだと、女の子がカブを売って手に入れた星を育てるんですが、宮崎さんの映画ではその主人公はノナ君という僕の漫画の主人公になっていました。詳しく説明したわけでもないのに、宮崎さんのノナ君は、漫画のモデルだった当時の僕の息子の感じが出ていて、小さな生き物を逃がしてやるときの様子そのまま。宮崎さんは「僕は誰よりもイバラードを読み込んでいますから」と言っておられましたが、あらためて感嘆。漫画と映画の間の欠けていたピースが埋まった感じがしました。この少し前、映画『ハウルの動く城』が制作されています。宮崎さんが描く、その主人公、特に少年時代はその住まいも、『イバラード物語』の、このノナ君です。ある時話の中で、ニーニャは実は荒れ地の魔女になるのだと聞き、「ニーニャがあんなでかい顔のお婆さんになるのはイヤだ。せめてサリマン先生に」と言ったんですが、宮崎さんは頑として譲られず、ということもありました。映画『崖の上のポニョ』のお父さん、フジモトは、ノナ君だったそのハウルの、歳月を経た姿のように私には思えます。彼が言う「あの人が来てくれる！」は、普通に自分の奥さんを言うには変ですよね。フジモトがノナ君の、幾星霜の果ての姿なら、彼は魔法使いとして、とても尊敬し信頼していた先輩の、ニーニャと結婚していたのではないかと思います。

今思いついたのですが、宮崎さんの映画のお話と僕の絵本のお話は、繋がるような気がします。宮崎さんのお話だと、ノナ君が育てた星を逃すのですが、それを僕のお話の女の子が買い、育てる。それが宮崎さんが言われた「すべてのジグソーパズルのピースが見事にはまった幸せな作品」にいつかなればと思います。

「キラキラした感じを」との宮崎監督からのリクエストで、井上さんが描いたニーニャの棚

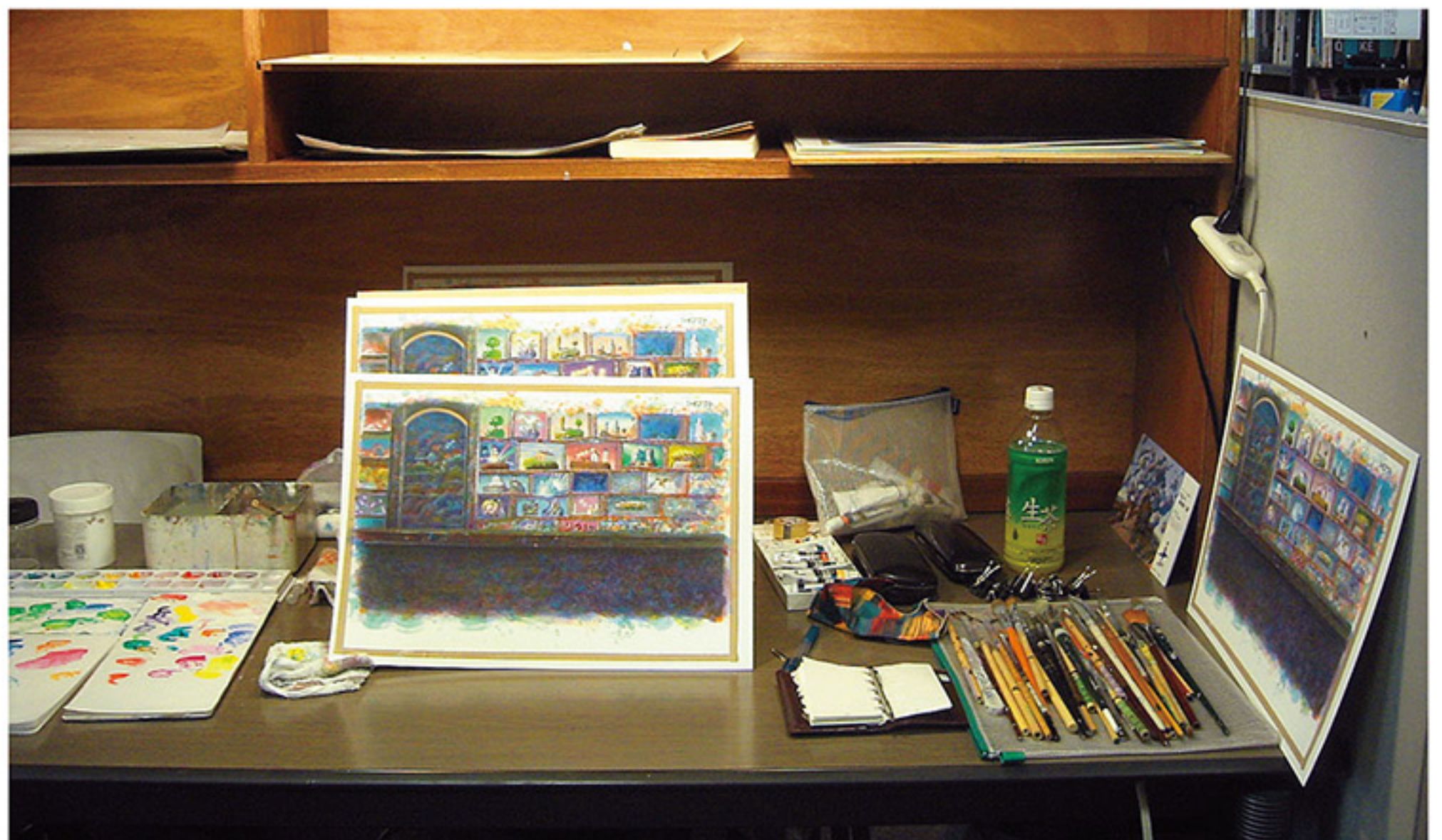



Photo courtesy of Naohisa Inoue

『星をかった日』制作時の井上さんの作業机

《イバラードステーションへ》2012

『星をかった日』の夜空のシーンを原作者が描いたらどうなるのか、とファンにリクエストされ、井上さんが描いた作品。8号のカンバスで《イバラードステーションへ》を描いてから、注文されたサイズと違うことに気づき、6号の《イバラードへ》を制作。結果、二つの絵がイバラードの行き帰りを物語るかのように繋がりました。

《イバラードへ》2012

『星をかった日』は、僕の娘がアイリーン・ハース『わたしのおふねマギーＢ』が大好きで、その物語で女の子が乗る船を惑星にして描いてみたら面白いんじゃないかと話が膨らみ、できたお話です。

この絵本には、山に住むドワーフ小人が出てきます。主人公が星を買いに行った時、持っていたカブだけでは星を買うのに足りない。なのでドワーフたちはその子に「星を大きく育てて、その星に僕たちを呼んでくれるなら、星を売ってあげる」と言います。

僕はこのドワーフたちは、もうこの世からいなくなった父、祖父や祖先たちではないかと思います。僕たちがこの世からいなくなった後にも、このドワーフたちのように、僕たちの子供やその子供たち、遠い子孫たちの前に現れて、こんな星のプレゼントをしてあげられたり、星を育てるのをそっと応援してあげられたらどんなにいいだろうなと思います。（井上直久さん談）

絵本『星をかった日』（P 9–10）より

上の絵の元となった線画

うーん、少ししたりないねえ、そうかそれならこうしよう。

スタジオジブリの手法にならい、ポスターカラーで試作した『星をかった日』

NAOHISA INOUE

イバラードを見つけるまで

イバラードを描き続けて約40年。井上直久さんが画家を志すまでには、少しの助走がありました。そしてその背景には、常に未来を方向づける支えとなった両親、画家だった祖父、進むべき指針を与えてくれた恩師といった人々の存在が大きく関わっていました。
ご本人のモノローグで振り返る、画家・井上直久さんができるまで。

今一番記憶に残っているのは、小さい頃に路地で紙芝居を見て、その後すぐに、自分で地面に釘で絵を描き、「今見た紙芝居の絵より僕の方がうまい」と酔いしれたことです。丸描いて、鼻描いて、点みたいな落書きだったんでしょうけれど（笑）。だから僕の場合、絵を描くというのは、自分の描いたものが素晴らしいという、思い込みと誤解の上に成り立っているのではないかと考えます。父や母もよく幼い私を褒めてくれて、何を描いても良いのだと信じられる自分にしてくれたのも大きいと思います。物事を続けるのに大切なのは、客観的に見てちゃんとできているか、できていないかではなく、やっている当人がこれでいいと思い込む能力だと思うんです。

小さい頃に描いた絵のイメージ。ひらがなの「た」の字の右を半円で囲っただけの落書きのようなものを描いて、髷を結ったお侍さんの横顔のつもり

column　創作の参考にしていること

過去の偉人や芸術家の生き方とかやり方が創作の参考になっていたりもします。例えば、ゴッホ。彼は素晴らしい絵をたくさん描いたのにも関わらず、生きているうちは全然評価されなかったでしょう。つまり、例え自分が一生懸命に、すごくいいものを描いていても、結果が出ない、あるいは評価されていなかったとしたら……僕はしょうがないし、文句は言えないと思っています。だって、ゴッホぐらい素晴らしくても評価されなかったんだから。いろんなものを見ていけば、その自分の境遇や評価に文句は言えないです。そんな風に僕は、先人たちのしたことを見たり、知ることも創作の手がかりの一つとしています。

《よこての路地》1976
幼い日の路地を思い出して描いた作品です

小学校低学年くらいからお話を作るのが好きで、自分で考えたストーリーをアニメーションみたく動かしたりして、空想の中でよく遊んでました。「不思議な動物と旅をする、脇道の公園が太古から続く大森林になり、マンホールの下には地底人の住む世界が広がり、空に浮かぶ雲には浮遊する島々が隠れている……」。子供の頃はそんな自分の好きなことばかりを考えていたので、学校に通う道々が毎日大冒険でしたね。

　さかのぼれば、小学4年の時、学外展に出された自分の絵を見に行くと、上下逆に展示されていました。驚いて、担当の先生に言いに行くと、「あの方が抽象作品として強くて良くなるからそうした」とのこと。確かにそうでしたが、ただ花瓶を描いた絵ですよ（笑）。その先生は、世界に名だたるあの「具体美術」のメンバーで、ご自身の作品も、画面の絵具をガスバーナーで焼いて、気に入ったところを切り取るといった作風でしたので、その判断はまあ納得できました。今にして思えば、この頃から中学にかけて、「具体美術」の白髪一雄さんの、足で描いた巨大な油絵や、吉原治良さんの抽象画などを、多感な少年に見せてくれた先生方にあらためて感謝したいです。

迷いが吹っ切れた

　僕は祖父の家の久宝寺（大阪市中央区）で生まれました。祖父は井上悌蔵（雅号：木它）という日本画家です。浅井忠に師事し、後に日本画家に転身しました。日本のポスターの草分けといわれる赤玉ポートワインのポスター、サントリーのオールドや角瓶のパッケージなどのデザインをした人なんです。父に何度も、どんなに祖父が立派な人だったかと誇らしく聞かされて育ったので、「画家は偉いんだ」というイメージから、美術に興味を持つようになりました。祖父の作品や骨董品が家にあり、小さい頃から美術や音楽に触れる機会も多かったです。そして父は薬剤師でしたので、専門書が家に置いてあり、科学に触れる機会も多く、学生の頃は、生物学者とか原子物理学者とか考古学者にも憧れていました。なので、絵の道かサイエンスの道かどうしようかと、高校2年生ぐらいまで迷っていました。

　しかし父に「進学するなら国公立」と言われ、国公立しかダメとなると、自分の成績では医学の道は手が届きそうになく……美術部に所属していたわけではなかったのですが、高校卒業後は美術大学に進学しました。学科は「美術の世界ならデザインの道に」との父のアドバイスからデザイン系のコースがある学科に所属しました。デザインの技術を身につけておけば、売るための絵を描かなくてもデザインの仕事をメインにして生活していける。好きな絵は好きな時に描けばいい、という父なりの考えがあったのではないかなと思います。しかし、大学に行ってもまだ悩んでました。

　金沢美術工芸大学には金沢大学から哲学の先生が非常勤で教えに来られていて、大変お世話になりました。思い出深いのは、ある雪の日のことです。その日は、受講生が僕一人しかおらず、普通でしたら休講になると思うんですが、それでも哲学の先生は、平然と紫色の風呂敷をほどいて「ではイギリス観念論の続きを」と授業を始められたんです。ところが僕は、唯一の受講生にも関わらず、つい途中でうとうと寝てしまったんですね。はっと目を覚ますと板書が何行か増えてて、平然と「そこでバー

《曾祖父の庭Ⅲ》2005

祖父木它の家の庭の写真
5歳まで住んでいました

浅井忠さん（雅号：木魚、黙語）
日本近代洋画の先駆者として極めて大きな功績を残した洋画家。1875年に国沢新九郎に師事し、翌年工部美術学校に入学、フォンタネージに師事する。代表作に「春畝」「収穫」「グレーの秋」などがある。

トランド・ラッセルは……」と続けているんですよ。それで哲学者というのは偉大なもんだなと。そんなことがあり、僕も例え講演に一人だけしか集まらなくてもやろうと思いましたね。それからその先生に教えを乞うというか疑問を聞いてもらうようになりました。哲学の先生も僕を気に入ってくれて、時々授業終わった後「井上くんお茶でも飲みますか」と誘ってくださったり、本をいただいたこともあります。記号論理学の本で、読んでもよく分からなかったけれども（笑）。

　そしてある時、先生に「僕は本当は哲学とか心理学の道に進みたかったのですが、美術で間違いなかったんでしょうか」と打ち明けたんです。そしたら先生が「私は哲学を仕事にしているけど、教師として知識や成果を切って売っているようなものです。あなたは絵が描けるんだったら、自分の哲学をビジュアルで表現するということをやれば、すごくいいんじゃないですか」と。その言葉で迷いが吹っ切れましたね。それから猛然と絵に向かうようになりました。絵は単に絵ではなく、描くことで眼前の世界を見つめることができ、この世界の本当の姿や自分の考えを探求できる手段でもあると思います。世の中どうも本当はこんな風になってるんじゃないか、でもそれはよくわからないから絵を描いて探してみようと。こうして、絵を描くことに対しては前向きにはなれたのですが、「こんなんじゃダメだ、まだ足りない」という思いが強くなり、明日には死んでしまうような勢いで、ただ焦り、まるで生き急いでるかのように過ごした時期もあります。でも、今振り返ると、そんな時に楽器やお茶を始めたり、いろんな書物に触れたので、未知の地域を踏査するように、自分がここにいることの本当の意味について考える、いい期間だったように思います。

飛び石を飛んでるみたい

　大学生の時に「教育の資格だけ一応取っておいたほうがいい」と父に言われたので、教育実習に行き、教員免許は取得しました。大学卒業後は広告代理店に勤めたのですが、仕事が大変でこのままだと体を壊してしまうと悩んでいたところ、高校時代の恩師が定年退職するにあたり、母校だから学校に尽くすだろうと僕に後任として声を掛けてくださいました。それで、先生になったんです。本当は5年か6年で辞めるはずだったのですが……気づいたら随分と長く勤めていましたね。

　1992年3月に、19年ほど勤めた府立高校の教師を辞めました。何もすることもないまま、あっという間に4月を迎え、家の裏の河原の土手に咲いた満開の桜の下で「これからは自営でいきます」というハガキに使う写真を撮りました。当時の、足が地面についていないような、頼りないふわふわした感じを今でもよく覚えています。ハガキを20枚出した時点で、家内が「お義母さんに、20年勤めてたら恩給が出ると説明してあるのに、ハガキにわざわざ19年と書いていいの？」って。これを母が見ると心配なので、もう出さないでほしいと頼まれました。身分は公務員なので安定はしていたのですが、教師の終わり頃は急に白髪が増え、夜はうなされ寝言を言い、「自分はこんな事をしているべきではない」という思いがことあるごとにこみ上げてきて……。でも本当に辞めて良かった。「今の自分が本当の自分」だと思います。たむらしげるさんから架空社、架空社からピンポイントギャラリー、ピンポイントギャラリーに宮崎駿さんが来られて……。今振り返ってみても、まるで飛び石を飛んでるみたいにすごい展開だったなと思います。勤めている時はどうやって辞めたらいいのか悩んでいたのに（笑）。

イバラード目

　イバラードは、パラレルワールドではなくて、ひらたく表現すると「気の持ちよう」。見方を変えれば今現在いるこの世界なんです。宮崎さんが「イバラード目（め）」とよくおっしゃいます。「イバラード目（め）」でものを見ることができる人の見ている世界がイバラードです、と。だから、あなたが今いるところを中心として何キロかの広がりがイバラード。これがどこまでかは、あなたがどこまでをイバラードだと思っているかによって変わってきます。要はその人次第ということですね。

　ある時、オーストラリアの方に「この絵は懐かしい。これはウチの家の近所だ」と言われたことがありました。そんなはずはないですと言うんですけども(笑)。スペインの方にも、

Photos courtesy of Naohisa Inoue

父は子供に優しい人で、食べ物が十分なかった当時、ドジョウを捕ってきて自分でさばき、蒲焼にしてくれたり、冬にはタニシを水の枯れた田んぼからとってきてゆでて、タニシ汁にして食べさせてくれました。

井上直彦さん
1915年、日本画家だった井上悌蔵さんの次男として生まれる。大阪府出身。薬剤師として藤沢薬品工業に務める。

祖父がサントリーウィスキーボトルのデザインを手がけていた際、自分で作ったサントリーの角瓶ラベル案を縁側に並べ、父に「直彦、どれがいいと思う？」と聞いたそうです。父がどう答えたのか聞きませんでしたが。

浅井忠さん一周忌の際の弟子たちの集合写真です

井上悌蔵さん（雅号：木它）
1885年生まれ。浅井忠さんに師事し、後に日本画、俳画を描き活動していた画家。主な作品として、赤玉ポートワインポスター「グラスを持つ半裸の女性」、サントリーウィスキーボトルのデザインなどがある。

干し柿の絵

梅の絵

木它さんの自画絵

一番左が井上亨さんです。

井上亨さん（芸名：小泉徹）。
宝塚歌劇団男子部員の1期生。

男4人兄弟の末っ子で、歌がうまく冗談好きで、友達のように接してくれました。なので、オジさんとは呼ばず、「トオルさん」と呼んでいました。

座るまでが けっこう たいへん
音楽もすき 本も写真も 生きものも
← それが創作には、多分⊕だと…思います。
プラス

自分の近くにグラナダというところがあり、僕の絵の《ウチナダ》はきっとそこと関係あるんじゃないかとか言われるんですね。ウチナダ（内灘）というのは海に面した金沢の近くの町なんですが（笑）。

自分の世界がある場所

以前、僕の絵を見た方によく、「これはどこですか」と聞かれていたんです。「架空の世界です」と答えても良かったのですが、名前をつけたらどうかと思ったんです。何故そう思ったかと言いますと、金沢美大に通っていた時、通学中の列車の中で、僕はよく宮沢賢治の文庫本を読んでいました。そういう時、車窓からの景色が、少しだけ賢治の童話世界のように見えたんです。風景に重ねた心の映像を、賢治は「心象風景」とし、実際には岩手県にあたるその場所を、エスペラント語風にアレンジして「イーハトーブ」と呼んでいました。僕は、自分の風景を描くうちに、賢治のこのやり方に習い、自分の描いた、実際とは少し違う世界に名前をつけてもいいのではないかと感じ、自宅がある場所の地名、茨木市から「イバラード」と名付けました。いかにも簡単そうなネーミングに思えてしまいますが、大事なのは言葉のニュアンスです。国文学の先生がいらっしゃったら、それは違うとおっしゃるかもしれませんが……、「いにしえ」という昔を意味する言葉がありますね。あの言葉、なかなか面白いので僕好きなんです。「へ」というのは「Where」、場所を意味します。岸辺とか野辺とか山辺とか海辺とかありますね。あの「べ」です。「べ」がどうして「いにしえ」と関係あるかと言いますと、「いにしえ」の「え」は場所という意味の「べ」なんです。つまり、「去ってしまった場所」というのが「いにしへ」。単に昔っていうのが、もう今はないから昔ではなく、かつてあり、そして去ってしまった事を意味する。そんな風に一字一字に意味を持っている日本の大和言葉のニュアンスが好きなんです。

「イバラード」の「イ」。「い」という音は屹立したニュアンスがあり、「自分」という意味になります。例えば古い日本語で自分のことを「わい」と言いますよね。英語の「I」それからドイツ語の「Ich」という風に、「イ」という言葉は自分の事、あるいは自分のいる場所を表す単語が多い。それから「イバラード」の「バ」は、「World」とか「にわ」の「わ」。あるいは、人が集まっている場所の「わ」のように、ひとつの「世界」を示している単語が多い。「ラード」というのは、「Field」とか「Yard」のように「広がった場所」というニュアンス。

このように「イバラード」は〝自分の世界がある場所〟という風な意味づけと解釈をし、これは自分の世界を表現する上でも非常にいいんじゃないかと考えました。それから、「これはどこですか」と聞かれた時に「イバラードです」と答えると、面白いことにその場所が非常に具体的な気がして、実際にある見慣れた駅も、電車も、道ばたの小石も、全ての見える景色が全然違って見えてくることに気がついたんです。

これからどういう方向へ絵の世界が進んでいくのか、という質問も多いですね。これは少し前に気づいたことなのですが、書籍のタイトルが、『イバラード博物誌』『空の庭、星の海』『ジパングの岸辺』『虹化石の街へ』『迷路の街で聞いた話』『ここが、その街』と、意識したわけではないのですが、イバラードへ上陸して、そしてだんだん具体的に街の中へ入っていくような流れになっています。だから次はきっと「私の住むこの家で」とか「この窓辺で今」など、さらに一歩中へ入ったタイトルになるんじゃないかと予想しています。こうして解き放った無意識を、後から解釈してみるといろんなことが見えてくるんですよね。

今見ている世界は素晴らしく、不思議で、わくわくする、そんな表現できないくらい面白いものだと誰もがわかる絵を描きたいですね。絵描きの仕事の一つは、この世界の素晴らしさを伝えることだと思っています。諦めずにとにかく続けていれば大抵のことはできるようになると信じています。楽しむ事と諦めない事は、どちらも一種の才能。僕は長いことかかったけれど、いい人たちと出会えた、いい人生だと思います。

100 Questions

普段あまり聞けない好きな飲み物、座右の銘、習慣から、ファンなら知りたい好きな色、制作に要する期間など、100の質問をまとめてどどーーんと聞いてみました。

Q 1. 好きな色は？
全ての色が好きだし、興味深い
Q 2. 好きな季節は？
どの季節も好きです
Q 3. 好きな歴史上の人物は？
千利休
Q 4. 好きな飲み物は？
ダージリン（ファーストフラッシュ）とオロナミンC
Q 5. よく飲むお酒は？
飲まない
Q 6. 理想の朝食メニューは？
白ご飯に納豆と生卵、白味噌のインスタント、蜂蜜ヨーグルトと何か魚料理を一品
Q 7. 一番好きなおにぎりの具は？
昆布
Q 8. 寿司のネタの中で一番好き？
貝類全般
Q 9. 好きな果物は？
ラ・フランス
Q10. 白いご飯に一番合うおかずは？
のりと生卵
Q11. ご馳走と言ったら？
鰻
Q12. 悲しいものといえば？
二度と会えないこと
Q13. 小さい頃のあだ名は？
いのちゃん
Q14. 今までで一番自慢したい体験は？
一枚の案内ハガキで宮崎さんが来てくれた
Q15. 今までした中でもっとも悪いことは？
言えません
Q16. 人生最大の忘れ物は？
父親が亡くなる前にお礼が言えなかった
Q17. 人生最大の怪我は？
４～５歳の時、壁によじ登って落ち、3㎝縫う怪我をした
Q18. 今までについた一番大きな嘘は？
何かありそうな気がするけれど……嘘はついた瞬間に忘れる
Q19. やってみたかったアルバイトは？
アルバイトはしたくない
Q20. 二度とやりたくないアルバイトは？
選挙運動の運動員。
Q21. 幽霊か UFO をみたことはある？
どちらもない
Q22. 制作スタイルに欠かせないものは？
音楽
Q23. 初めてもらった給料の使い道は？
KAWAI のアップライトピアノ
Q24. 初めてひとり暮らしをした時の間取りと家賃は？
寮だったけど、三畳、３万円くらい？
Q25. ここ最近の一番大きな買い物は？
陶芸窯 80 万円
Q26. 最後に泣いたのはいつでその理由は？
父親が死んでしばらくしてから、思い出して泣いた
Q27. ファーストキスの場所は？
（相手は奥さんで間違いないが）場所は思い出せない
Q28. 初めてのデートの場所は？
京都、大阪、金沢のどこか
Q29. イバラードはいつ頃思いついた？
高校教師をしていた頃の 30 歳ちょっと過ぎ
Q30. 視力は？
両方とも 2.0。でも、乱視のせいで遠くのものは近く、近いものは遠く見える。
Q31.「似ている」といわれる有名人は？
ガンダルフ（ロード・オブ・ザ・リング）と、スティーブ・ジョブス（両者とも尊敬しています）
Q32. チャームポイントは？
楽天的なところと大阪弁
Q33. 自分の体の中で嫌いなところは？
猫背
Q34. 自分の性格をひと言で表すと？
物怖じしない
Q35. 長所は？
なんでも肯定しようとしている。ペンギンのように。肯定ペンギン
Q36. 短所は？
感情の落差が激しい
Q37. 癖は？
忘れ物
Q38. 口癖は？
そうやねー、ほんとかねー
Q39. 座右の銘は？
外的偶然を内的必然とみなす
Q40. 自分を動物に例えると？
なまこ
Q41. よく見るテレビ番組は？
観ません
Q42. 好きだったテレビ番組は？
イタリア映画のピノキオ
Q43. 好きなお笑い芸人は？
中田ダイマル・ラケット
Q44. 今、気になっている著名人は？
スティーブン・ホーキングとリサ・ランドール
Q45. 好きなスポーツ選手は？
イチロー
Q46. 挑戦してみたい格闘技は？
三船十段みたいな人の柔道
Q47. オリンピックに出場できるとしたら、どの種目に出たい？
水泳の１５００ｍの自由形
Q48. 家の中で気に入っている場所は？
窓辺
Q49. 週に何回コンビニに行く？
５～６回か、１日１回くらい
Q50. 家事はする？
掃除、たしなむ程度
Q51. 得意料理は？
自分用の包丁を持っている（左用の）。カツオを捌いたことがあるし、カニ肉を殻から食べやすいようにつまみだせる
Q52. １日のうちでもっとも幸せを感じる瞬間は？
帰ってきて、家が見えてきた時
Q53. 朝起きて一番に何をする？
仏壇の水をかえる
Q54. よく見る夢は？
旅から帰ろうと身支度をしているのに、物が全然揃わない
Q55. 寝る時は何を着ている？
あたたかいもこもこパジャマ（寒がりだから）
Q56. 健康のためにしていることは？
ラジオ体操第１、第２をして、その間に首、足、腕の運動。時間があれば５時半から水泳。ごくたまにグリコ体操を（宮崎駿伝授）
Q57. 平均睡眠時間は？
深夜１時に寝て、８時ぐらいに起きるから、平均７時間半ぐらい。個展前は約３時間
Q58. 安眠のためにしている事は？
お風呂で温まる。眠れない時は、腕立て伏せ、腹筋、背筋、腕のプレス、屈伸運動を全部 20 回ずつ
Q59. ストレス解消法は？
絵を描くこと
Q60. パソコンは Mac 派？ Windows 派？
Windows 派
Q61. 好きな動物は？その動物のどんな仕草が好き？
ゾウとシベリア狼。同じ動作を繰り返している仕草
Q62. スーツは年に何回くらい着る？
個展の度
Q63. 好きなファッションブランドは？
イタリアのブランド
Q64. 今一番気に入っている時計は？
スウォッチ
Q65. 旅先に必ず持っていくものは？
絵具セット、カメラ（Nikon D500）
Q66. もらってうれしいプレゼントは？
なくなるもの（花とか、お菓子とか）
Q67. 本は、いつ、どんな場所で読む？
トイレの中
Q68. 音楽は、いつ、どんな場所で聴く？
絵を描きながら
Q69. よく買う雑誌は？
Newton
Q70. 購読している新聞は？
新聞は嫌いでとりません
Q71. 好きだった童話、昔話は？
リップ・ヴァン・ウィンクル
Q72. 転職を余儀なくされたら何する？
ミュージシャン
Q73. 外国の国籍を取得できるなら、どの国？
スウェーデン
Q74. 一番ほしいドラえもんの道具は？
どこでもドア
Q75. 宝くじが当たったら、何をする？
アトリエを広くする
Q76. １億円あったら何に使う？
写生旅行に行くかなぁ
Q77. 無人島に３つ持っていくなら何？
絵具セット、ナイフ、丈夫な紐
Q78. 理想の死に方
寝ているうちに
Q79. 最後の晩餐は何にする？
肝心なのは何を食べるかではなく、食べている相手だと思います
Q80. 取りたい資格はある？
資格のいるようなものは嫌い
Q81. 今一番ほしいものは？
seaboard キーボード
Q82. ほしい才能は？
即興演奏の才能
Q83. 縁起をかついでいることはある？
理屈なく、やっていて楽しいことは間違っていない
Q84. 井上さんにとって「なつかしい」とは？
名のないものを描き“名をつけて懐かしくする”のが絵の仕事です。「懐かしい」は「なつく」から来ています。名を付けられると、懐きます。科学もそうですね。星も生きものも、名前をつけるところから認識が始まります
Q85. 入っていたサークルは？
部活は剣道部で冬に胴着が凍り、辛かったので一年で辞めてしまいました。けれど個人的にお茶を習いに４年間通い、地方講師の免状をもらいました
Q86. イバラードに、争いや戦争はある？
イバラード、タカツング、スイテリアの３つの国の間で、文明に対する考え方の違いから小競り合いが起きています
Q87. 演奏に目覚めたのは？
小さい時にピアノを習い、挫折しました。しかし、中学校で「変奏曲」を演奏する授業があり、その時リコーダーに惹かれました。そして、大学生の時にピアノとギターを自己流で始めてからハマりました
Q88. 絵と音楽の共通点は？
自分のイメージが形になるところ。素材研究が楽しいこと。やっている間は楽しくて時間を忘れること
Q89. 井上さんにとって絵と音楽の違いは？
絵は仕事にできたが、音楽は全然上達しない。絵は技術や腕だが、音楽は耳の問題が大きい。絵は完成後心が満たされるが、音楽は絶望する
Q90. アナログ、デジタルからそれぞれ連想するイメージは？
アナログは、ログがロゴスのことで、文法とか理屈とか論理をアンで否定。つまり、非論理的
デジタルは、乱れを意味する "Jitter" を di で否定してる。揺らぎのない、不安定さのないこと
Q91. 人生のターニングポイントは？
それまでは否定人間だったけれども、今の奥さんと結婚してから変わった。よく奥さんが例えで言うことがあるんだけれども、凧自身は大空高く飛んでいると思っているが、実はタコ糸で引っ張って安定させていて、子供たちがそれにぶら下がっている。奥さんというタコ糸と、子供というタコ足ができたことにより、凧がまっすぐ飛び始めた
Q92. 絵と映像で思うことは？
動いたら楽しいけれども、自分は絵の方が向いている。絵は何度でも、自分の求めているものができあがるまで改善改良できるが、映像はやり直しが難しい
Q93. 一度に何点もの作品を同時並行で制作されるそうですが、平均どれぐらい？また、最大何点ぐらい？
平均は難しい。だいたい 40 点ぐらいかな？でも、額を入れる直前にまた手を加えたり、人物を変えたり、10 年以上前の古い絵を引っ張り出してきて加筆したりしてます
Q94. 絵を描くのにかかる日数は？
イメージが明確な絵はすぐできますが、最短２日、平均２週間、最長 20 年ぐらいですかね
Q95. スランプはありますか？
スランプはおろか、何を描こうか困ったことがないです。描けない時は、別の絵を描きます。「そんなの答えになっていません！」と言われたことがありますが、今でさえ描きかけの絵は 30 枚以上あり、どれもすぐに描けます
Q96. 夢とは？
夜眠って見る「夢」と将来への希望としての「夢」は、違うものなのに同じ名で呼ばれている。この二つの共通点は実現するかどうかわからないものという点
Q97. シンセスタとは？
シンセスタは結晶の形や粗密、切り出す方向によりいろいろな性質を持つ、とんでもなく便利な石
Q98. ラピュタとは？
ガリバー旅行記に載っている、宙に浮かぶ島。その辺にある普通の石。どこにでもラピュタはある。見分ける方法は、丸い石を見つけた時に、そこを掘ってみる
Q99. ソルマとは何ですか？
人が思っていることを、他の人に見えるように、「人の考えの映像化」ができるのがソルマです
Q100. イバラードを実際に作るとしたら？
一番やりたいのはビルひとつでも街ひと区画でもいいから、自分の好きなようにデザインしてみたいです

タ, T ;質量、実体 ダ, D ;	ナ, N ;否定	ハ, H, F, P ;力(活力)	マ, M ;大きい秩序のなかの別秩序	ラ;進行、変化 R ;連続的変化 無意識的	 L ;不連続な変化 意識的
タ(Ta) ;一様な広がりのある実体 田、他、多、 誰 宅タク 玉タマ [タク] 炊く 魂タマ [タル] 足ル [タシ] 確か	ナ(Na) ;広がりを否定したもの 名には実体がなく実存を限定する 名(name) [ナシ] 無し なじる [ナグ] 凪ぐ なぎたおす [ナス] 成す	ハ(Ha) ;活力があり、一様な広がりのある存在 歯、葉、母(fafa papa) [ハル] 春、張 膨る spring タマキハル [ハシ] 愛し [ハウ][ハク] 操吐	マ(Ma) ;独立した別秩序を持つ存在 魔、間、目(マ)の子 →まなこ(眼) man magic macine magnet アマ、ヤマ シマ、タマ、ツマ、ヌマ	ラ(Ra) ;連続して変化する広がりを持つ存在 Race (人種、家系) Rail (レール) Rafica (ラフィカ) ※イバラード語 Rain (雨)	ラ(La) ;不連続に変化する広がりを持った存在 Laputa (ラピュタ) Labyrinth (迷宮) lace (レース:織)
チ(Ti、chi) ;集中し屹立した実体 地、血、乳(チ) [チル] 散る(ひとつひとつになる) ↔[コル] 凝ル	ニ(Ni) ;否定的に屹立するもの 荷(ニ) 丹(朱) [ニグ] 憎む 濁る 苦い night [ニル] 似る 煮る	ヒ(Hi) ;活力が集中して存在する状態 火、日、陽 光(ヒカリ) 昼 [ヒル] 干る [ヒク] 引く	ミ(Mi) ;独立した別秩序を持ち屹立するもの 身(ミ) might 命(ミコト) [ミル] 見る	リ(Ri) ;連続して変化する集中した存在 Rib (肋骨、翅脈) (畑のうね) ribbon Rich (豊かな、濃い) Rick (積みわら) Ridge (山峰)	リ(Li) ;不連続に変化する集中した存在 Lighta (リグタ) Light (光)
ツ(Tu) ;中空で実体のあるもの 津 [ツク] 付く 突く [ツル] 釣る ツマ(妻)(サシミの〜)	ヌ(Nu) ;否定的で本体がなく、外側があるもの [ヌル] 寝ル、塗ル 奴(ぬ) ぬるい 主(ヌシ)↔アルジ (同じ主でもニュアンス逆) ぬかるみ ぬく(抜く) 脱ぐ	フ(Hu) ;中空で外側に活力がある存在 [フク] 吹く、福 [フル] 振る、経る →古い 風(フウ) 踏む、伏す ふたつ	ム(Mu) ;独立した別秩序を持ちうつろなもの 無(ム) 胸(ムネ) 虫(ムシ) [ムク] 向く 皮をムク むべなるかな	ル(Ru) ;連続して変化する中空の存在 rub (みがく、こする) rue (後悔する) ruffle (しわくちゃにする 羽毛を立てる 波立つ) ruin (荒廃)	ル(Lu) ;不連続に変化する中空の存在 Luck (運) Luc (光 ラテン lux) Lung (肺)
テ(Te) ;末端として存在し実体あるもの 手 右手、山の手、裏手 [テル] 照ル	ネ(Ne) ;末端で否定的なもの 根、ネの国(あの世) ネズミ(ネに住むもの) New →なかったもの、転じて新しいもの 否定 存在 negative	ヘ(He) ;活力が末端にある状態 [ヘル] 減る へり(フチの意) 辺(ヘ)=whereとの関連は未分 ヘタ(下手)(柿のヘタ)	メ(Me) ;独立した別秩序を持ち末端にあるもの 目(メ) 女(メ) [メク] 春めく トキめく [メス] 召す	レ(Re) ;連続して変化する末端の存在 re—(再び) reach (届く) remenber return ready (用意できた) read (読む)	レ(Le) ;末端にある不連続な変化をするもの Lead (先頭、導入、手がかり、ひきづな) leaf (葉) leap (跳ねる)
ト(To) ;主体と離れて存在する実体あるもの 土(ト) 戸(ト) 外(ト) (由良の戸を〜) 泊(トマリ) 富(トミ) 徳(トク)	ノ(No) ;否定的で独立したもの 野、[ノク] 除く 退く [ノル] 告げる、のりと (ことばで実体がない) nothing	ホ(Ho) ;活力が主体と離れた客体にある状態 [ホグ] 寿ぐ 穂(ホ) [ホシ] 欲し 方(ホウ) 炎 ホノホ 堀る [ホル] 惚れる	モ(Mo) ;独立した別秩序を持ち、本体と離れて存在するもの [モグ] 木の実をもぐ モガリ(古、葬礼) [モス] 燃す 藻(モ) 面(オモテ)	ロ(Ro) ;連続して変化する本体と離れた存在 road (道) roam (放浪する) roar (ほえる) robe (長い上着)	ロ(Lo) ;本体と離れて不連続な変化をするもの Locus (位置、軌跡、ラテン LOCUS) logic (論理) logos (理性) loaf (パンのようなかたまり)

イバラード音韻学

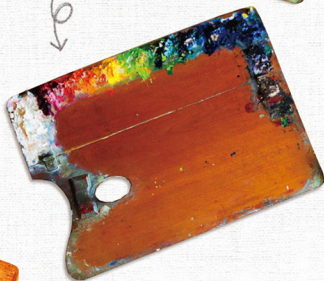
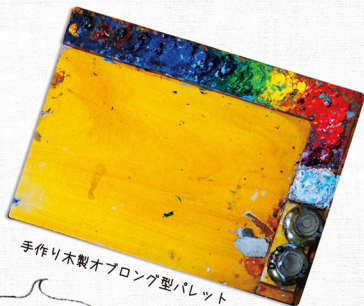
行／子音・母音	ア [動詞形] ㋐+クグ／+ウ（～の状態にする）（～の状態になる）+ル　[形容詞形] ㋐+シ（～の状態） ア, A ；存在	ワ, W, V (u+a) ；大きく根源的な広がり	ヤ, Y (i+a) ；小さくまとまった局部的な広がり	カ, K ；凝集 ガ, G ；凝固	サ, S ；感覚 ザ, Z ；
ア, a ；一様な広がりを（場）持って存在するもの	ア(a) ；存在の場 吾(ア) 天(アマ、アメ) 頭(アタマ) 雨 [アウ] 合う [アク] 開ク 飽ク [アシ] 悪シ	ワ(Wa, Va) ；大きい広がりの存在 我(ワ)、輪 場(Va) WaTa＝海(古)(ワタ) Water 海神 ワタツミ walk⇒ワルク⇒アルク	ヤ(Ya) ； 屋(ヤ)、谷(ヤ) 山(ヤマ)	カ(Ka) ；広がりを凝集したもの カ(＝処：場所) 住み処、あり処 アスカ、渦、火 [カク] 書く [カグ] うかがう [カル] メリる	サ(Sa) ；一様な広がりの（場の）感覚 →実体は無い さも～、さ迷ふ さとし(さ＋利し するどい) →かしこいの意 [サグ] 探る [サル] 去ル
イ, i ；屹立し、一点に集中して存在するもの	イ(i) 意、 岩、石、板 居 [言ウ] [居ル] [行く] [生ク]	Wi(ウィ) Vi(ヴィ) ；根源的屹立 ワイ＝1人称、転じてI(英) 去(Wi＝ゐ)ぬ 例 ゐニシヱ (Wiにし辺)＝去りにしあたり→昔		キ(Ki) ；凝集して屹立するもの 気、木、城(キ) [キル] 切る、着ル キワ(＝境) キワめる キワどい [キク] 利く、聴く	シ(Si) ；集中し屹立した感覚 シマ(島) シホ(塩) シホ(潮) [シク] ～にシクはない [シル] しるし、白し 印し 知る 知ラス シメス
ウ, u ；中空で、中央が無くまわりが存在するもの （うつろなもの）	ウ(u) 宇(宇宙) うつろ、うしろ [ウク] 浮ク [ウシ] 憂シ 餓え 餓ム	Wu	ユ(Yu) ；中空の存在の場 [結ウ] [行ク] 湯	ク(Ku) ；中空で凝集したもの 句、空、苦 [クシ] 奇シ ビク [クル] 来る [クウ] 食ウ 愚(Gu)	ス(Su) ；実体のない中空の感覚 吸う、巣、洲 簾、酢、鬆、素 [スウ] 据ウ 末(スエ) [スク] 助ク(ス)
エ, e ；本体の周辺、末端 連なりの端として存在するもの	エ, (e) 柄 絵 兄(エ) 末(スエ)	We(ウェ) ；存在の周辺、端 Where→We →辺 例 水辺 山辺、川辺 ワタ(海) ナベ(辺) ヘヤ(部屋) イにシヱ(去にし辺) ヤエ、スエ		ケ(Ke) ；凝集した末端 毛、もののけ(気) 気配 気どる(ケ) [ケル] ～ありける 蹴る [ケス] 消ス 消スベクモアルカ	セ(Se) ；感覚の末端 背、瀬、兄(セ) せい(背) せたけ [セク] 急く 咳く 塞く [セル] 競ル
オ, o ；客体 主体と離れて存在するもの	オ(O) 尾、緒、男 [オル] 居ル、折ル [オク] 置ク	Wo(ウォ)；根源的存在が客体となったもの World Wood Wool work	ヨ(Yo)；より小さくまとまった存在の客体 世、余 [ヨシ] 良い、[ヨス] 止ス 寄ス 選る [ヨル] 除く [ヨク]	コ(Ko) ；凝集した客体 子(コ) カゴ(かけるコ) カイコ(飼い子) 個、粉、ココ(此処) [コル] 凝る [コク] ウンコク [コシ] 漉し [コス]	ソ(So) ；感覚の客体 ソ(それ) そち(相手) そちら [ソウ] 添う そこ(其処) ソト(外) 底(ソコ) そっぽ それる(外れる) そる(反る)

言葉と音について考え始めたきっかけは、Na 行がいろんな言語でも否定に使われていることに気づき、音には固有の印象があるのではないかと思ったからです。詩人のアルチュール・ランボーが作品『母音』で、AIUEO には色があると記しており、それもヒントになっています。（井上直久さん談）

Photo courtesy of Naohisa Inoue

NAOHISA COLLECTIONS

井上直久さんの「イバラード」を生み出してきた愛用の道具たち。
創意工夫によってアレンジが施された画材たちには、
多彩な表現技法を可能にするための工夫が施されています。

手作り木製ホールディングフランゼン型パレット
左用のオブロング型折りたたみ式パレット
室外写生の時、いつも持ち運ぶアクリルセット
手作り木製オブロング型パレット
以前使っていた手作りのパレット。現在はペーパーパレットを使用しています。
粘土で作って、釉薬をかけて焼きました。絵具が乾かないように入れておく「部屋」を深くして作りました。
手作り陶器デザイン絵具皿

0号カンバスサイズの油彩Box
水で描ける油彩
DUO（ホルベイン）の箱
中学生の時に父に買ってもらった油彩Box
市販の箱に、留め金を「パチン」
と付け、再塗装もしました。
手作りの小さなアクリルセット

ホルベイン社のカーペンターペンシル
もともとはレタリング用ですが、クロッキーなどに使っています

ARISTOの3FIT 1.3ミリノック式シャープペンシル
持ち運ぶのに便利で、サインやクロッキーなどを描く際に使っています

CLOSE UP

あらゆる穂先の筆たち

使いこんだ陶器筆洗

長年使っていたせいで筆洗いの角が
鮮やかに彩られています

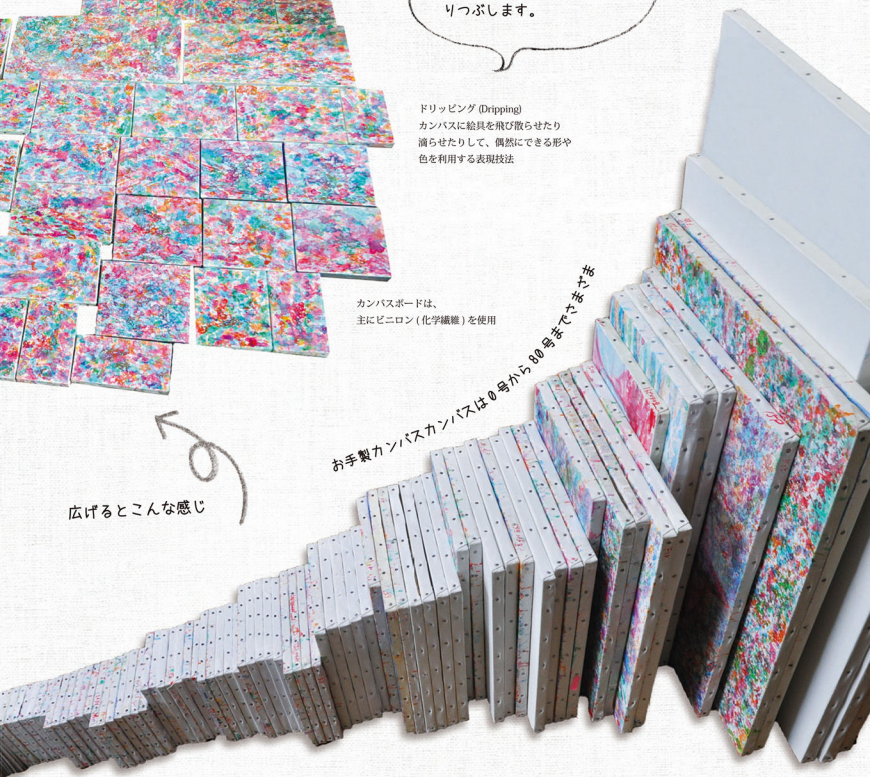
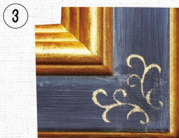
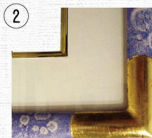
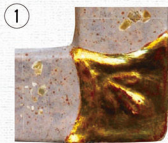
筆洗器 (brush-cleaning container)

白いカンバスに色を散りばめる際にファンを使用しています。

CLOSE UP

自作した台に、引き出しを取り付けたお手製のアトリエ台

ずっとクサカベ製のを使っていましたが、店頭からなくなってしまい、探すくらいならと、もう自分で作ることにしました。植木用の砂を手製の篩で好みの砂の粒の大きさにしています。
お手製のサンドマチエール
サンドマチエール（Sand matiere）
油絵、アクリル画、日本画などでさまざまなテキスチュア表現のために使われる天然の砂
白いカンバスに描くのは緊張するので、とりあえず全て塗りつぶします。
ドリッピング (Dripping)
カンバスに絵具を飛び散らせたり滴らせたりして、偶然にできる形や色を利用する表現技法
カンバスボードは、
主にビニロン (化学繊維) を使用
お手製カンバスカンバスは0号から80号までさまざま
広げるとこんな感じ

①
②
③
④
額縁　(Frame)

DATA

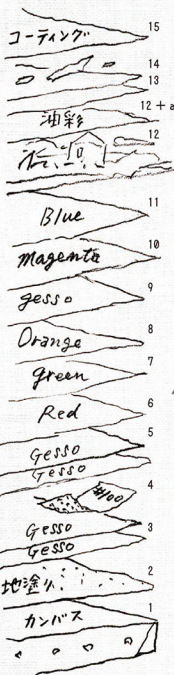
額はもともと、株式会社大雅堂で製作されていました　③④⑤⑥

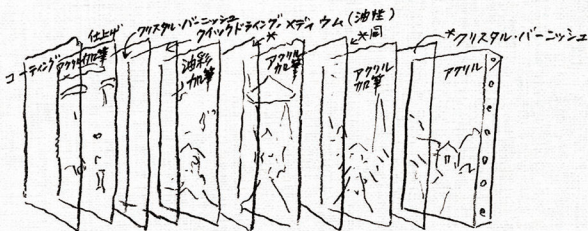
現在は（株）大雅堂の技術を引き継いだ下記の会社にて発注できます

株式会社アート・コア・マエダ関西
大阪府交野市星田北５丁目 53-12
TEL：072-893-8551

小谷美慕子さん
nicoro@zeus.eonet.ne.jp　①②

⑤

⑥
15 コーティング
14
13
12＋a 油彩
12
11 Blue
10 magenta
9 gesso
8 Orange
7 green
6 Red
5 Gesso Gesso
4 #100
3 Gesso Gesso
2 地塗り
1 カンバス

1. カンバス
2. ジェッソに＃100の篩で川砂を混ぜたもの
3. ジェッソ２層
4. サンドペーパーかけ
5. ジェッソ２層
6. 赤（フレームレッド　アルプスレッド）
7. 緑（オリエンタルブルー　バンブーグリーン）
8. オレンジ（オレンジレッド　マリーゴールド）
9. 白（ジェッソ）
10. 紅紫（チャペルローズ　パーマバイオレットダーク）
11. 青（オリエンタルブルー）
12. 描画層（アクリル）
　12＋a. 油彩加筆
　（クイックドライング。メディウムをコーティング）
13. クリスタルバーニッシュ
14. 仕上げ描画（アクリル）
15. 表層コーティング（クリスタルバーニッシュ）

下（地塗り）から上（コーティング）の段階に沿って、絵が完成していきます

※96ページの下地実験を元に生まれた作品を参照

加筆される際、右から左に沿った手順でアクリルに油彩で加筆し、さらに油彩の上にアクリルをのせて加筆していきます

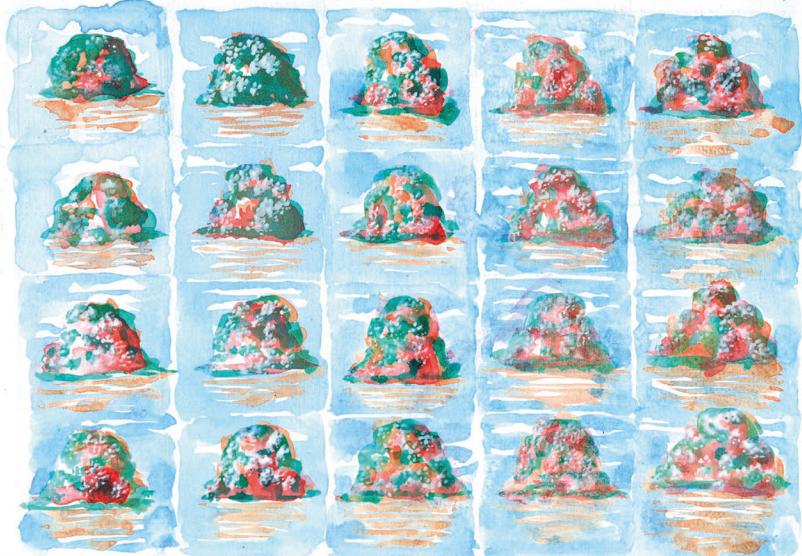
ラピュタによる下地実験

ホルベインアクリリックカラー ジェッソS

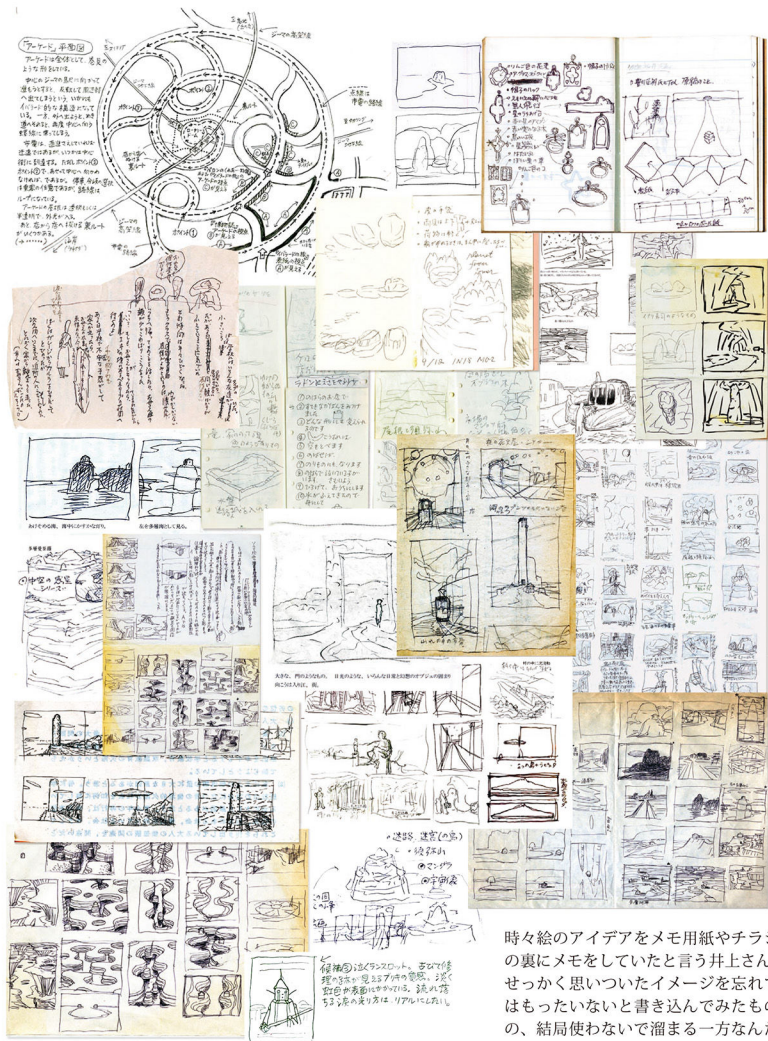
ホルベインアクリリックカラー ライトモデリングペースト

リキテックスジェッソ

Golden アブソーベントプランマー

ホルベインアクリリックカラー 吸水性下地／sand+gesso

《幼なじみ》 1998
画面を 20 に区切り、違う地塗りの素材で描いていく実験。
この実験の積み重ねにより今の作品創作スタイルが確立しました。
実験として描いたものでしたが、さらにラピュタを細かく加筆して、
背景も空に浮かんでいるようにした結果、一つの作品になりました。

1	
2	3

メモの山

時々絵のアイデアをメモ用紙やチラシの裏にメモをしていたと言う井上さん。せっかく思いついたイメージを忘れてはもったいないと書き込んでみたものの、結局使わないで溜まる一方なんだそうです。

一朝一夕では身につかない造形世界

こうして技術が磨かれていく

豊かな情景を生み出すには、基礎を大事にしつつ、
常に努力と探究心を惜しまない姿勢が大事なのでしょう。
デザイナー時代から、2000点あまりの絵を描き続けてきたという井上直久さん。
そして、教師時代はその経験を教育現場でも存分に発揮していました。
ここでは、作品の一枚に凝縮されている技法の一部をご紹介いたします。

Photo courtesy of Naohisa Inoue

100 の技法

<20styles> examples for stylization

1. 0.1 ミリ幅の線で
2. 0.5 ミリ幅の線で
3. 1 ミリ幅の線で
4. 2 ミリ幅の線で
5. 5 ミリ幅の線で
6. 2 通りの太さの線で
7. 5 ミリ幅の黒い切り紙で
8. 黒い切り紙のシルエットで
9. 丸筆の線で
10. 平筆の線で
11. かすれのあるブラシストロークで
12. Ｇペンで
13. 丸ペンで
14. 自分で削った竹ペンで
15. フェルトペンで
16. 硬い鉛筆で
17. 柔らかい鉛筆で
18. シャープペンシルで
19. 鉛筆で描き、スキャンしてプリント
20. コンテで描き、スキャン
21. パステルで描き、スキャン
22. シャドウで
23. 立体図形として
24. 紙ひもで
25. テープで
26. 針金で
27. ゴムスタンプで
28. 紙版で
29. 木版で
30. 孔版で
31. シルクスクリーンで
32. ドライポイントで
33. エッチングで
34. ステンシルで
35. 色紙の切り張りで
36. 色紙を手でちぎって
37. 自分で染めた紙で
38. フロッタージュした紙で
39. ペーパーレリーフで
40. サンドペーパーの目の違いで貼り絵
41. 素材の質感の違いでコラージュ
42. 粘土レリーフで
43. 厚紙切り抜きで
44. 合板切り抜きで
45. ソフトフォーカスで
46. 「にじみ」の線で
47. 「垂らし込み」で
48. 淡彩で
49. 鉛筆淡彩で
50. 不透明水彩で
51. ガッシュ色面平塗りで
52. カラーインクで
53. アクリル厚塗りで
54. アクリル薄塗り塗り重ねで
55. 油彩で
56. 鉛筆のハーフトーンで
57. 鉛筆と擦筆で
58. 色鉛筆のハーフトーンで
59. ペン画のクロスハッチングで
60. ペン画の点描で
61. ペン画の平行線でで
62. スクラッチで
63. 黒いペンの輪郭線＋水彩で
64. ダブルトーンで
65. 三原色で
66. ＣＭＹＫで
67. 任意の３色で
68. 任意の３色と黒で
69. コラージュ (マッチ棒、ビーズなどで)
70. 砂で
71. 石に彩色して
72. 紙粘土で立体に (写真に撮る)
73. 紙粘土で立体にして彩色して
74. 油土で作り立体アニメに
75. 砂絵にしてアニメに
76. 小麦粉粘土でアニメに
77. 影絵に
78. カラーセロファンの影絵で
79. ガラスに描いて影絵に
80. ガラスに油彩で描いてアニメに
81. フォトモンタージュで
82. 人体のフォトモンタージュで
83. 光る材料で
84. 透明な材料で
85. 迷路として描く
86. 地形図として描く
87. ３ＤＣＧで
88. 基本形態の３Ｄで
89. ポリゴンの３Ｄで
90. 両眼視の３Ｄ画像で
91. 補色の３Ｄ画像で
92. 着ぐるみに作る
93. 仮面に作る
94. 風船に作る
95. ぬいぐるみに作る
96. 粘土で作り焼成して陶に
97. 歌舞伎や京劇のようなメイクで
98. 特殊メイクで
99. 金属廃材をハンダづけで立体コラージュ
100. 食材で立体に…

「100 の技法」は大学教師時代、「このうち 20 を選んで実験、実作させる」という課題用に、井上さんによってリスト化されたものです

Drawing × Painting

クロッキー、デッサン、カラーチャート、3D立体視など多種多様な技法を試し、日々技術を磨き続ける井上直久さん。ご自身の描きたいものの深奥を追求する創作の技術の一部をご紹介いたします。

デザイナーを経て教師をしていた20年間、何度も何度も個展をし、毎日毎日飽きもせずデッサンとクロッキーを描き続けました。それが今となっては、画家として自立するまでの下ごしらえになったと思います。

教師になってから出した描写の課題は、たいてい自分も描いてました。色彩演習も、出す前から自分でやってました。クラブ合宿の時も生徒と一緒になって、昼間は屋外で風景を描き、(屋外で写生する時は、2日で2枚仕上げるのがベストのペース――なぜ2日かと言うと、午前と午後では光の位置が違うからです。午前と午後で場所移動して描き、翌日も午前は最初の場所で仕上げ、午後は別の場所

さまざまな技法で描かれたクロッキー

線は少なく、外側の輪郭だけで

色彩感をやわらかい鉛筆で

カーペンターペンシルで明暗だけを

やわらかいたくさんの線で

明暗の境を線で描く

アウトラインと最小限の明暗で

一筆書き

アクリル絵具と油彩筆を使って

で仕上げる勘定です）。

夜は夕食後2時間以上、クロッキー（人物速写）をしました。だいたい3泊4日で100枚くらいのクロッキーを描いたと思います。

人物クロッキーは、「写真から描いてはダメですか」という学生が毎年いますが、本当の人間を描かなければ意味がないです。写真から描いた絵は、一見、形が整っているようですが、トレースのように平面から平面に写しただけなので、立体描写の訓練にはなりません。

描き続けてわかったことは、やはりこれでも描き足りないということです。最近、「絵が描けるというのはこういうことかもしれない」という感覚がたまに起こることがありますが、常にそういう状態にならなければ「私、絵が描けます」とは言えないのではないかなと。僕に特別才能があり、幸運があって、絵描きになったらすぐに認められたわけでもありません。僕は画家と呼ばれていない時期も、ずっと描き続けていました。

（井上直久さん談）

『五彩山水』
「墨に五彩あり」というように、墨には全ての色があるのを逆手にとり描いた、井上さん考案の作品。５色ぐらいの鮮やかな純色を塗り重ねて、重ねた色が分かるように周辺はわざと色をずらし、微妙な墨色にする「色彩遊び」。

『てるてる坊主』
学生用クレパスで描いた作品です。白いものを多彩な色で描きました。中間色が作れるほど意外にうまくクレヨンの色が混ざってます。

フィンガーペイントとマスキングインク

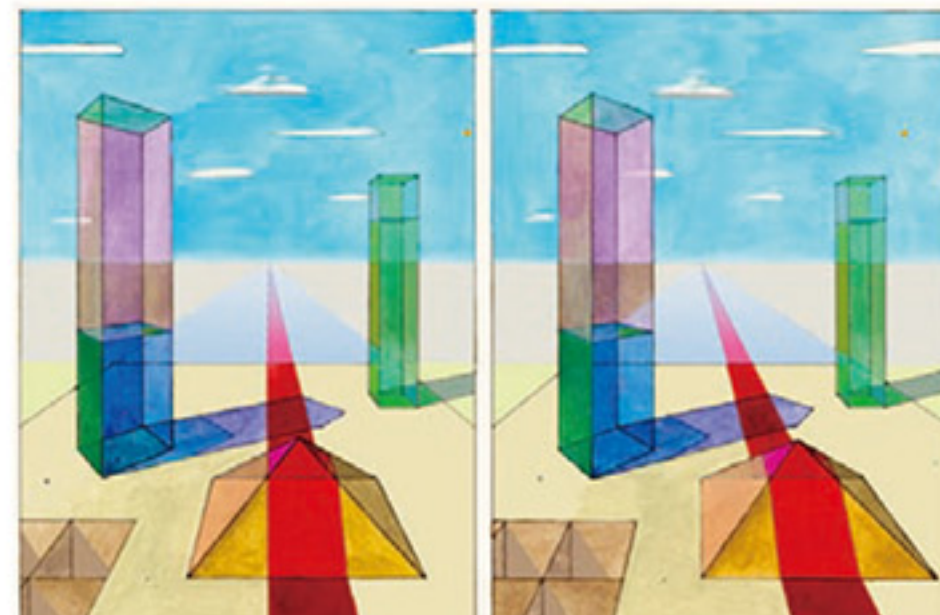
カラーインクの黒とマスキングインクによる淡彩

カラーインクの黒と白、マスキングインクによる表現

カラーインクの黒によるにじみ表現

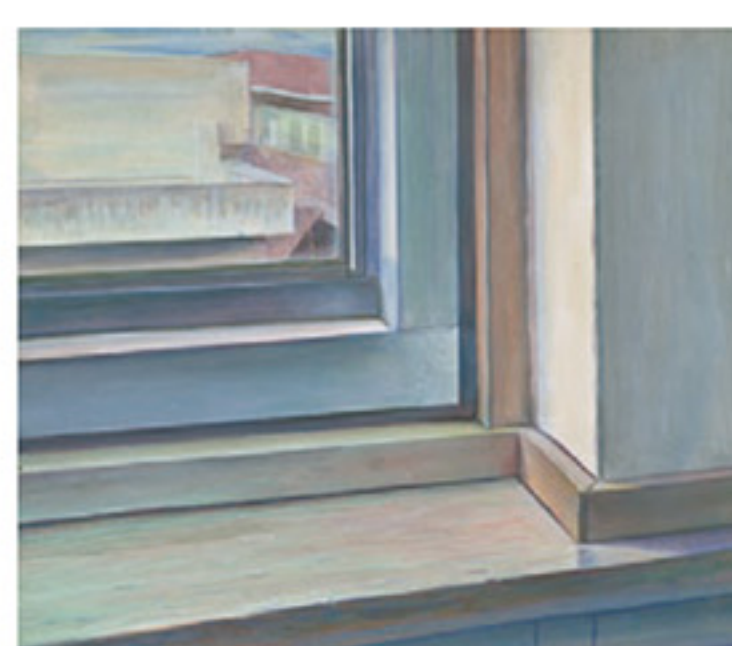
アクリル混色による墨色淡彩

サインペンと白修正

3D 立体視（ステレオグラム）。
目を寄り目にすると、立体に見えるように作図、彩色しています。

カラーインクによる透明混色

紙を重ねた判で作った版画

多色木版画

カラーインク

同じ窓をそれぞれ油彩（右）とアクリル（左）で描いた作品。
同じものなのにも関わらず、味わいが異なって面白いです。

(大阪府春日丘高校での資料)

絵本制作授業のサンプル。1年生の時に文庫本の表紙を作り、2年生で体裁を決め、3年生の時に中身を描くという、3年間かけてやっと完成する本作りの課題。うさぎくんが家に帰るまでの大冒険を描いた未完成の絵本の表紙。

Teaching

構図、色、空間、遠近など、絵を支えるさまざまな技法たち。それらを柔軟な発想で探求している井上直久さんは、教師時代もご自身の知識と技量を惜しみなく学生たちに伝授していました。今回、実際に授業で使用されていた資料の一部を公開いたします。

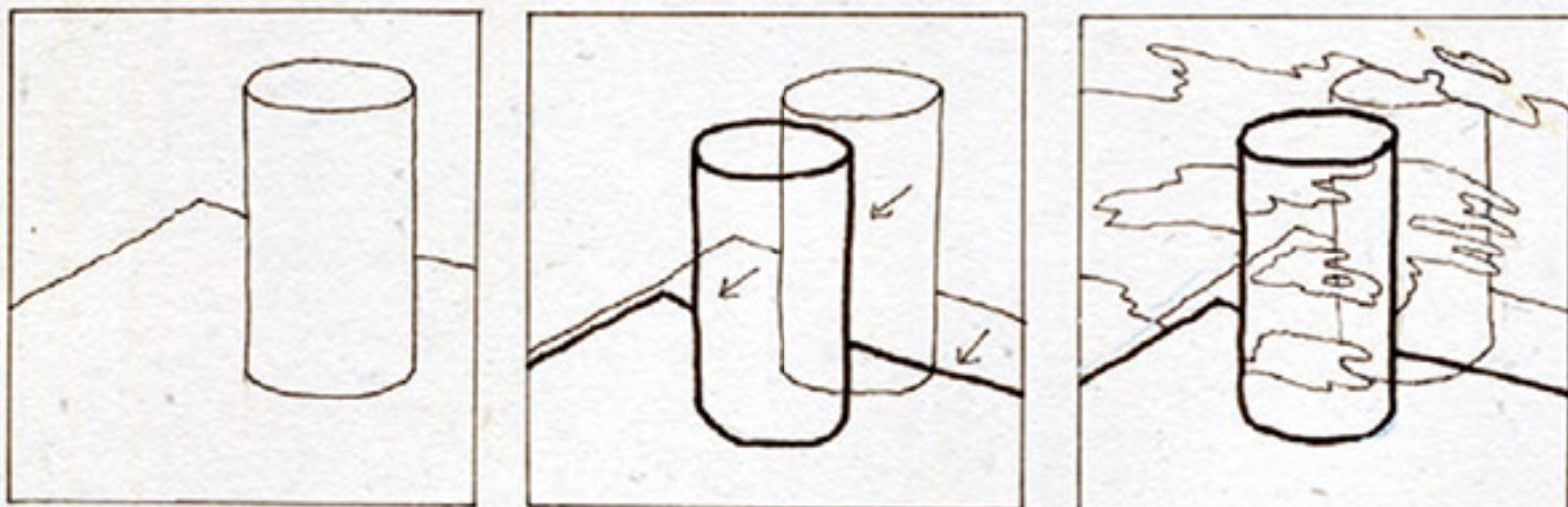
(大阪府春日丘高校での資料)

「描写演習」の授業で、構図、形、陰影などの基礎を教えるため、井上さんが独自にまとめた資料が配られました。

井上直久教室

描写演習Ⅰ————単色写生

ウルトラマリンブルーまたはバーントアンバーと、白だけで描写する。

(1)構図の修正——→平行移動

構図を直すときは、元の図を消さずに、平行移動した新しい図を描き、そのあと元の図の上に新しい構図の色を置いていく。(最小限の変更ですみ、元の図と色も生かせる)

(2)形——→円と四角

楕円

楕円に接線

けっして紡錘形ではない

円柱

見え方

よくこうなってしまうが

下辺が水平ならこうなる

横の面が見えるなら斜めになる

ここをよく起こしてしまうが実は思っているより鈍角

(3)陰影——→3種類の「かげ」

陰(Shade)

影(Shadow)

映り込み(Reflection)

光を感じさせるには影を付ければよい

平滑な表面→「映り込み」　乱反射→「陰」

(4)質感——→質感は映り込みによって決まる

反射(全反射)

拡散(乱反射)

透過(一部反射)

(5)色感——→明度の幅

白い

黒っぽい

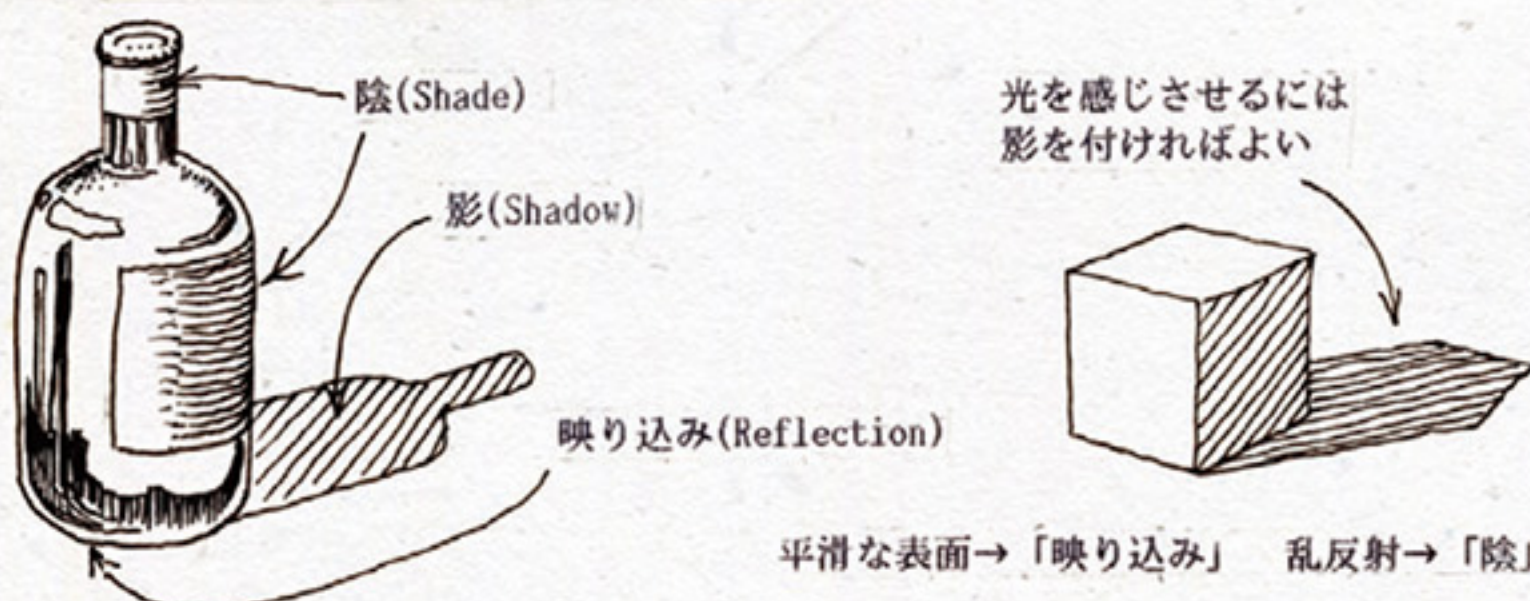
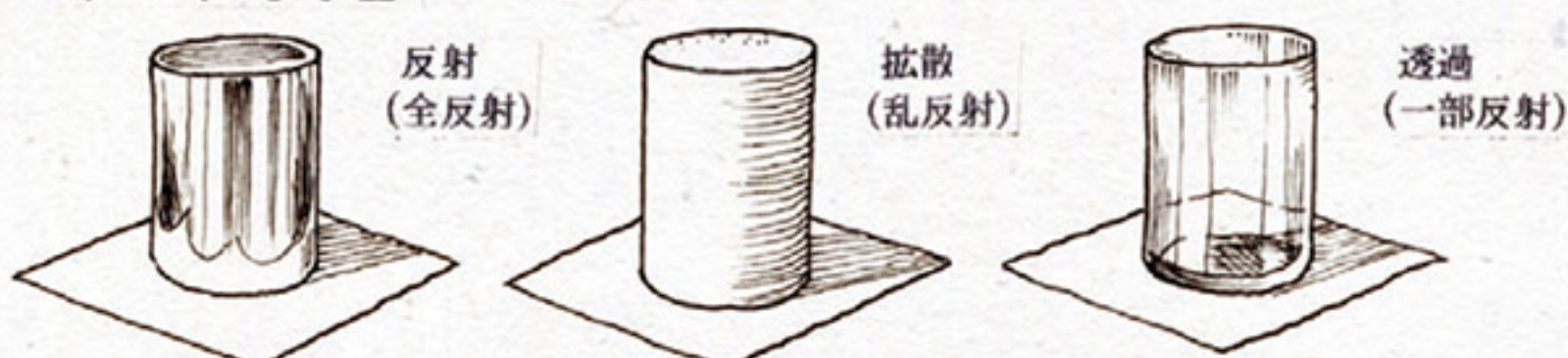
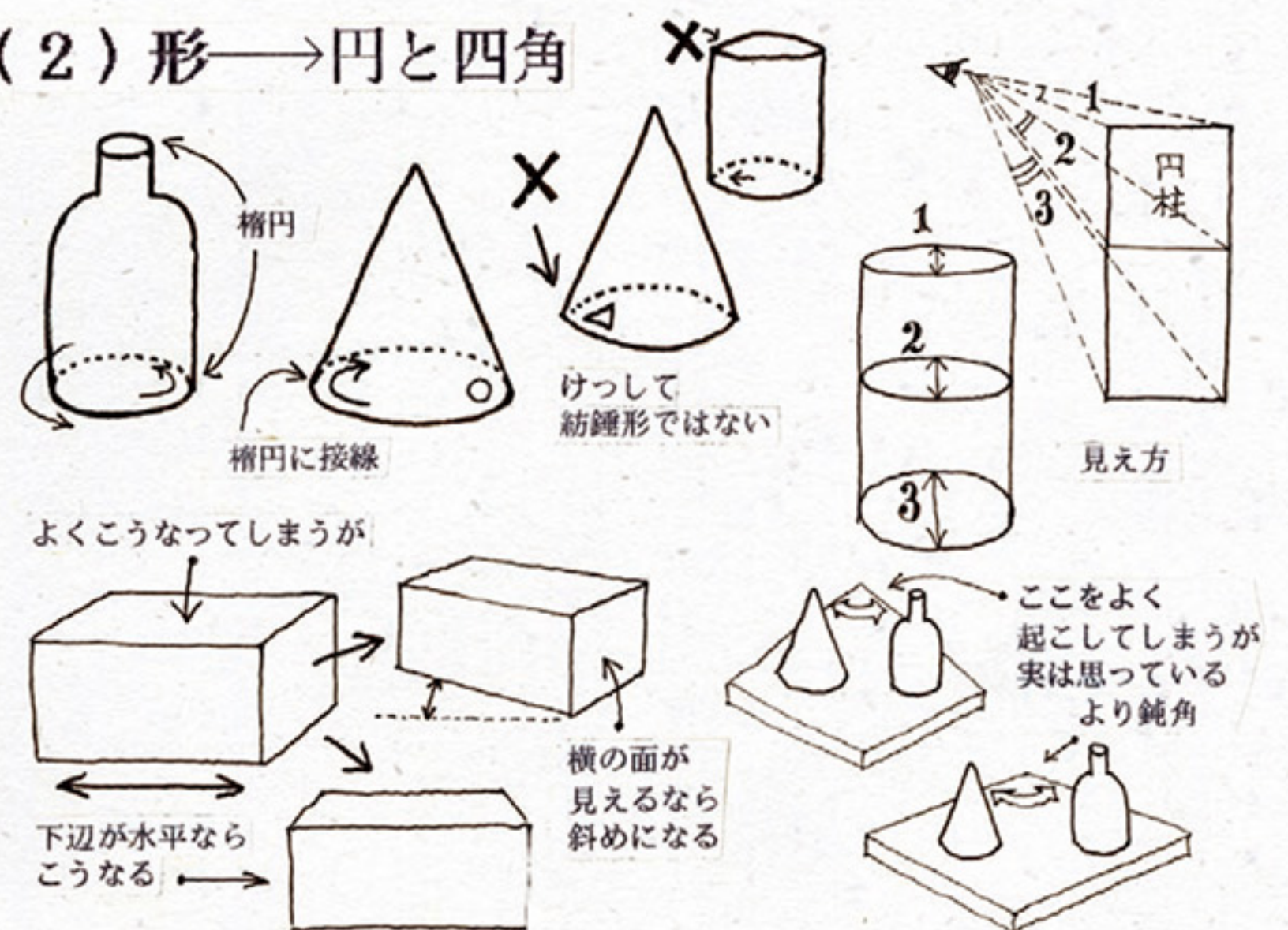
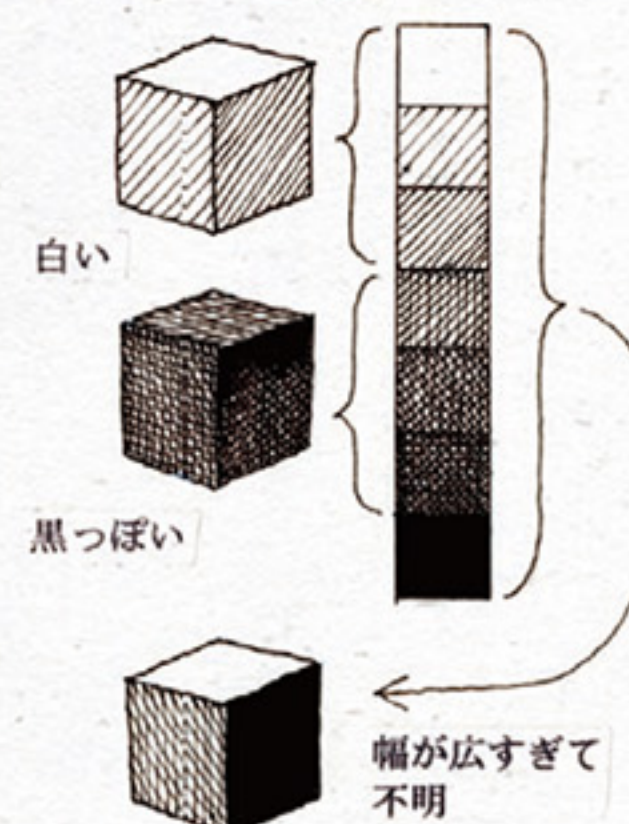
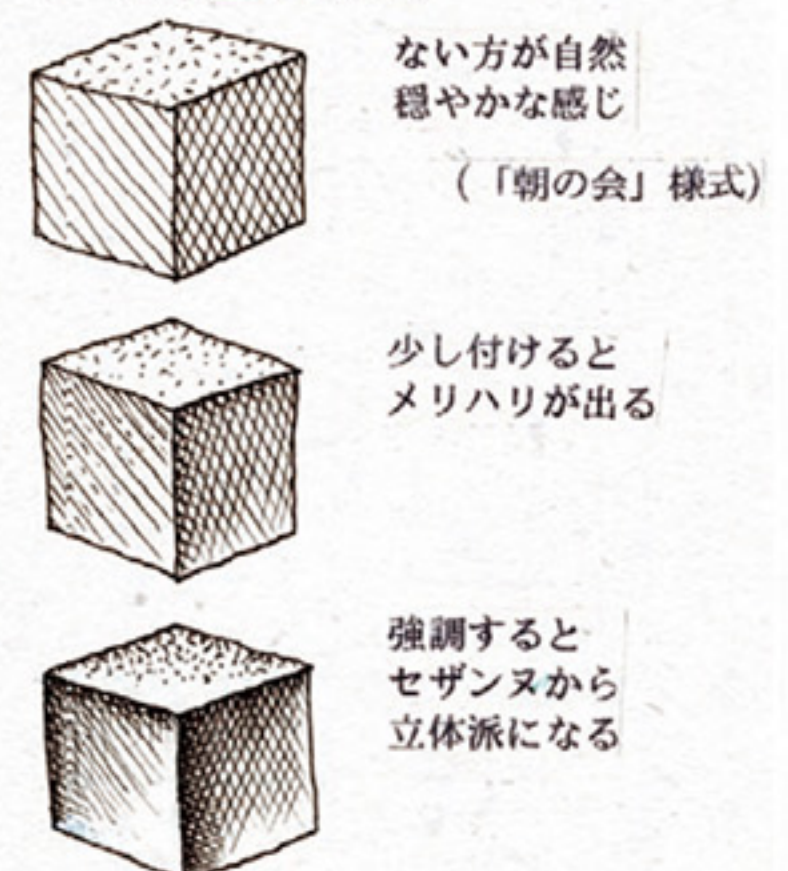
幅が広すぎて不明

(6)縁辺対比

ない方が自然穏やかな感じ

(「朝の会」様式)

少し付けるとメリハリが出る

強調するとセザンヌから立体派になる

まっすぐな道路や鉄道線路のように平行線で遠ざかる物は一点に集まっているように見えます。この点を消失点といい、水平な線の消失点は、自分の視点の高さにあります。この消失点を作ることにより、自分の目から見た空間ができます。この世界を見ているのは、誰でもなく自分自身だという自覚がなければ、このものの見方は生まれません。

遠近法を学ぶ授業で自身の絵と実際の漫画の一コマに井上さんがパースのガイド線を描き加えた資料。

（大阪府春日丘高校での資料）

一点透視

Q.消失点と視点の高さを求めよ

倒れた人物の視点

◀大友克洋〈童夢〉より

◀視点の変化
Q 画面の中に、視点と同じ目の高さを持つ人物像を描こう

立った視点

座った視点

Q 消失点を求めよ。視点の高さはどれくらいか

女生徒の頭より高い、踊り場の視点

実はここに段がある

一点透視

Q 消失点と視点の高さを求めよ（位置は？）
◀ウジェーヌ・アジェ〈Paris 7e Rue de Verneuil〉

車道へ少し入った、三脚の上の視点（頭より上）

二点透視

Q.消失点と視点の高さを求めよ

◀鴨沢祐仁〈クシー君の発明〉より

バスより高く
市電より低い
未知の
高位置
から

Q 消失点と視点の高さを求めよ

魚眼レンズ的な視界

（成安造形大学での資料）

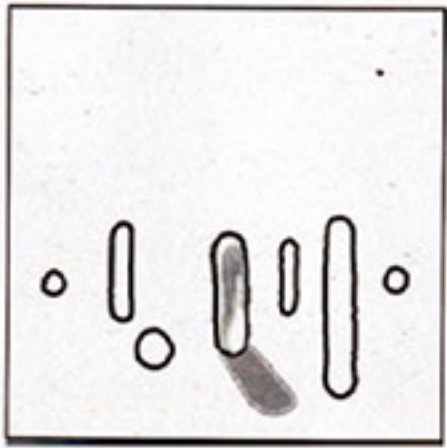
課題のサンプル。100 コのキャラクターを生み出すヒントは、10 コキャラクターを考え、例え似ていたとしても、どんどん描いていくこと。100 コのキャラクターが描けたら、そこから 4 コキャラクターを選び、それに喜怒哀楽をつけます。

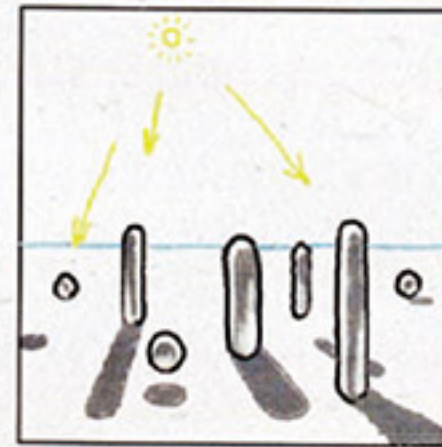
『ところにより曇り』
左がスフマート（ぼかし）／油彩に移行して可能になった、レオナルド・ダ・ヴィンチ以後の技法です。右がハッチング（平行線）／上記以前、ボッティチェルリなど、ぼかしの難しいテンペラ作品の技法です。

（成安造形大学での資料）

影をつけることにより、光を表現できます。光源のおかげで全て物の位置関係が明確になります。

陰影法

光源を基準にし陰影をつけることは、単に立体感を出すだけではなく、空間の中で、もの相互の位置関係を示すたいへん有効な方法です。しかし直射光によるはっきりした影を描くには、光線の追跡という考え方を必要とします。そのため、これが明確に描かれるようになったのは、科学的な思考が普及する近代に入ってからです。

陰影のない輪郭だけでは、ものの位置関係は分からない。

どれか一つにでも影をつけてみる。(仮定)

すると必然的に光源の方向と位置が決まり、(検証)

それ以外の全てのものに、この光源からの光による影がつく。この影によって、光源と物それぞれの位置関係がはっきりして、空間が出来る。(演繹)

直射光による影を作るには、このように"仮定を検証し演繹する"考え方が必要です。明晰な空間を作るためには、視点(自己認識の確立＝ルネサンスの遠近法)と、例外を作らない物の見方(19世紀以降の科学的な思考法)が必要だったのです。

(成安造形大学での資料)

	分野	細目	タイトル	概要	回数	用具	内容
010101	描写基礎	石膏像	形を明暗で見る	基本形態(球・直方体)を鉛筆で描く	1		
010102	描写基礎	石膏像	形の捉え方	基本形態(角錘相貫体)を鉛筆で描く	1		
010103	描写基礎	石膏像	線を明暗に還元	面取半面像を木炭または鉛筆で描く	2		
010104	描写基礎	石膏像	直線と面で見る	半面像を木炭または鉛筆で描く	3		
010105	描写基礎	石膏像	明暗の階調	面取頭像を木炭または鉛筆で描く	3		
010106	描写基礎	石膏像	明暗の立体表現	頭像を木炭または鉛筆で描く	3		
010107	描写基礎	石膏像	量感表現	胸像を木炭または鉛筆で描く	3		
010108	描写基礎	石膏像	単色描写	像を絵具単色(黒またはバーントアンバー)で描く	3		
010109	描写基礎	石膏像	補色描写　青＋茶による　4				
010110	描写基礎	石膏像	石膏像　絵具・全色相(茶・黒、無し)による	3			
010111	描写基礎	石膏像	石膏像　複合技法による造形表現　木炭、鉛筆、パステル、絵具	4			
	形体基礎		人物デッサン	2			
	形体基礎		人物クロッキー				
	描写応用	室内	【補色描写】　青＋茶による室内	4			
	描写応用	静物	3原色＋白	緑、茶、青、橙、等の色のモチーフを絵具で描く。	4		
	描写応用	静物	基本色	木片・陶の立体・植物を茶と黒を除く基本色で描く	4		
	描写応用	静物	色感デッサン	紙包(白)、石(灰)、その他(茶・黒)を木炭または鉛筆で描く	4		
	描写応用	静物	質感デッサン	ガラス、金属、布、陶を木炭または鉛筆で描く	4		
	描写応用	静物	【静物質感描写】 ツヤのあるもの＝金属・リボン・紙	4			
	描写応用	静物	【静物透明感描写】透明なもの＝ガラス・水の入った器・結晶	4			
	描写応用	静物	反射と屈折の描写　鏡、ポリ袋に水、多面体模型、鉱石など	4			
	描写応用	静物	色彩を限定したモチーフによる静物(赤、青、白、金、補色)	6			
	描写応用	静物	拡大細密描写　鉱石・結晶・ガラス	4			
	描写応用	静物	絵巻または折本によるパノラマ描写	4			
	描写応用		屋外風景写生	2			
	色彩基礎		【明度段階】　無彩色明度13段階＋四季表現	3			
	色彩基礎		【24色環と3原色混合】アクリル・油彩／用具の設定	4			
	色彩基礎		【寒暖対比】				
	色彩基礎		【混色実験】 100 Mixed colors　3cm・10×10	3			
	色彩基礎		【色価】				
	色彩技法		【重色実験】 100 Glazed colors 3cm・10×10	2			
	色彩応用		【四季表現】 4点を一組とする　4				
	色彩応用		【感情表現】 4点を一組とする				
	色彩応用		【味覚表現】 4点を一組とする				
	色彩基礎		【明度調整】 点描(併置混合)のための練習	4			
	色彩基礎		【Tint & Shade】 8色＋Gray, 9段階	6			
	色彩基礎		【100 Mixed colors】				
	色彩基礎		【補色誘導】 V-YG U.B-C.Y O.B-Org.R O.G-F.R B.G-C.R	3			
	色彩基礎		【カラー・マップ】	3			
	色彩基礎		【オストワルド色立体縦断面】	4			
	色彩基礎		【マンセル色立体横断面】	4			
	色彩基礎		【セピアゾーン】	2			
	遠近法基礎		【等角投影演習】 立方体の配置／明暗・円	1			
	遠近法基礎		【等角投影立体】 間接光源の陰影(type-1)・色彩遠近法	4			
	遠近法基礎		【1点透視演習】 立方体の構成／消失点・地平線・明暗	1			
	遠近法基礎		【1点透視風景】				
	遠近法基礎		【1点透視室内】 分割法・円・陰影(type-1)	4			
	遠近法基礎		【2点透視演習】 立方体の構成／消失点・地平線・明暗	1			
	遠近法基礎		【2点透視風景】 陰影(type2)・空気遠近法	4			
	遠近法基礎		【2点透視陰影法】立体に直射光源からの影(type-2)を付ける	4			
	遠近法基礎		【3点透視演習】 構想風景画　陰影(type-2)	4			
	遠近法基礎		【3点透視風景】 構想風景画　陰影(type-2)				
	遠近法応用		【水のある風景】				
	遠近法応用		【夜景】　透視図法による構想画　陰影(Type-2)を付ける	4			
	遠近法応用		【映り込みのある室内】				
	遠近法応用		【パノラマ】(180～360°)に陰影(Type-2)を付けた構想風景画	6			
	遠近法応用		【マルチパネル】 構想による風景を画面の外へ展開・拡大する	8			
	遠近法応用		【3D表現1点透視】				
	遠近法応用		【3D表現2点透視】				
	遠近法応用		黒の輪郭線による静物	2			
	描写応用		ペインティング・ナイフによる描写	3			
	描写応用		Glazing(透明色を重ねる)による静物	3			
	描写応用		縁辺対比の強調と消去　立方体モデルを2点対比して描写	2			
	描写応用		点描による静物　石膏基本形態とオブジェ、鉢植など	4			
	描写応用		印象派の技法による静物	3			
	描写応用		ペンタッチ演習　20の立体	2			
	描写応用		ペンによる構想画または写生画	4			
	技法基礎		地塗りの技法×2＋地模様の作成×3(水平 60°ランダム)	3			
	彩色法		マスキングテープ＋フィンガーペインティングによる構想画	3			
	彩色法		ペンと白絵具のハッチングによる石膏像描写	4			
	彩色法		絵具の色彩ハッチングによる静物	4			
	彩色法		明度を1段階に限定した静物				
	彩色法		明度を2段階に限定した静物				
	彩色法		明度を3段階に限定した静物	3			
	彩色法		複合技法(アクリル＋油彩)	4			
	彩色法		Mixed Media Painting(コラージュ、フォトモンタージュ、フロッタージュ、マチエール)	3			
	彩色法		花の絵　地塗りの不規則文様から明暗のある立体画を作る	3			
	彩色法		立体派の描写　セザンヌに由来する縁辺対比と面の強調	3			
	彩色法		混色の分離効果　有機色と無機色の比重差による	2			

(自宅アトリエの絵画教室で行っていた課題メニュー)

成安造形大

イラストレーション演習 1

試作1　明度の統一により、彩度の輝きを得る。

①下の段は、9つのコマごとに、3段階の明度に分ける。 (1～3)

9つのコマの中央コマに、グレーを置き、そのグレーに明度を合わせて、まわりに8色を置く。

※明度が合っているかどうかは、目を細めて、目に入る光量を少なくすると、分かりやすい。

暗い中では色の区別はつきにくく、明暗だけの識別になる。

これは色を見る視細胞(錐体)は明るくないと働きが弱いのに対し、明暗を見る視細胞(桿体)は、光量が少なくても働くことによる。

② 明度が合っていないと、色の境界で明度対比が起こる。

すなわち、暗い方の縁がより暗く、明るい方の縁がより明るく見え、境界が際立ってしまう。

これを縁辺対比と言う。

③9コマで明度が揃うと、明度による縁辺対比がなくなり、彩度の対比が見えてくる。

明度が合うと、色が違っていても、境界が解け合って見え、色の鮮やかさが引き立ってくる。

そのすべて同じ明度の中で一番彩度の高い色が、蛍光色のように輝いて見える。

この効果は、明度が合わないと出てこない。

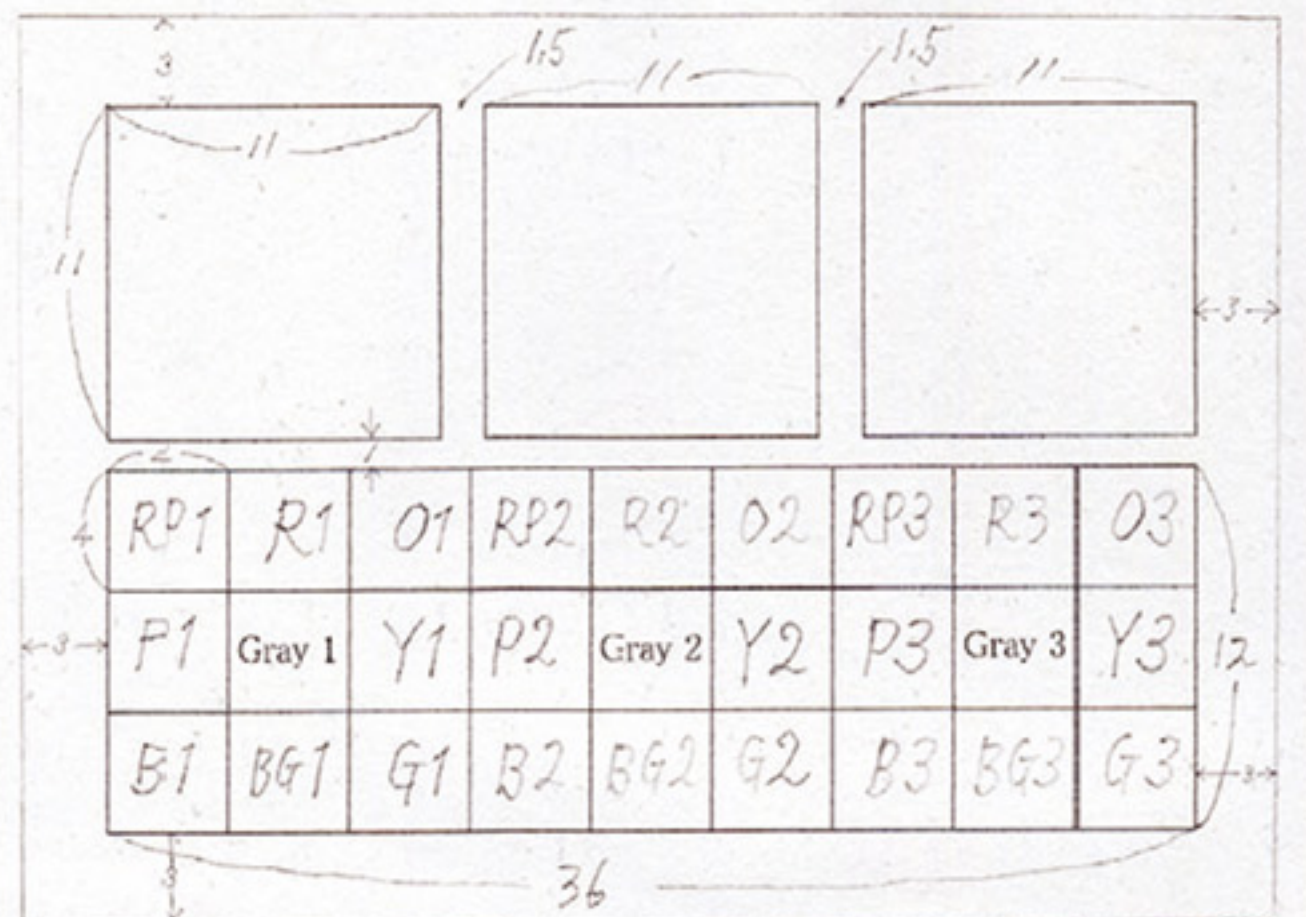
④となりの9コマ、つまり明度の違う区画との間だけに、縁辺対比が出るようになれば正解。

明度がそろっていないと、明暗の差ばかりが目について、彩度の美しさが出てこない。

⑤下の段でコツがつかめたら上の段に、その明度の色だけを使って絵を描いてみる。

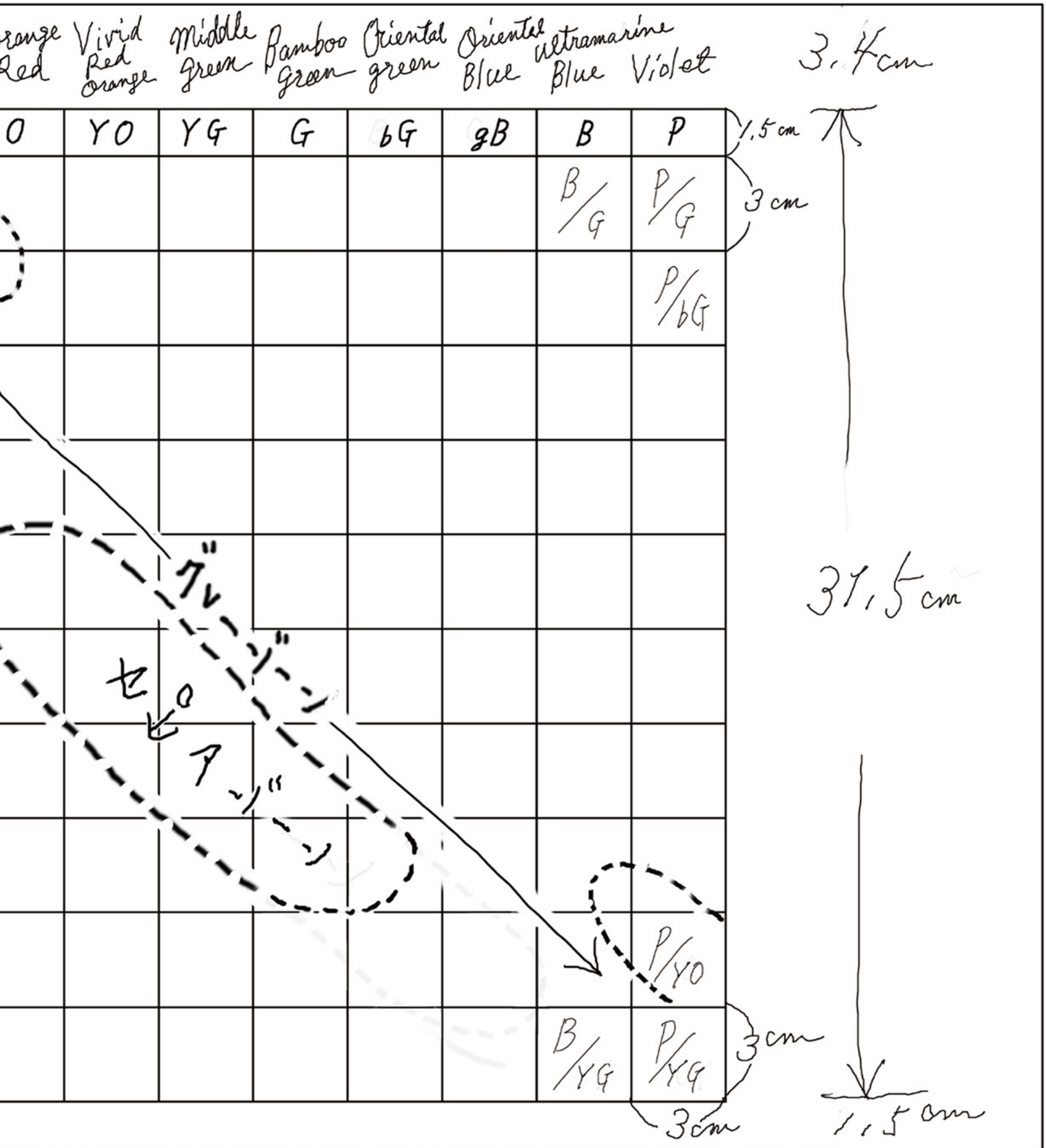
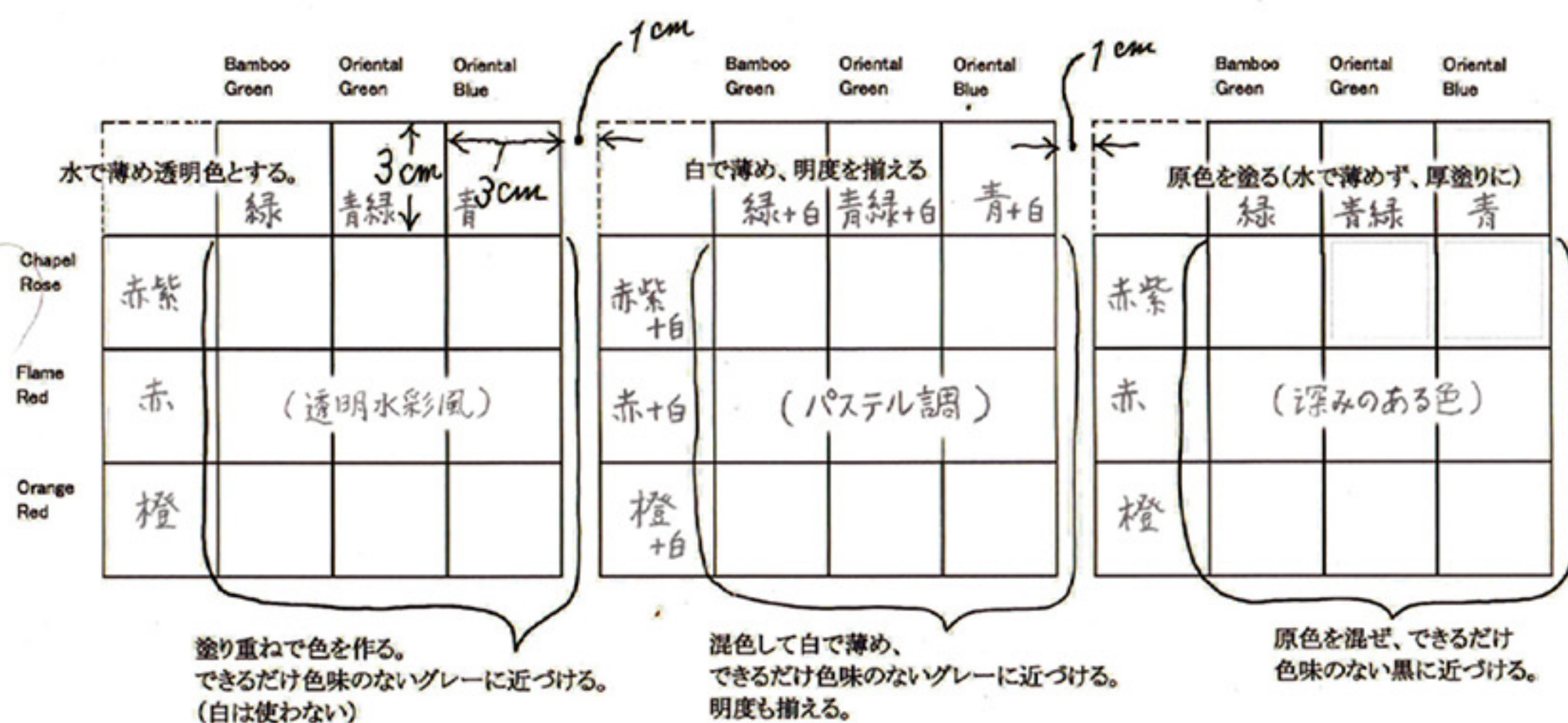
3段階の、明度を統一した絵になる。

(単位 cm)

RP1	R1	O1	RP2	R2	O2	RP3	R3	O3
P1	Gray 1	Y1	P2	Gray 2	Y2	P3	Gray 3	Y3
B1	BG1	G1	B2	BG2	G2	B3	BG3	G3

(成安造形大学での資料)

「イラストレーション演習」の授業で、配色を学ぶために、カラーチャート作成の課題が生徒に与えられました。

Color

「色というのは、ピアノの鍵盤のようにどれも欠かせない」と井上直久さんはおっしゃいます。ここでは、色に関する大学生時代の課題や今までの試行実験の一部をご紹介いたします。井上さんの幅広く豊かな彩りを出すヒントが垣間見えるかもしれません。

range Red　Vivid Red Orange　Middle Green　Bamboo Green　Oriental green　Oriental Blue　ultramarine Blue　Violet

O	YO	YG	G	bG	gB	B	P
						B/G	P/G
							P/bG
							P/YO
						B/YG	P/YG

3.4cm　1.5cm　3cm　31.5cm　3cm　3cm　1.5cm

グレーゾーン
セピアゾーン

■補色3対の混色例と明度調整

	Bamboo Green	Oriental Green	Oriental Blue
水で薄め透明色とする。	緑	青緑	青
Chapel Rose 赤紫			
Flame Red 赤		（透明水彩風）	
Orange Red 橙			

塗り重ねで色を作る。
できるだけ色味のないグレーに近づける。
（白は使わない）

	Bamboo Green	Oriental Green	Oriental Blue
白で薄め、明度を揃える	緑＋白	青緑＋白	青＋白
赤紫＋白			
赤＋白		（パステル調）	
橙＋白			

混色して白で薄め、
できるだけ色味のないグレーに近づける。
明度も揃える。

	Bamboo Green	Oriental Green	Oriental Blue
原色を塗る（水で薄めず、厚塗りに）	緑	青緑	青
赤紫			
赤		（深みのある色）	
橙			

原色を混ぜ、できるだけ
色味のない黒に近づける。

手描きのレタリング

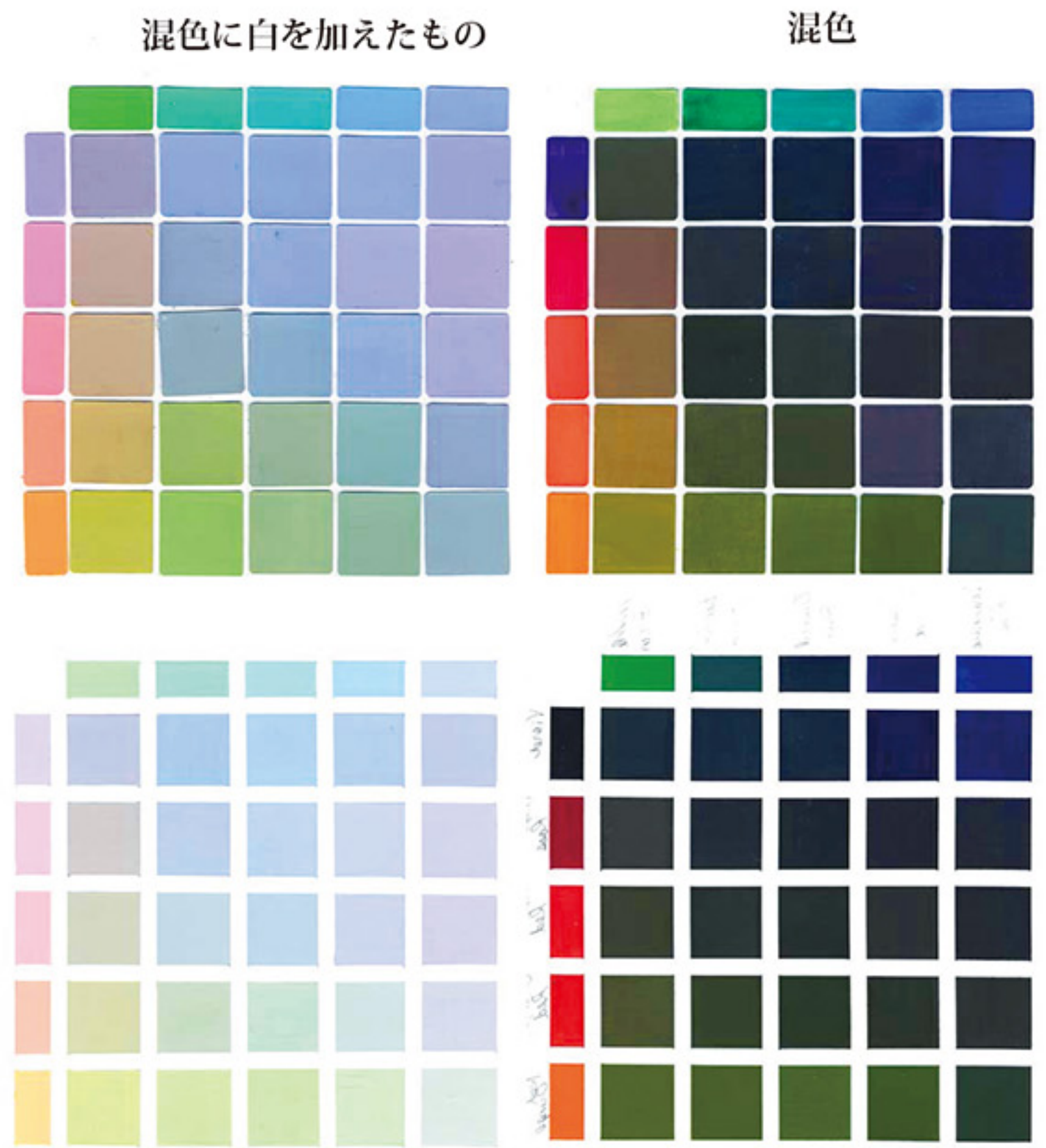
SEPIA ZONE

金沢美術工芸大学在学２年生の時の課題

		Chapel Rose	Flame Red
		RP	R
Bamboo green	G	RP/G	R/G
Oriental green	bG	RP/bG	
Oriental Blue	2B		
Ultramarine Blue	B		
Violet	P		
Chapel Rose	RP		
Flame Red	R		
Orange Red	O		
Vivid Red Orange	YO	RP/YO	
Middle green	YG	RP/YG	R/YG

1.5cm

重色実験　　　　　　　　　　　　　　　　**混色実験**

斜めのラインは、補色なので混色してニュートラルな灰色に近い色が出る。２つの透明の色を塗り重ねて、重色を見る。

左は白を混ぜて明度を整えたもの、右は原色。色の微妙な変化が面白く、いつも発見がある。

退色しやすい色を知るための退色実験

だいたい４月〜９月のひと夏の間、直射日光にさらした結果

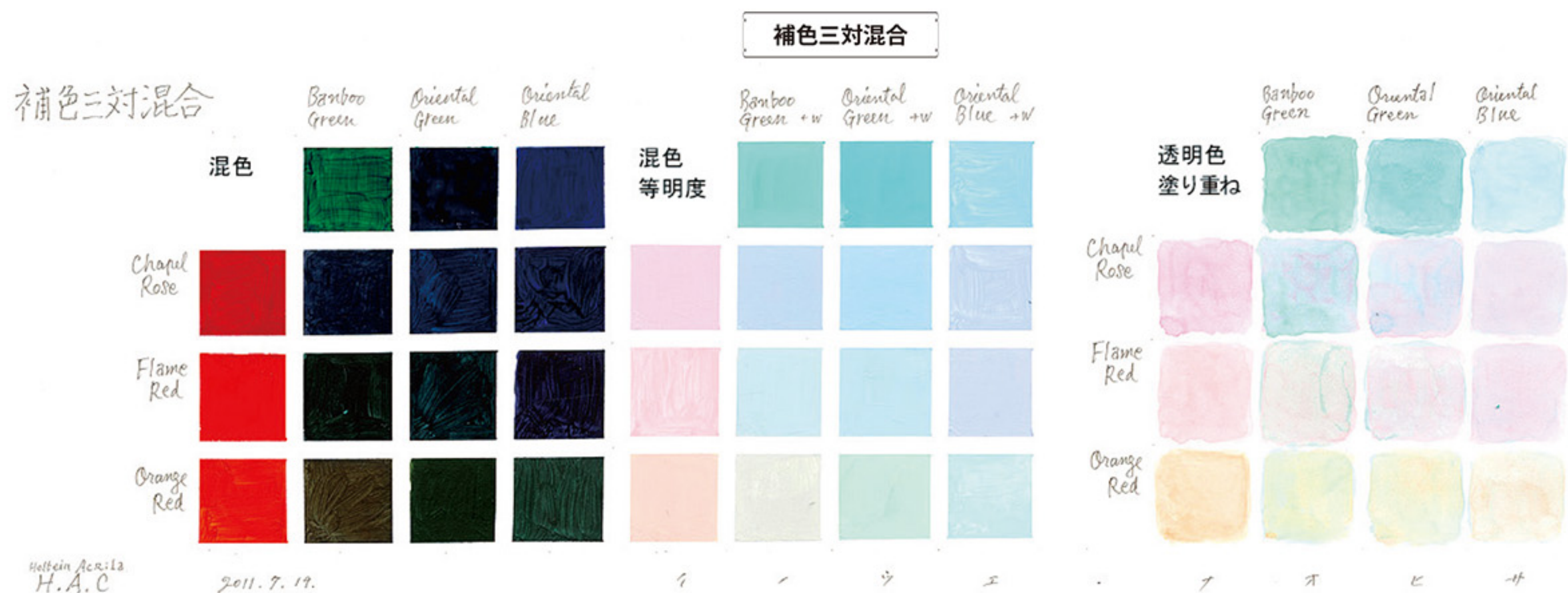
色の半分を覆い、太陽光に当てる

元の色

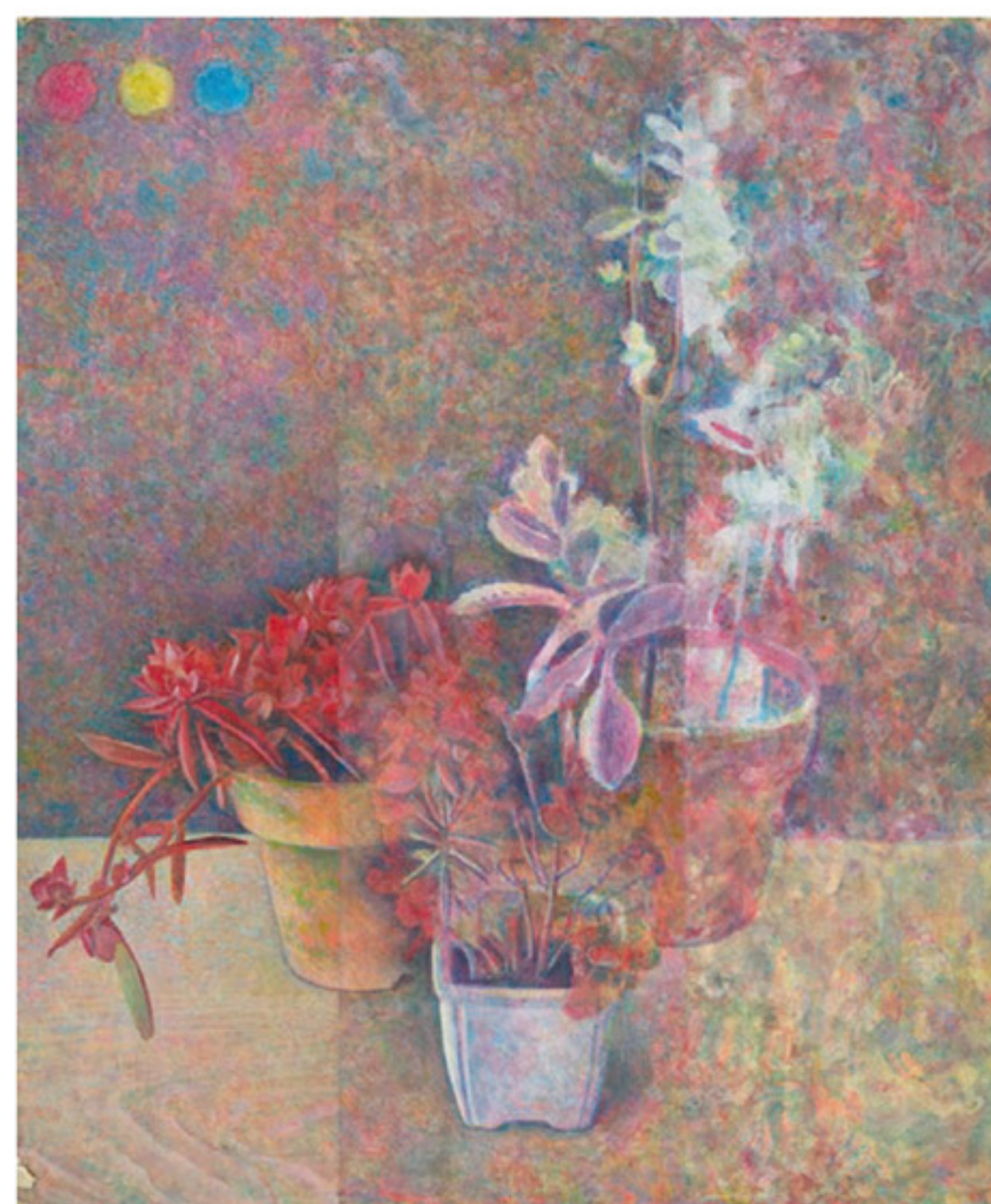
1. 色研色紙
2. 色鉛筆
3. 油性パステル
4. 水彩
5. ポスターカラー
6. カラーインク
7. アクリリックA
8. アクリリックB

お手製色彩チャート帳

色の効果や混色での補色などの予想をつけるために、正方形の枠の中で 1/3 ずつ、グロス、メディウム、クリスタルバーニッシュとツヤ出しを変えた色彩がまとめられています。
1. 赤（グランバッカーレッド）の補色を見つけるテスト
2. 重色で紫を出し、ツヤの有無や程度により見え方がどう変わるかの実験
3. 青、紫、茶などを下地とした影の色を黒に近づける「グレージング技法」の探求（補色で黒くする）

補色三対混合

こういうカラーチャートを３種類作り、それぞれの効果を実践した試作の絵も３点描く。これは明度段階で、次が透明色の重ね、続いて補色による混色。冴えた色、深い色、微妙な色が出せるようになるためのトレーニングです。

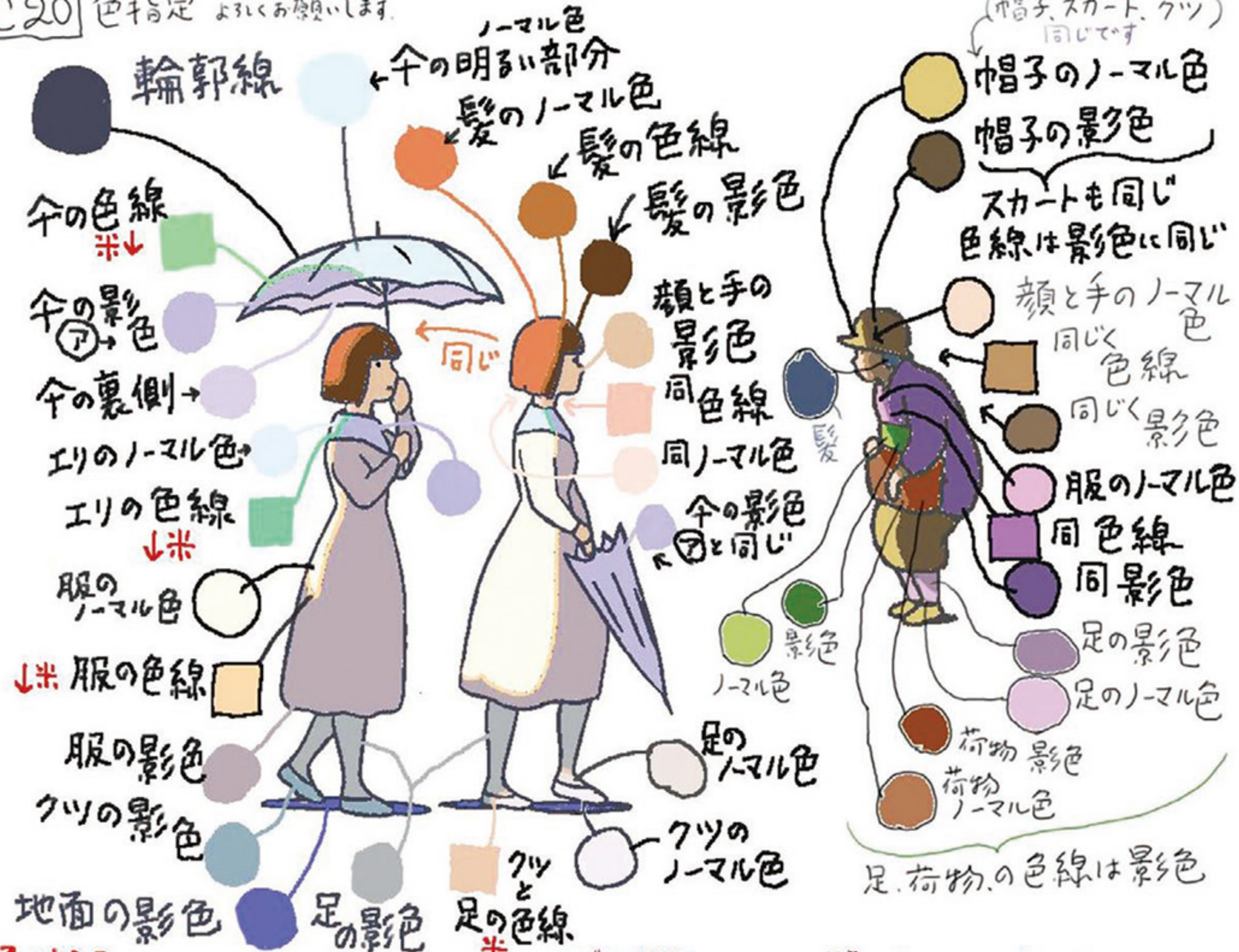
点描の技法
明度を合わせ、いろんな色を入れます。点々で描くことで〝ぼかし〟や〝塗りつぶし〟から解放され、絵の修正を限りなく続けることができます。明度を揃えていろんな色を置くのがポイントです。

真ん中の灰色に、まわりの色の明度を合わせる。明度が揃うと、彩度の違いが際立ち、高彩度の色が鮮やかに見えます。

透明画法の３原色で描いた作品
３原色を混ぜないで塗り重ねる。
右：1/3 描き途中
中央：途中
左：完成

淡彩のイメージスケッチ

絵具の発色やトーンの変化を見るために、試しに一発描きしたもの

C20 色指定 よろしくお願いします。

輪郭線
ノーマル色 傘の明るい部分
髪のノーマル色
髪の色線
髪の影色
傘の色線 ※
傘の影色 ア
傘の裏側
顔と手の影色
同色線
同ノーマル色
傘の影色 アと同じ
エリのノーマル色
エリの色線 ※
服のノーマル色
※ 服の色線
服の影色
クツの影色
地面の影色
足の影色
クツと足の色線 ※
足のノーマル色
クツのノーマル色
同じ
（帽子、スカート、クツ 同じです）
帽子のノーマル色
帽子の影色
スカートも同じ
色線は影色に同じ
顔と手のノーマル色
同じく色線
同じく影色
髪
服のノーマル色
同色線
同影色
影色
ノーマル色
足の影色
足のノーマル色
荷物影色
荷物ノーマル色
足、荷物、の色線は影色

↗こちらの
※ 色線は、かなりハズした色ですが、絵の色ズレのような虹のような効果を狙ったものです。実際は小さくてわからないかもしれませんね…
m(_ _)m よろしくお願いします。 井上な

映像画集『イバラード時間』におけるキャラクターの色指定

高校教師時代の教え子

画家・宝永たかこ

高校の教師を19年務めた井上直久さん。当時の教え子には一体どの様に映っていたのでしょうか。貴重な教師時代の井上さんのお話を、宝永たかこさんにお伺いしました。

――井上直久さんが高校の教師をされていた時の印象をお聞かせいただけますか。

井上先生の印象は、高校生の時から全然変わらないです。先生は、作家としても素晴らしいけれど、教育者としてもすごい方でした。

高校に入る前に近所のおばさんから「今年からすごく優秀な美術の先生がいるんだ」というお話をお聞きしていたので、すごく楽しみにしていたんです。

最初の記憶は、入学後廊下を歩いていて、ばったり先生にお会いした時です。

長髪でヒゲを生やし、白衣を着ていらしたので、理科の先生みたいだなと思ったのが井上先生でした（笑）。

美術部顧問だけではなく、クラス担任をしてくださった時もあります。授業以外でもいろいろとお話をしてくださるし、課題もすごく面白そうだと思わせてくれる前振りをしてくださり、本当に噂通りの良い先生でした。

――高校を卒業された後は、井上さんに師事されたとお聞きしました。経緯などお聞かせいただけますか。

高校を卒業した後は、最初は美大受験をする予定だったのですが、大学でよく知らない先生に教わるよりも、この先生についていった方が絶対に良いと思ったんです。

それで、先生の都合とか全然考えずに、卒業後先生のところに行くことを決意しました。

両親には「大学に行かない代わりに4年間自由にさせてくれ」って打診したら、案外すんなり承諾してくれました。

そして、井上先生のところに母が挨拶に行ったんです。「来てくれるなら面倒見ますよ」って、快諾してくださいました。当時驚いたんですが、先生は大学時代のノートとか資料や課題を全て残してあったんですよ。

そしてその頃の課題が役立ったからって、「僕ももう1回やってみるよ」と面白がりながら一緒にひたすらカラーチャートを作ったりしました。

その当時、井上先生は20代後半だったのですが、今あらためて考えると、あの時にすでに人としてできあがっていらしたのがすごいなと思います。

世の中には常識なるものが存在すると思うのですが、それを違う視点で、例えば恐竜の目で見たらとか、微生物の目で見たら、この世界はどういう風に見えるのかっていうお話をしてくださったり、価値観なども1つではないんだと教えられました。1回は自分できちんと考えなくてはいけないのだなと気づきましたし、ものの考え方とか、生きていく上でも本当に勉強になりました。

井上先生がよくおっしゃっていたことで「欠点だと思っていることを克服することに労力を使うな」というお話があるんですけれども、欠点克服って苦手な事なので辛いんですよね。

マイナスのものを10努力してもやっと0になるだけだから、プラスのところを10努力した方が楽しいし、伸びるよって教えてくださいました。

私の時代は『巨人の星』のような「血を吐くぐらい努力しろ」という考えの方が多く、それを刷り込まれてきたような世代だったので、こういった価値観を持った方に出会えて良かったなとすごく感じました。同じように私も学生に言うんですけど、みんな目を輝かせるんですよね。

私は、井上先生は〝井上直久〟が仮の姿で教師をしているだけだと思っていたので、この方は世界に羽ばたいていく人なんだろうなと感じていました。

なので今、画家として活躍されていて本当に嬉しいです。

宝永たかこさん
大阪府出身。大阪府立春日丘高等学校を卒業後、井上直久さんに師事。現在、成安造形大学で教壇に立つ傍ら、イラストレーター、画家として活動中。

宝永たかこさんサイト情報：
A MOON IN THE POCKET
URL：http://hoei-takako.com/

《野原の花火屋》 1979
高校卒業後、額装手伝いの際に、宝永さんが一目惚れして購入された作品。
ラピュタ、塔、飛行船など全ての要素が入っていて「これだ」と直感したんだそう。

大学講師時代の教え子

画家・宮脇周作

井上直久さんの大学講師時代の教え子である宮脇周作さん。大学では、どのようなことを学び、何を得ることができたのでしょうか。井上さんの授業を回想していただきました。

――井上直久さんの最初の印象は覚えていらっしゃいますか。

“生粋の画家”でした。筆を自由自在に操って、絵を描く様なんてまさに、昔から僕がイメージしていた画家そのまんまだなと思いました。髭を生やしていて、少し風変わりなところも（笑）。

――講義はどのようなものでしたか。そして、印象深い出来事などございましたか。

僕は、「絵具だけ触っていたい」という生徒だったので、実際に絵具を使いながらの実習が多かった井上先生の授業はとても好きでした。特に思い出深いのは「イラストレーション実習」で、有名絵画を自分なりに工夫して加筆するというもの。僕は日本の浮世絵がヨーロッパの印象派に影響を与えた歴史上の事実を逆にして、写楽の浮世絵をゴッホ風に描いたんです。それが、課題で描いただけの作品なのにもかかわらず、なんとギャラリーでほしいという方が現れたんです。僕は絵の値段のつけ方さえも分からなかったのですが、井上先生が間に入ってくれて、交渉してくれました。僕はビンボー学生で、当時家賃を2ヶ月分滞納していたので、とても有り難かったです（笑）。その時はじめて「絵を描いてお金をもらえるんだ」って実感しました。そういう経験をさせてくださった井上先生には、すごく感謝しています。

《炎の役者絵》

ピエゾグラフで印刷し、クイックドライングゾディウムとクリスタルバーニッシュでコーティング。その後、油彩とアクリル絵具で加筆した作品。2003年「エプソン京都ピエゾグラフギャラリー」でのグループ展で展示されました。

井上先生は、頭の中に引き出しがいくつもあるんでしょう。よく授業に関係のないようなこともいろいろ話をしてくれました。その中で一番印象深かったのが、ルノアールの話です。１５０年ぐらい前の絵具は質が悪いので、描き上げた時黄変するんです。ルノアールはそれが嫌で50年後に色が落ち着くように、あえて明るめに、下地なども工夫して、変色した頃に絵が完成するように描いたっていうお話をされて、「彼は若い時に、50年後も自分の絵が大事にされるってわかっていたんだ。それぐらい画家は先を見据えて、何十年後も自分の作品が愛されているっていう確信をもって描かなきゃいけない」って。画家は来年どうなるのかとか、お金が入るかどうかだけ考えてはダメだよと教えられました。今でも覚えていて、くじけそうになった時いつも励まされるんです。

そして何より、井上先生は、絵を描いてると良い事ありそうだなと想像させてくれるような存在でした。なので、僕が画家になりたいと思ったのは、間違いなく井上先生がきっかけですね。自分が本当に絵が好きなんだって気づかせてくれましたし、背中を押してくれました。

――画家として活動されている宮脇さんのことを知ったら、きっと喜ばれるでしょうね。

実は、２０１６年の個展で約8年ぶりにお会いしました。覚えていてくださり、すごく嬉しかったですね。学生の時よりも元気そうに見えました。10年前よりどうしてエネルギッシュに感じたかというと、僕が個展を今年もやりたいので、この1年で20枚描けたら、という話をした際に、「僕なら20枚ぐらい1ヶ月で描けるよ」と言われて。やっぱり敵わないなぁって、あらためて圧倒されました（笑）。

宮脇周作さん

福岡県出身。京都成安学園成安造形大学造形学部デザイン科イラストレーション群イラストレーションクラス卒業。現在日本テレビ専属法廷画家、油絵画家として活動中。

《その日》2013

2013年、池袋東武百貨店の個展で一番大きく飾られていたという作品。

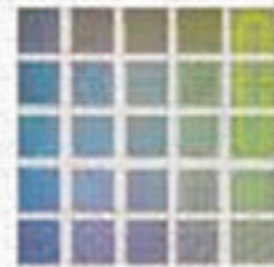
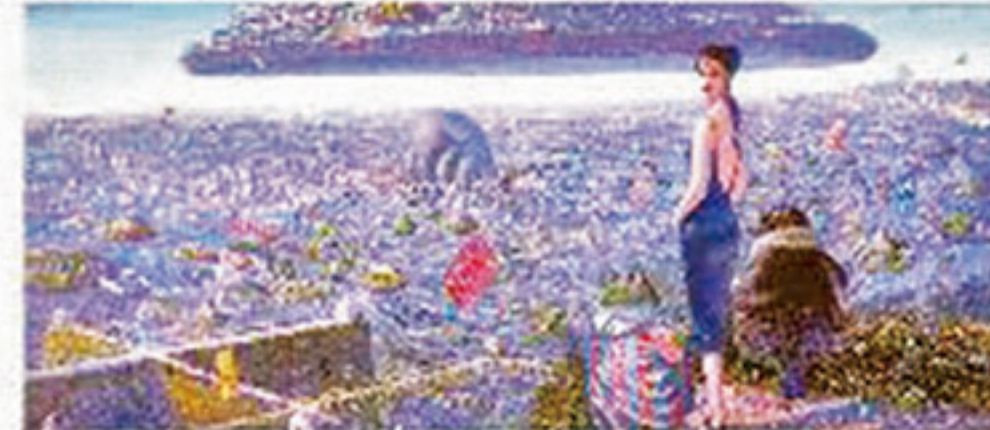
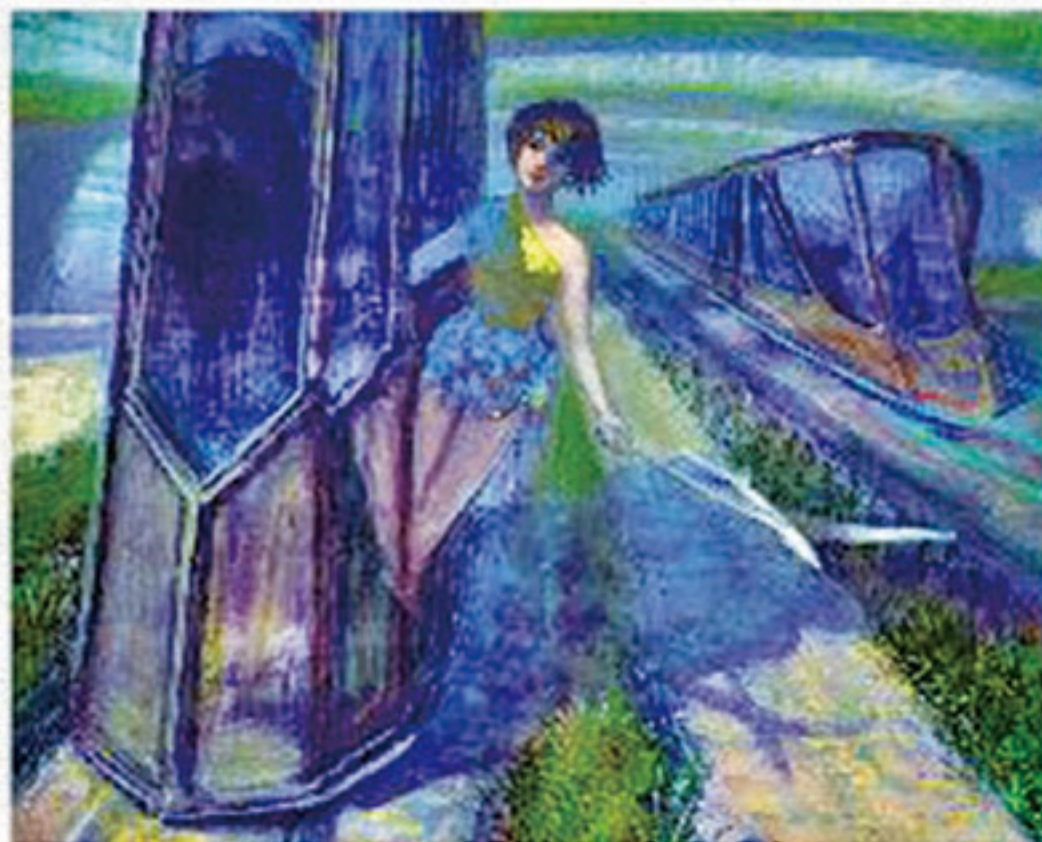
大学卒業後、画家となってから久しぶりに見た井上さんの絵は、格別だったと宮脇さんは語ります。

固有色を否定し、印象派の成果を応用する技法として、色彩の明度を揃え、彩度・色相を対比させると、蛍光色ではなくても輝くような色彩効果が生まれます。

イバラード色の試案

"イバラード色"(笑)のための試案

(1) 明度の揃った、もしくは明度差の少い色使いを試みる。

(2) 単一の色面の中に、色のバラつきを作る。

(3) 空間の距離による色の差を表現

(4) 影を青っぽくし（空の反射）、地上におちる影を表現、明暗の差を明確にし、澄んだ大気の中の明るい陽光を演出する。

イバラードのイメージのような色を作り出すために試案された「イバラード色」

色彩遠近法
遠くは、淡い青にして、近くは暖色にしてコントラストを強くする。

interview

創作を支えるキーパーソン

井上直久さんの作品創作を支えているのは個人だけに限りません。絵具やプリント技術を通じて連携してきた企業や、私たちに、その作品と触れ合う機会を与えてくれる画廊なども、井上さんの大切なパートナーと言えるでしょう。そんな企業や会社のキーパーソンにお話を伺いました。

福岡敏郎

信頼できる仕事のパートナーとして、井上直久さんと20年以上もの長い間、共に歩んできた福岡敏郎さん。出会われてから体験した絵の持つ不思議について語っていただきます。

――井上直久さんとはどういう機会で面識を得たのですか。

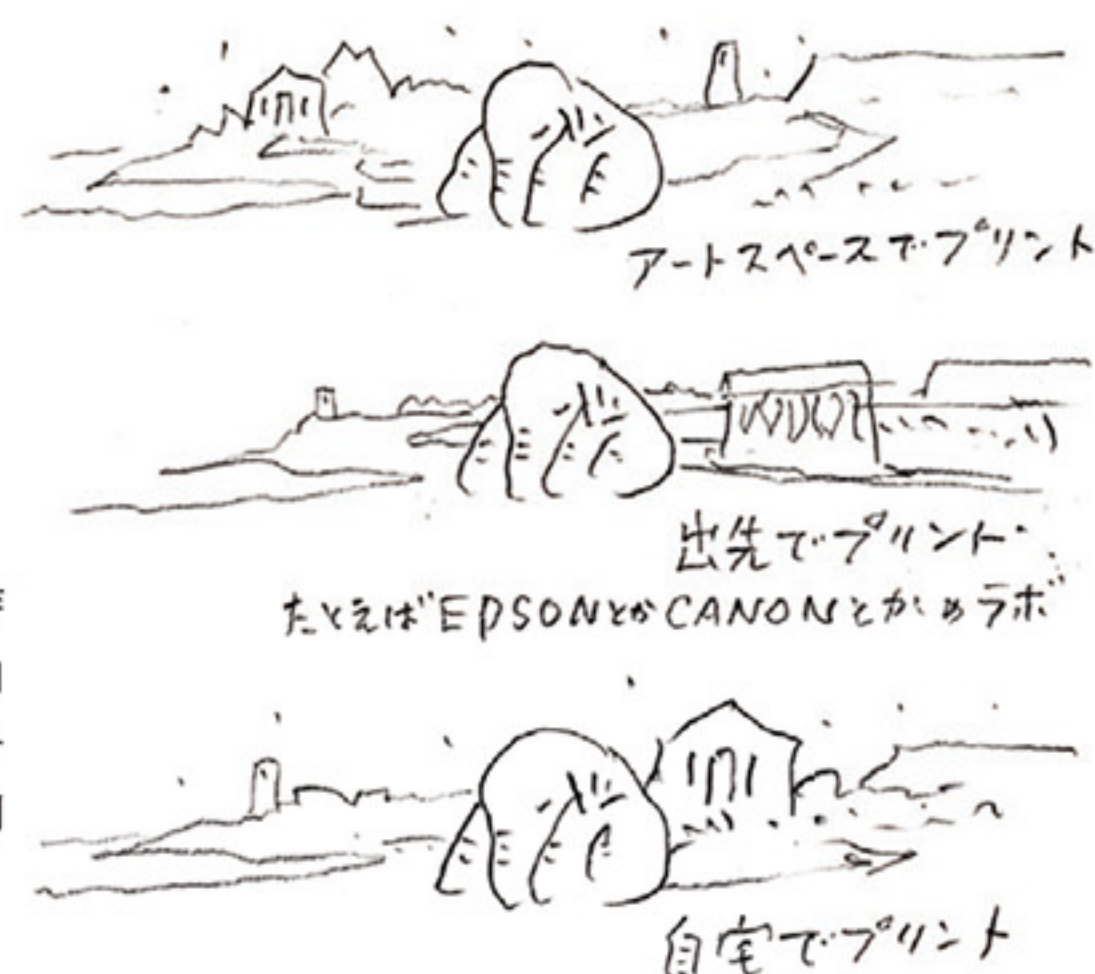
かねてより井上直久先生の元高校の教え子でいらっしゃる宝永たかこ先生の画商を、井上先生とお会いする2、3年前からしていました。宝永先生の個展を全国で行っていたのですが、大阪阪急での開催の時に、井上先生がわざわざ見に来てくださったんです。確か、先生がまだ高校の教師をされていた頃だったかと思います。その際に宝永先生の絵を買っていただきまして、とても義理堅い方だなと思ったのが最初の印象です。その際に、「僕も絵を描いているんですよ」と、井上先生がおっしゃられたのですが、まさかその後、こうして長く先生の絵を扱うようになるとは全く想像していませんでしたね（笑）。

――井上さんとの出会いは何だか運命的なものを感じますね。

そうですね。実を言うと、私は高校時代、美術に非常に興味があり、美大受験を目指していた頃もありました。卒業文集にもモネとかシャガールの作品を扱えるようになりたいと書いていたぐらいです。ですが、両親にそれでは生活していけないと言われ、急遽高校3年生の時に進路を変え、受験勉強を始めました。それまでは、真剣にデッサン教室に通っていたほどだったのですが。その後大学では、法学部に所属し、司法試験の勉強をしていました。しかし、裁判所関係か美術関係かどちらの仕事にするのか決断を迫られた時に、もともと絵が好きだったので、画廊に入ることにしました。残念ながら今は直接モネの作品は扱ってはいないのですが、運命的にも井上先生もモネがお好きで、先生の作品も似た雰囲気をお持ちなので何かしらの縁を感じてます。

――これまでで一番印象深く残っている出来事はございますか。

以前、「うちの母が井上先生の絵を見ると痛みが引くんです」とおっしゃられた方がいました。その方のお母さんが末期ガンで入院されていて、余命ももう限られていたらしいのです。原画はとてもじゃないけど手が出せないが、せめて版画だけでもということで一点購入してくださいました。私が額装をして、その方のお母さんの病院に届けに向かう際、井上先生に「先生の絵を見ると痛みが引くという方がいらっしゃるんです。すみませんが、色紙か何か書いていただけませんか」とお願いしたんです。私はサインか何かをと思っていたのですが、なんとこんなに大きい紙（手を肩幅ぐらいに広げながら）に水彩画を描いてくださって。それは、野原があり、小さい丘の向こう側に家が建っていて、家に向かって一人の女性が歩いている絵でした。「あぁ、なるほど。自分の家に帰っていくん

建物内には、ピエゾグラフで出力された井上先生の絵が飾られたスペースも。右隅に置かれているのは、井上先生私物のピアノ

井上さんは、ピエゾグラフ作品には「ハウス・プリント」マークとして、アートスペース、ラボ、自宅と出力場所別にサインしています

ART SPACE

だな」と、病気で家に戻ることができないその女性の心情と重なる部分があるような気がしました。井上先生は、そういう優しい部分がありますよね。通常、末期ガンの患者はモルヒネなどで痛みを和らげるしかないそうなのです。音楽でという話を聞いたことがありますが、同様に絵でも痛みが癒されるということがあるのですねと、お医者さまもおっしゃってました。科学では証明できない何かがあるのでしょうね。井上先生の絵には、ピンクなど癒される色が多く使われているからかもしれません。人々の気持ちを癒し、時には痛みまで忘れさせてくれるというのは、自分が絵の中に入っていけるような世界観の作品でもあるからでしょう。ご自身でカラーチャートも作られているので美しい色の出し方やそのバランスも人並み以上に知っていらっしゃるのでしょうね。理屈抜きに誰もが惹かれる部分があると感じますので。フランスなど海外に行って感想を書いてもらうと、「かつて自分が行ったことのあるような風景です」と。面白いことに、日本と全く同じなんですよ。国や地域を問わずいろんな方が先生の絵を見て感動している姿をみると私まで嬉しくなります。

世界が認めたデジタル出力の技術

セイコーエプソン株式会社が開発した「ピエゾグラフ」というデジタル出力の技術で、主な版画を制作しているアートスペース。近年では、鑑賞者側の嗜好も多様化し、原画よりも版画の方をカジュアルなインテリアとして好む人も多くなっているそうです。色合いによってプリンターを使い分けるなど、高度なノウハウを駆使した作品の美しさは世界で認められています。

アートスペースは、ドイツにある製紙会社のHahnemühle Fine Art（ハーネミューレ　ファインアート）社からファインアート専門認定され、同社の推薦企業に選ばれました。

福岡敏郎さん
鹿児島県出身。株式会社アートスペースと株式会社アムゼの代表取締役。
井上直久さんをはじめ、宝永たかこさん、松本零士さん、手塚治虫さん、牧美也子さん、長野剛さんの作品を取り扱っている。アートスペースでは販売、アムゼではデジタル出力を専門に行っている。

株式会社アートスペース
東京都文京区西片 2-22-21
本郷 MK ビル 1F
営業時間：10：00 ～ 17：30（日曜祝日は休業）
TEL：03(6379)8885
FAX：03(3813)7182
URL：http://artgallery.co.jp/iblard/

株式会社アムゼ
上記住所 B1F
受付時間：10：00 ～ 17：30（日曜祝日は休業）
TEL：03(3868)3033
URL： http://www.artgallery.co.jp/prints/

アクセス：
東京メトロ南北線東大前駅より徒歩約 3 分

東大本郷キャンパス近くの静かなエリアに立地。1 階は株式会社アートスペース。地下 1 階に、株式会社アムゼがある

内堀法孝

井上直久さんを語るのに、必要不可欠な存在なのが、印刷技術“ピエゾグラフ”（概要はP118を参照）。それはどのようにして作り出されたのでしょうか。開発時セイコーエプソン株式会社に勤められ、井上さんと深く関わられた内堀法孝さんに当時の様子を振り返っていただきました。

――どのような流れで「ピエゾグラフ」の開発が行われ、井上直久さんと出会われたのでしょうか。

以前、セイコーエプソン株式会社（以下エプソン）で製品デザインの担当をしておりまして、１９９０年代半ば頃でしょうか、インクジェットは、デジタル印刷技術だけではなく、新たな表現技法となり得るのではないかと思い始めました。エプソンの開発者が少し変わった方法でスキャナーを設計していたのがきっかけです。

普通スキャナーというのは、影を出さぬようきれいに画像などを読み取ると思うのですが、あえてある角度から光を当て、影を出していたんです。その方法でなら、立体感を表現できるのではないかと閃きました。例えば、油絵ですと、砂などでマチエールを作るのですが、するとザラザラした表面になりますよね。つまりその質感を、原画のごとく現実的に再現できるんです。この技術を具現化するにあたって、やってみるのなら、単純な色のものではなくて、色が複雑に混ざり合っているものとか、できるだけ難しいテーマからと考えました。

ちょうどその時に、「ジブリＴＨＥ ＡＲＴシリーズ」の『「バロンのくれた物語」の物語』で、井上直久さんを知ったんです。

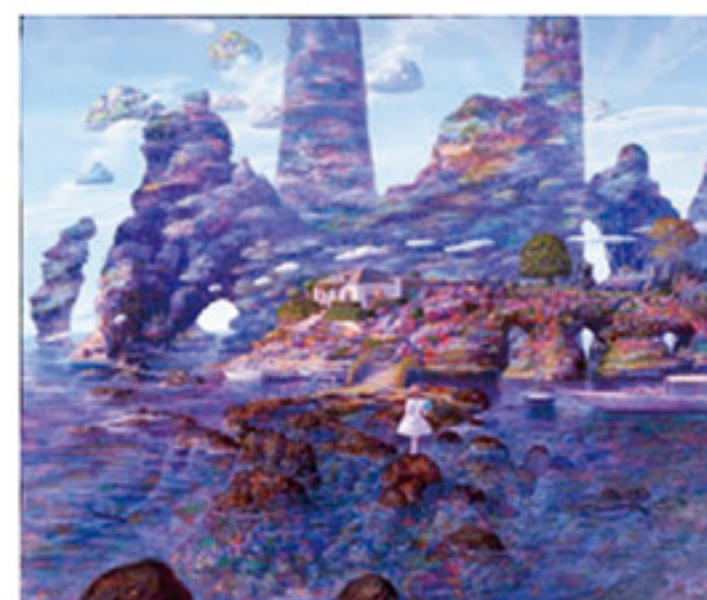
絵全体を締める役割に黒色を使用される方が多くいらっしゃるのですが、井上さんの絵は、黒色を使わずにいて、ゆるさが全くないですし、色を組み合わせて点描みたいな技法で描かれていたので、これは再現するのが難しそうだなと思いました。しかも、それを再現できれば、インクジェットの再現性の高さを証明できると確信しました。

そして、いざ作家と直接交渉しなくてはとなった際、井上さんの経歴を見たら、偶然にもちょうど10年違いの同じ大学出身だったんです。これなら話がしやすいと思いました。お話をしてみたら、とても話しやすい上に申し出を非常に快く応じてくださいました。

――井上さんとは具体的にどのようなことをされましたか。

最初の企画で、画集『イバラード博物誌』や絵本などから代表作品を選び、『イバラード六景』という大判画集を作りました。その後も、プリンターの特性を生かして「イバラード絵巻」というのを創作したり（１４８～１５５ページ参照）いろいろ試みました。

作家の方は、できあがったものだけしか評価しない人たちもいるのですが、非常に珍しいことに井上さんの場合は、できあがったものをどんどん変えていき、自らの作品で実験する人なんですよね。このインクジェットの技法でなら途中経過のものを残しつつ、新たな作品を作れるのではないかというアイデアを井上さんが出された

『イバラード六景』1997
左上から時計回りに《マーケットプレイス》、《タニマチ》、《モトマチ》、《第２投》、《Bon-Sai Garden Ⅱ》、《百貨店》

DIGITAL INKJET PRINTING

んです。元の絵を加筆し、全く違う絵にしたり、拡大してみたり、絵具で再現できなかった色を出したり。普通は手で描いた原画のほうが大事だと思われがちですけれども、それはあくまで表現したいものの途中の段階にすぎないんです。アナログの画材では出ない色を、再度デジタル化する際に作家のイメージしている通りの色にすることもできるので、コツコツと手で描いていくのと、デジタル上で調整していくのは何が違うのかというと、あんまり違いはないと思っています。データ上で制作した作品でも、もしデータを無くしてしまったら、もう再現できないので。

——ご一緒にお仕事をされて印象深い出来事などございましたか。

我々もデザインの仕事をしているので、インクジェットを単なる情報機器で終わらせたくなかったんです。

コピー機の域から脱し、新しい価値を生み出す道具として、筆や紙のように作家たちに受け入れてもらえて、尚且つ、使い続けてもらいたいと思ってました。ただ当時は"コピー"に代表されるデジタルプリントという認識が強く、世間では、単純に複製しているだけで、1枚につき紙代くらいの20円~30円の価値しかないはずなのに、2万~10万円もするなんて詐欺だよと言われていました。そんな風潮の中、井上さんが、「原画を売っているだけだと、原画を手にしたわずかな人たちだけが幸せになるが、複製画だと10点複製すれば10人幸せになる。複製画だから価値が下がるのではなくて、複製画だからこそより多くの人に満足してもらえるんだ」と、お話をしてくださったことがあり、気持ちが本当に楽になりました。それが井上さんと一緒にお仕事をして良かったと感じた、一番印象深かったことですね。

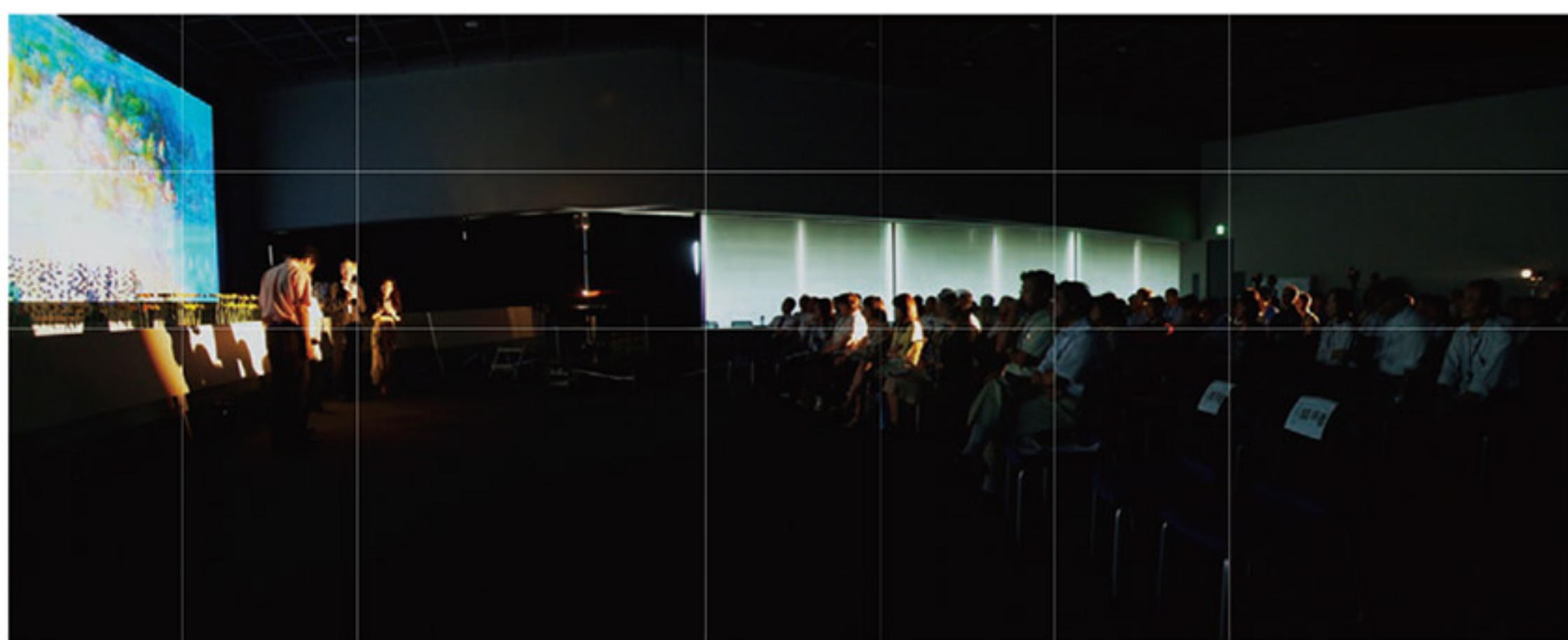
プリンターとは、最終出力を出すだけでなく、画材の一つであり、表現の幅を広げる役割を果たすのだと捉える事ができたのも、いろんな試みに挑戦できたのも、井上さんという、とてもクリエイティブな方に出会えたのが大きく、そのおかげだと思っています。

セイコーエプソン株式会社の社内上映会の様子。井上さんの作品が大きくスクリーンに映し出されている。「スクリーンの近くに行けば行くほど細やかな部分が見え、高精細なものをゆっくりと動かすことにより、実際にその世界の中に入ったような不思議な感覚になれました」と内堀さんは語ります。

Photo courtesy of Naohisa Inoue

内堀法孝さん
三重県生まれ。1979年金沢美術工芸大学卒業後、諏訪精工舎（現セイコーエプソン株式会社）に入社。デザインマネージメント等を担当。2013年に独立してUNYdesignを創業。現在、長野県を拠点に起き、製品デザイン、ブランド開発、デジタルプリントアーカイブなどを手がけている。

内堀さんが手にしているのは、『"イバラード"イノウエ教授のピエゾグラフ特別講座　玄光社刊「イラストレーション誌　No.140-No.145」より』。井上直久さんとセイコーエプソン株式会社により「ピエゾグラフ」についてまとめられた非売品書籍。

UNYdesign　（ウーニーデザイン）
長野県諏訪市中洲 230-4
TEL：070-5558-0357
Email：unydc1957@gmail.com
URL：http://www.ndpa.jp/member/unydesign/

PiezoGraph

井上直久×ピエゾグラフ

井上直久さんの創作活動を支える印刷技術「ピエゾグラフ」。それは一体どのような技術なのでしょうか。井上さんの湧き出るイマジネーションの際限を広げてくれる、画期的な表現技法をご紹介いたします。

ピエゾとは、「圧力を加える」という意味のギリシャ語。1880年、フランス人の物理学者であるキュリー兄弟によって発見され、石英水晶に圧力を加えることで電荷が生じるこの現象は、圧電（ピエゾ）効果と名付けられました。

この現象を応用し、独自のピエゾ素子を用いたインクジェットプリンターを製造するエプソンでは、同社の技術名称「マイクロピエゾテクノロジー」にちなんで、人の視覚に極めて近い、この超高密度創作技法を、「ピエゾグラフ」と称しました。

ピエゾグラフでは、原画をスキャンまたはカメラなどで撮影してデータ化した後、それをそのままプリントアウトするのではなく、原画を再現しつつ、より作者のイメージに近づけられるように、読み込んだデジタルデータをレタッチ。画像色彩補正を行った上でテスト印刷を繰り返し、より作品の表現に適した印刷用紙（メディア）を選定しながら、高精細インクジェットプリンターで印刷します。

写真や版画の用紙の風合いから、絵画においては筆のタッチや画材の素材感までも精密に再現でき、且つ耐光性、耐水性も抜群の耐久力によって100年以上持つとも言われています。

この技術は井上直久さんをはじめ、多くの作家やデザイナーの創意工夫により、既存の表現技法に匹敵するものとして、その可能性を広げる役割を担ってきました。

ピエゾグラフを用いた主な作品

《ここがその街》

3

4

5

1. 原画（2002）
2. 主人公を半分女性化（2004）
3. 男の子を女の子に描き変える（2004）
4. 《その日、この街》遠景にめげゾウを描き、女の子を男の子にまた描き変える（2006）
5. 主人公を《アーケード》に描き足す（2009）

《多層海麗日》

1
2
1. 《多層海麗日》原画（1998）
2. 《多層海、麗しき宵》夜バージョンに描いてみました（2013）

参考文献：
井上直久（2004）『“イバラード”イノウエ教授のピエゾグラフ特別講座　玄光社刊「イラストレーション誌　No.140-No.145」より』、セイコーエプソン株式会社
油谷 勝海（2005）『ピエゾグラフ―クリエイティブプリント 360°』（コマーシャル・フォト・シリーズ）、玄光社

座談会

HOLBEIN

井上直久さんの作品を支える大切な絵具。その中には、
ホルベイン工業株式会社と井上さんの交流により生み出された製品も少なくありません。
カンバス上に彩られる色たちの開発には、技術者たちの想いがたくさんつまっていました。

桂悟郎さん
ホルベイン工業株式会社
開発部係長。1995年入社。

小杉弘明さん
ホルベイン工業株式会社
常務取締役。1977年入社。

伊藤彰宏さん
ホルベイン工業株式会社 1965年入社。現在ハンズアキラ代表。

春日敏夫さん
ホルベイン工業株式会社
取締役開発部長。1980年入社。

伊藤さん　昭和50年ぐらいから、高校の先生にモニタリングをお願いをしていて、その中の一人が井上先生でした。

井上さん　そうですね。いろんな色を試して、使いやすさやこんな色がほしいという提案をさせてもらいました。他社の絵具をいろいろと使っていた時期もあったのですが、ホルベインさんのアクリル絵具ではいろんな意見交換ができたので、今では一番馴染んでます。

小杉さん　先生の発言の影響力はすごかったですよ。きっちり返事を書いてくださる方は少ないので。

井上さん　他のメーカーさんに問い合わせても、あまり反応がなかったりしたんですが、ホルベインさんではちゃんと開発部の方が来てくださって。

春日さん　常に使う側からの色に基づいた的確なアドバイスをいつもしていただいて。

桂さん　先生はちゃんと文章にして、サンプルの感想を送ってくださいますしね。

伊藤さん　いろんな方にご意見を聞いていたのですが、先生が一番ご要望が多かったです（笑）。

井上さん　きっと近畿で一番うるさい教師だったんです（笑）。でも、それをすれば絵具がより良くなり、自分の勉強にもなりますしね。ほしかった色が製品化されたりして、気を良くしてました。

難しいリクエスト

伊藤さん　難しかったのはやはり赤紫系の色。顔料が当時は手に入りづらかったので。あとはジェッソのにじみ具合ですかね。

井上さん　ジェッソは地塗り用の白なのですが、僕は絵を描く際にも使うので。透明色は絵具の白の上だとなかなか均一に伸びないのですが、ジェッソの上だとうまく広がる。ホルベインさんの「ジェッソS」は丸い粒子でできているので筆が痛まなくていいんですが、絵肌の風合いは

「ジェッソM」の方が面白い。

小杉さん　たぶん「ジェッソM」の粒子の大きさに差があるからでしょうね。

伊藤さん　アマチュアの人もプロの人も、いろんな色を厚く塗って印象派みたいにする方が多いのですが、井上先生は、地塗りの段階で白い下地に色を重ねて、透明な色の変化や深みを追求し、描写でも透明色を大事に使われているので、そこまでされている方は少ないと思います。

ホルベイン社のポリシー

小杉さん　よく要望されるのがグリーンとブルーの間。あとレッドと赤紫。よく分かりますし、調色したらできる色ではあるのですが……。

井上さん　ホルベインさんのポリシーとしては、混ぜて作るのではダメなんですよね。メーカーさんによっては調色が多いのですが、ホルベインさんは、できるだけ調色しないで顔料自体を生かすようにしている姿勢が素晴らしいと高く評価しています。

春日さん　色味というのは原料に関わる問題なので、先生の要求を１００％実現するのは難しいところではあるのですが……それでもちゃんと、アドバイスをいただけたらなるべくご希望に近づけるようにと、誠心誠意に対応してきました。

小杉さん　顔料メーカーもどんどん減ってきていて、世界中の絵具メーカーが手に入れることができる顔料って限られてきているんです。そのせいで、バリエーションもどんどん減っていって……。結局はどの顔料を選ぶかということと、それをいかにきちんと作っていくかということだと思います。絵具の顔料は非常に小さいんです。それをきれいに分けてあげないとせっかくきれいな色が手に入っても、能力を発揮できない。塗料屋に比べると絵具メーカーは、機械力とか分散技術は遅れがちなので、それらも含め、分散技術をどんどん進めていき、絵具をいいものにしていかなければと。いいものを作り、できるだけ多くの人に使用していただきたいという強い思いがあります。

井上さん　ホルベインさんにはそのまま最高の絵具を作ってもらいたいんですが、理想を突き詰めていくと、いろいろ要望があるので……。それだけではなく、より多くの人に絵具の良さを広めていくために、誰でも使えて簡単に描けるものがあってもいいんではないかと思います。今の子は絵もコンピューターで描いたりして、絵具で描く子が減ってきていると思います。絵具をパレットに出して、筆につけて、カンバスにと描くまでに3段階あるのは、難しいんです。だから子供向けのものがあったらいいなと。僕の娘が言っていたのですが、チューブの先が描けるようになっていて、チューブごと描けるような絵具ができないかなと。多くの人がマーカーを好むのは、塗ったままの色でそのまま描けるからだと思います。それに近いのはあると思うんですが、すぐ乾いてしまうんですよね。昔の水彩のような感じで、子供用のは、高い保存性はなくてもいいんですよ。それで先のスポンジ部分をもう一度水につけたらまた描き直せるようなものがあったらいいなと思っています。技術的に難しいのは良く分かるんですが……。

春日さん　結局はついつい売れるものをと求められるんですが、作っていてもそれはあまり面白くないんです。作るとしたら、ある性能を追求し、１００％活かしたものであるべきだと思います。

井上さん　それが〝ホルベイン〟という会社のカラーなんですね。日本の絵具のグレードの高さは、ここから来ていますね。日本の技術はこの分野でも突出したものを持っていると思います。僕は、ホルベインさんを通して本当にいろんなことを学ばしてもらいました。

ホルベイン工業株式会社
HOLBEIN WORKS，Ltd.
創業：明治 33 年（1900 年）
設立：昭和 21 年（1946 年）10 月 11 日
本社：大阪府大阪市中央区上汐 2-2-5
TEL：0120-941-423
受付時間：10:00 ～ 16:00（土・日・祝日除く）
URL：http://www.holbein-works.co.jp/

hanzuakira（ハンズアキラ）
本社：大阪府大阪市城東区鴫野西 3-4-1-101
TEL/FAX：06-6961-2430

ネイルペイント製造、ネイルステンシル、教材絵具、絵具全般、パッケージ、販促ツールなどのデザインを扱っています。

ジェッソ（Gesso）

絵具の下地。石膏のことをイタリア語でジェッソといい、テンペラ画や油彩画の下地として用意られた膠と石膏に由来する。ホルベイン社では、粒子の異なる白色のジェッソ(S/ M/ L/ LLサイズ)、半透明タイプのクリアジェッソ（M/ Lサイズ)、色のついたカラージェッソ（300ml / 900ml）を扱っています。

ホルベイン×井上直久

井上直久さんがモニタリングされたホルベイン社の製品たちです。中にはまだ開発中のものやすでに商品化されているものまであります。

Modeling Powder/Modeling Paste

モデリングパウダー / モデリングペースト

立体、半立体造形用盛り上げ用地塗り材

Super Opaque White

スーパーオペークホワイト

粘りが少なく、細い線でもきれいに描ける濃度の高い白

April Orange

エイプリル・オレンジ（仮）

４月にもらったのでこの名を付けた。低粘度のアクリル絵具の液状タイプ、未発売

Clear Gesso

クリアジェッソ

透明な地塗り材

Painting Medium

液状ペインティング・メディウム

画溶液

Quick Drying Medium

クイックドライングメディウム

調合溶き油

Crystal Gel Medium

クリスタルジェルメディウム

ゼリー状で透明度が高いのが特徴

Rich Gold

リッチ・ゴールド

金箔のような密度のあるゴールド

High Accuracy Pearl

高精度パール

フレーク状でキラキラ光るゴールド

Aluminium Tube

空チューブ
これに自製のえのぐetcを詰め、底を丸めて止める

自作した絵具を入れるためのアルミチューブ

Gel Medium(Acrylic Resin)

粘度、流動性の異なる透明度の高いジェルメディウム（アクリル樹脂系）の試作品

粘り気がある ← → サラッとしている

Traveling Color

トラベリングカラー

角度によって金属やパールのような色の輝きを出せるのが特徴。2017年３月「アクリリックイリデッセンス」として商品化された

HOLBEIN Factory Tour

スペシャル企画

井上直久さんと行く ホルベイン工業工場見学

今回、特別企画として、井上直久さんと共に普段からお世話になっている
ホルベイン工業株式会社の工場見学をしてきました。ホルベイン工業の絵具が、
世界でトップクラスの高品質を誇るヒントは、地道な開発と厳しい検査体制にありました。

ウルトラマリンブルー

イバラードにもよく出てくる「ラピスラズリ（本瑠璃)」。これはウルトラマリンの顔料として使われており、黄鉄鉱が混じり、金の星のように光り、まるで澄み切った夜空のような美しさを持つ青紫の鉱石です。天然のものはヨーロッパ付近ではアフガニスタンでしか産出できず、それが黒海を経てイタリアのベニスへ海路で運ばれたといいます。そのことから、海のシルクロードで運ばれてくるこの色に、「海を越えて（ultramarine)」という名称がつけられました。

井上さんご愛用の絵具ウルトラマリンブルーもこちらで製造されています！

今回見学させていただいたのは……

ホルベイン工業枚岡工場
住所：大阪府東大阪市横小路町 4-10-52
TEL: 072-985-1221
FAX: 072-985-3516

Let's HOLBEIN
工業工場見学

色の素である顔料（①）と、接着剤である乾性油、増量剤でもある体質顔料を撹拌機にかけ（②）、それを摺り合わせる３本ロールミル（③）と、展色材と混合させる真空撹拌機（④）。絵具の独特の色彩、粒度、粘度を出します。

ロールで練り上がった絵具は、「測色計」で色相、彩度、明度、マンセル値を検査し（⑤）、「フーバーマラー」で顔料と展色材を混練した際の色の検査をします（⑥）。顔料は、色、吸油量、粒度、耐光性・堅牢性、耐薬品性がチェックされます。

常に高品質を保つために、「恒温恒湿室」（⑦）では、「平行板粘度計」（⑧）で粘稠度を計測したり、湿度や温度の管理をしています。製品としてできあがる前に、さまざまな検査工程を経て、初めて市場に送り出されるのです。

絵具を混ぜ合わせる工程で使われるローラー（⑨）とミキサー（⑩）です。顔料の塊をつぶし、油と均一に粒子を徹底的に細かく練り合わせ、滑らかで艶のある絵具に仕上げます。スイスでは実際にこの機械でチョコレートを作っているそうです。

井上直久式
物語の創り方、
絵の描き方。

夢から、思いつきから、描いていくうちに。

ご自身でも描ききれないほどの広がりを持つ「イバラード」。有限のフレームに世界を凝縮していくかのように、カンバス上では物語が紡がれます。その描写の技術論を井上直久さんに語っていただきました。

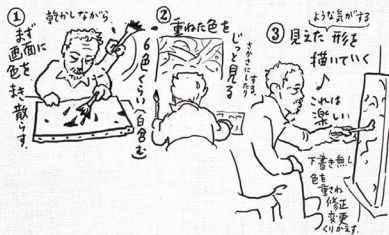
小さな発見を記録する

まだ言葉にならないものを描く

発想の源は、主に3つあります。突然の思いつき、記憶や経験、それと夢からです。絵を描く際に、題名やテーマといったものを先に言葉で考えて、これを絵にしていく人は多いようです。僕に「思うように絵が描けないんです」と訴えてくる人は、ほとんどがこの方法で絵を描こうとしている。この方法は、実は大変難しい。なぜかというと、言葉にした全ての物が描ける描写力がなければ、言葉が絵にならないからです。それに、実際の事物はそうでないことに気づくはずです。例えば自然界にあるものには、初めから名前がついているわけではありません。花でも星でも島でも虫でも、科学的な発見や、新しい考え方、歴史上の事件などにも、初めは名前などついていないのです。まず誰かがそれを見つけて、名前をつける。そのものが何であるかは後で考える――。僕は絵を描く時、とりあえず描いてみて、題名は後から考えます。カンバスに向かって描き始めるまで、何を描くかは決めないことにより、無意識も含めた世界観を反映させることができると思うからです。

一つ目の思いつき。僕の絵の描き方をあまり知らない人は、ぴしっと下描きして細部まで描き込んでいると思っている方もいらっしゃいますが、それができたら超人的な人だと思いますね。そうではなくて、僕は〃色を撒き散らしてから描く〃発想・技法で描いています。画面に色をいい加減に置いてしまうのです。最初は赤色から始めることが多いです。画面に暖かみと力強さが加わるような気がするからです。次は赤の補色である緑を、それから紫、オレンジ、青というように色を重ねていきます。重ねた色が暗くなりすぎたら、途中で白を入れることもあります。

こんなふうにして、画面にいろんな色が重なったり散らばっている状態を作ります。この色の重なりや偶然のリズムが気に入り、このままとっておきたい、と思うこともありますが、こうしてできたいろんな色と形が入り混じる画面に、何か心ひかれる形が見えてきます。あるいは、何となく何かの形に似たものが見えることがあります。そういうものは、目をそらすとまたわからなくなってしまうことが多いので、その形が後でちょっと手を加え、見えた時に分かるように残しておきます。しかし、その時肝心なのは、あまり早くそれが何かを決めつけてしまわないことです。

偶然にできた色の中から、自分の見たい形を探して描き進んでいくと、全てを自分で作って描くよりもずっと自然で、思いがけない変化に富んだものができます。それが気に入れば光の方向を決め、遠近の秩序をきちんと整え、立体感を強めると、全体が一つの空間にまとまりはじめます。空間ができれば絵を描いているというよりは、世界を創っているというような感覚になり、面白くてやめられないこともあるぐらいです。絵を描く事は、まるで即興演奏やサッカーの試合みたいに、やってみないとわからないですし、終わるまでどんなものになるもわかりません。わかっているなら描く必要はないとさえ思います。描くことにより、何かを発見する……。よって、描く行為は小さな発見を記録する行為でもあると思います。

実は、人は誰だって「意味のないもの」を描きますし、意味のないもの」を描くのは楽しいことです。これは誰にも経験のあること

真似でもいい 似ててもいい 変でもいい
全然違っててもいい 何回やってもいい

だと思うんですが、退屈した時や考えがまとまらない時、僕らは紙の裏や余白に、ぐるぐると渦巻きのようなものや形のないものを描いたりします。それが初め何かわからなくても、描くうちにわかってくることもあります。描いた後、しばらくしてわかることもあります。それが何か、わからないままのものも、それでいいと僕は思っています。わかったものしか描けないよりはずっといい。むしろ、決まりきった構図、台本通りの芝居だと、面白さが半減しますよね。

二つ目は、経験や記憶からです。小さい頃見た景色とか、どこかで見たけれども忘れられない景色などを記憶から描く。そういうのを絵にすると誰が見ても懐かしくて不思議な絵になるんです。

そして最後の三つ目、夢からです。夢の中の景色って、絵にしたらかなりすごいです。記憶にとどめておくのは大変ですが、インパクトの強いものって目覚めた後も覚えていたりしませんか？　僕の《借景庭園》の絵も夢からなんですよ。1、2行だけでも文章でメモしておくと案外思い出せるものなんです。今でも夢で見たまま、描いていないものがたくさんあるぐらいです。

現実にないものも描くには

本当はどの絵も色を撒き散らしてから描くわけではないですし、描き始めた後、混色技法や塗り重ね方、遠近法、陰影法や空間のリアリティを出す色彩など、いろいろな技法を使います。イバラードのような絵を描くためには、実は絵画技法の基礎的な知識が必要ですし、実際にないものを描くには実際にあるもの全てを描けるようにするんです。絵がうまくなりたくて、僕はいろんなものを写生してきました。その結果、ただ絵が上達するよりも、もっと大切なことに気づけたんです。それは光や影、空間のあり方、色の不思議さや美しさ。そうして実際にあるものをリアルに描けるようになると、現実にないものも、そこにあるかのように描くことができます。描き始めは画面が平面にしか見えないので、そこをなるべく早く抜け出すのがコツ。まず適当に塗ったり色を散らしたりして、とにかく画面全体に色を置く。

風景写生の指導では「とにかく30分で、いいかげんでもいいから、全部塗ってしまうこと」と教えてました。そうすれば大雑把でも絵が風景に見えてきます。

あきらめずに描いてさえいれば、いつかは画面の全てが自分の気に入った状態になる。そういうことができるようになった時は本当に嬉しかったです。僕が言葉で考えずに、絵を描きながら考えるようになったのは、それからだと思います。今はコンピュータを使えば、いくらでも修正できる上に、途中の状態まで保存しておくこともできます。絵を描きながら考えていくことが、いっそう自由になってきている。いろいろ悩まれるのは、いろんな意味でまだ白い、何も塗っていないところが多いからではないでしょうか。

こだわらない、こだわり

僕は「こだわり」という言葉が嫌いで、こだわってこういう技法になったんではないんです。こだわってないからこそ、こういうやり方を見つけたんです。あえて「こ

だわり」を言いますと、今持っているものに〝こだわらない〟というのが〝こだわり〟です。

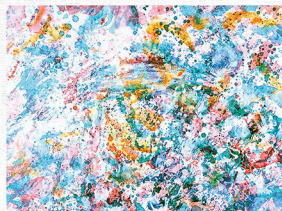
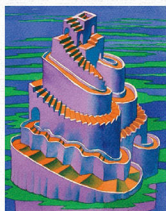
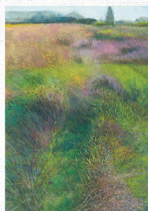
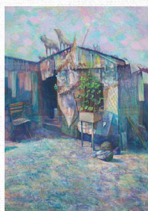
「学ぶ」は「真似ぶ」

何度も聞かれる質問があります。「どうしたら〝自分の世界〟を作れるのでしょうか」と。「真似はいけません、誰もまだ描いていないような、自分らしい、ユニークな作品を描きなさい」と先生が言うらしいです。独自性のある作品を描かなければいけないと、苦しんでいる人が非常に多い。でも、子どもの頃あんなに「描きたい！」と思ったその気持ちを尊重してほしいです。どうしてあんなにも判を押すかのように〝個性〟を要求するのかがわかりません。何でそんな無茶な要求ができるのでしょうか……。

何かを作ればそれは必ず自分のものになります。僕は人がしたことを自分でもやってみるのが好きです。違うことをしようなんて思う必要はありません。同じものを描こうとしても、同じものになるわけがないんです。すごろくでも、お話でも、漫画でも、なんでもいいから何か作ってみてください。それは正真正銘あなたの「自分の世界」です。個性なんて頭の形や肌の色のようなもので、誰にでもありますし、特別だと思うようなものでもありません。できたものが誰かの真似みたいだったり、思うほどいいものでなかったりすると、自分の世界が表現できないと言い、挫折してしまう人が少なくありません。その真似みたいなものや、それがいいように思えないものが、その人の「自分の世界」なんです。それを認めてそこから作り始めなければ、それ以上自分の世界は作れません。絵というのは、描く上で発見があるので、どんな方向へ進むかは、その人の考え方によるとは思いますが、描いていれば前へ進みます。「人と違うことをしなさい」「同じことはするな」という人は、違うことをしないと自分は他人と同じなんじゃないかという不安に襲われているのではないでしょうか。自分探しなんてする必要は全くないんです。僕はそういう学生に、「学ぶとは〝真似ぶ〟ことだ、自分の描いてみたいような絵があったら、どんどん真似しなさい」といつも言っていました。「気に入ったもの全てが真似できれば、その向こうに、一番好きな自分の絵がある。どんどん真似て学びなさい」と。でも、それでいいと思っていたら、また逆の例もあることを知りました。その、真似のままのを自分のオリジナル、と思って疑わない人がいるんだと。なぜそう思えるのかと不思議なくらい、真似のままで。真似したからには、誰それの何から教わったと提示し、オリジナルに対する敬意は当然払わないといけません。いい作品というのは真似したくなる作品です。真似したくなるのはお手本になることだから、みんなが真似するとそれは、知っていて当然になるので、クラシックになります。優れた絵画は、常にその時代の精神を反映しているんです。

現状の自分を肯定する

「イメージ通りに描けない」という人がいます。自分の世界をうまく表現できないと。もし「イメージ通りではない」とわかっているなら、そのイメージと現実の乖離に目を向ければいいのです。一体何を勘違いしているのでしょうか。描きたいイメージを考えているのは君の頭。つまり意識的な部分だから、君は頭で君自身のイメージを組み立てている。それが描けないということは、君の素材、つまり君の体と無意識的な部分がそのイメージを否定していることになります。頭の中に思い浮かべただけのイメージをそのまま描こうなんて、君の頭はそんなにすごいのか。自分の意識が無意識の部分と体までコントロールできると、思い上がっていないだろうか。そんな思った通りの自分は、自分が作ったイメージであり、虚構である。思うような自分でない今の自分が現実である。この場合は現実の自分の方がまともで、イメージの自分は間違っているとわかった方がいいです。つまり、現状の自分を肯定できないことから困難が生じています。うまく描けないのは当たり前。誰でもはじめは描けません。否定するのではなくて、それが「自分の出発点」だと肯定してあげてください。そこから全てが進むのですから。

好みの画家はいっぱいいます。カール・ラーション、ルーチョ・フォンタナ、サム・フランシス、アンフォルメル、セザンヌは、物の表面のかちっとした描写。東山魁夷は、ぼーっとした光るような色。モネは、リアリティを出す光の表現。スーラは、点描。マグリットとかデルボーの幻想的な作風は、イメージとして刺激されました。ライエン・デッカーは、若い時に洋書の画集を見つけて、高くて買えなかったのですが、最近運命的にもまた見つけました。

1. 絵を描く前の下絵
ジャクソン・ポロックやサム・フランシスのように色を撒き散らします。
2.《ゼリーのある静物》1982
油彩で青のモノトーンの上に、透明色を重ねるマックスフィールド・パリッシュの技法に衝撃を受け、アクリル絵具でそれを試みました。
3.《緑の壁》 1975
ルーチョ・フォンタナの切られたカンバスと、アンドリュー・ワイエスの壁の描写に刺激を受けて描きました。
4.《ラセン島》1977
好きだったマウリッツ・コルネリス・エッシャー風の階段を、透明なカラーインクの単色塗り技法で描きました。
5.《秋の野道》 1977
アンドリュー・ワイエスの画集は一時期、洋書店などで見かける度に購入していたので、たくさん持っています。
6.《モンルーイの城》1976
ウジェーヌ・アッジェ (20 世紀初頭フランスの写真家) モノクロームの写真をカラーで忠実に模写しました。

井上直久式
物語の創り方、
絵の描き方

夢から、思いつきから、描いていくうちに。

ありのままに写す練習がデッサンだと思われがちかもしれませんが、手で触れるような存在感も描写するというのが僕の思うデッサン。いいデッサンは現実のコピーではなく、味のあるいい〝レンズ〟のように、それを通して見たほうが味わい深く、なじむ。現実に本来あるそうした要素が、レンズを通して映り、気づかせてくれるんです。

「アクアクウォーツ」

「ラ・フランス」

「スプーン」

「シプリペディウム」

「アマリリス」

「リカステ」

滋賀県の仰木の里にて

宝塚のイングリッシュガーデンにて

Photos courtesy of Naohisa Inoue

宮崎駿さん
東京生まれ。アニメーション映画監督。「風の谷のナウシカ」「となりのトトロ」「千と千尋の神隠し」など数々の名作映画を世に生み出した。「耳をすませば」ではプロデュース・脚本・絵コンテを担当。

対談 井上直久×宮崎駿

理屈なんてない世界

1994 年 2 月、井上直久さんの東京での初個展。
その案内ハガキの送付先の一人に、まだ面識のない宮崎駿監督がいました。
この個展で初めて顔を合わせた 2 人はその後、
美しくて純粋で、楽しくも甘酸っぱい時間を切り取った
映画『耳をすませば』を作り上げました。
あれから 20 数年たった今、あらためて懐かしい思い出話から
お互いの近況報告まで、思い思いにお話ししていただきました。

宮崎監督　井上さんの個展はたまたま行って、ちょっと入り口から店内を覗いたんです。それで、面白そうだなと感じて、入ってみたんですよ。

井上さん　ドアが開いて、入ってきた人がなんか見たことがある人物だなと。『風の谷のナウシカ』の漫画の後ろページに宮崎さんの写真が載っていたので。

宮崎監督　よく覚えていますね。あそこで印象深かったことは、井上さんの絵が飾ってあるからなのか、個展会場が非常に広く感じたことです。本当はもっと狭いところなんですが。そして、何かお話をしたのを覚えています。

井上さん　確か僕の絵は、『鏡の国のアリス』に出てくるお店の棚みたいだって。

宮崎監督　あの食器や本がびっしりの。でも一つの品物をよく見ようとすると、それが消えちゃうという。そのシーンが浮かびました。

井上さん　色を撒き散らして、あまり細かく描き込まれていない部分でさえも何か見え、途端に見えなくなっちゃうってことですよね。

重力から解放される

井上さん　実は、僕は20年前の絵に上から塗り重ねて描いたりするんです。売れなかった絵があったら「しめた、これまだいける」って。それで、実は《上昇気流》も最初、女の子はいなくて、後で描き足したんです。絵の名前も全然違い、《住まいの多様化》でした。もしそのままだったら、宮崎さんは映画にされなかったのではないかなって。《上昇気流》という題が、やっぱり何か呼び起こすものがあるんだと思います。

宮崎監督　井上さんの絵は僕が縛られているいろんな重力から自由に解放されているんですよ。無理やりすり合わせたのはこれ(『耳をすませば』)ですから。無理やりという言い方は変ですが、実はこれはね、ずっと悔しい思いが残っている作品なんです。

井上さん　え、そうなんですか！

宮崎監督　手すりに出てきて、ベランダから広い景色を見ているシーンが、もっといいものになるはずだったんです。なんだか不思議な、スッと抜けた、空中に降りて歩み出ていく感じにしたかったのですが、いくら絵を描いても床板とかが全部邪魔で、どうやってもできなかったんです。ちょっと上に目を向けると今度は屋根が。それで屋根を描かなければいいかといえば、そうするとただ屋根がないだけになるんですよ。ないわけにはいかないというのは凡人の考えることで、イメージこそが大事なんです。

井上さん　それが、《上昇気流》の女の子が歩みだすところに似ているんですよね。

宮崎監督　それからずっと、ひょっとしたらこうかなとか、ああかなとか……。

井上さん　その手すりから乗り出して、手すりが見えなくなる、というのではダメなんですか。

宮崎監督　ダメなんですね。女の子が、物語を書こう、とかなんか口走っているだけの映画にしてもしょうがないんですよ。確かに手すりは見えなくてもいいという考え方がありますよ。そういう嘘をつくのが僕はうまいですから。僕が考えていることは絶対に無理なのかもしれないんですけれども、無理か無理じゃないかというよりも、これね、なんだか面白くないんです。これには、答えはないんですよ。結局、とても自然な感じになっちゃいましたね。いやー悔しいね、こりゃ。これかなって、しばらくやっていると、違うんです。終わらないんです。

井上さん　他の映画でもそういう経験はあるんですか。

宮崎監督　いや、この映画のあのシーンが特に。そのためにわざわざああいう建物を崖の上に作ったんです。

井上さん　あの見晴らしのいい場所に。

宮崎監督　夏目漱石原作の映画『三四郎』を中学生の時に観たんですが、僕は映画が足元から始まっていたと思い込んでいたんですよ、ずっと。どういうカメラワークなんだろうって考えていたんですが、この前観てみたら——ただの全身だったんです。

井上さん　なんですって？

宮崎監督　ただの全身像だったんですよ。足元に目が行っていただけなんです。

井上さん　宮崎さんの見方だったんですね。

宮崎監督　ただ僕が勝手に、足元のアップとしてしか観ていなかっただけなんです。『耳をすませば』のシーンもそういう風に見て取ってくれたらいいんですが。「それなら、初めから描くなよ」と言われるかもしれないけど、それはそれでおかしいんですよね。

井上さん　でも、宮崎さんの心ではそういう風に観えていたんですね。

宮崎監督　それで足元からやろうと思ったわけですよ。歩み続けていき目の前に風景が広がる——かどうかというと、実際は広がりませんからね。面白くないと思い、納得いかないまま早20年（笑）。

1 よもやま話
～ジブリの社名～
ギブリ、ヒブリ、ジブリ。

宮崎監督　実は、イタリアの友人に"GHIBLI"の読みは「ジブリ」か「ギブリ」か聞いたんですね。それでジブリにしたら、後から、「ギブリ」だって。ちゃんと確かめたのに。おまけにスペイン語の読み方は「ヒブリ」になっちゃうんですよ。ひやぶりになるな、なんて。面白いなと記憶に残っているんです。それがなんとなく「ジブリ」でいいやって、そのまま。

井上さん　まあ、固有名詞なんだから。

宮崎監督　固有名詞になっちゃったんだけれども。もともとはサハラ砂漠の「熱風」という意味の言葉なんですよ。風には全部名前がついているんです。

井上さん　そういうのいいですね。

宮崎監督　風向きごとに名前がついているんです。どこかの分厚い本に書かれていたんですが、その後出会っていないんですよ。見つからないんです。

井上さん　その時のその気持ちが伝わってほしいわけですよね。今度からあの映画を観る人は、そこに手すりなんかないかのように、空中に踏み出していくような感じで、観ましょう！

理屈で説明できないこと

宮崎監督　理屈はつけられないけれど、"こういうもの"というイメージはある。でもいざそれを映画にしようと思うと、その"理屈"がないと困るんです。ですが、井上さんの絵を見ていたら、描きたいものを描いていたらいいのだと感じました。

井上さん　映画は筋や理屈が通らないと観に来てもらえませんもんね。僕は描いた後に理屈を考えるから。

宮崎監督　理屈が通っているから観にきてくれるというわけでもないんですが、一応筋があるのがルールでもあり、通っているのを求められるので。しかし、この映画は「こういうルールで成り立っている」と説明したくないんですよ。ゲームになっちゃうでしょう。

井上さん　全部説明されて分かってしまうとつまんなくなっちゃいますもんね。

宮崎監督　そうそう。あれはなんだったんだろうって思えないんですよね。謎めいてよくわからないものを持っている映画の方が面白い。どうして彼女が彼を好きになるのかとか、そこに理屈はない。

井上さん　あんな奴に、こんなにも賢い可愛い子が惚れてしまう、という話は山ほどありますからね。

宮崎監督　そういうことですよ。ありそうな世界を写生して描かなければいけないとかそういうもんではない。井上さんの頭の中の奥の方に世界があり、それを引っ張り出すために、ペッペッペッ～と色を撒き散らす。自由なやり方を見つけたというね、面白いと思いますよ。そして、それをへこたれないでずっと飽きずに続けてきているというのが、たいしたもんだなと。

井上さん　楽しいんですよ。

宮崎監督　そう言える井上さんがすごいんですよ（笑）。

井上さん　そうなんですかね。家内は僕の機嫌が悪くなって、イライラしはじめたら、「そろそろ絵を描いたら？」と言うんです。描いていると「あ、僕結構、絵うまいわ」と機嫌良くなるので（笑）。宮崎さんも映画は、楽しいからずっと続けられているんでしょう？　宮崎さん楽しそうですもん。

宮崎監督　楽しくないですよ（笑）。

井上さん　それは宮崎さん、責任感が強いから。そもそも僕なんかよりも長く続けられているじゃないですか。

宮崎監督　僕、いろんな映画を作っていますからね。

井上さん　それを言うんだったら、僕だっていろんな絵を描いていますよ（笑）。

謎めいてよくわからないものを持っている映画の方が面白い。

あるものをあるがままで

井上さん　宮崎さんがすごいのは『耳をすませば』の時、ベストを着て蝶ネクタイしている人を登場させたじゃないですか（※）。僕ベスト着てお会いしたことありましたかね。実は僕ベスト好きなんですよ。あとあのおじさんリコーダー吹いたでしょう。僕、趣味でリコーダーやっているんです。どちらもご存知ないはずなのに、そんなのが結構あるんですよ。なんでこんなに人の表面だけを見て、わかるんだろうかなと。宮崎さんの洞察力は本当にすごい。宮崎さんの映画に出てくる人物は、動けば動くほどその人の内側が出てくる。内側があってこそ、外側の世界が広がってできてくるし。

宮崎監督　あとは作品を作るのにあたって、どれくらい羽目を外せるかですかね。羽目を外せない人も中にはいますから。

※井上さんは作中、タンバリンやコルネット、リコーダーを演奏していたベストの男性（「南さん」）の声を担当されました。

対談収録後も、「二馬力」でお茶をしながら談笑するお二人

井上さん　でも、そういう、羽目を外せないタイプの人がいるおかげで、こちらは安心して羽目を外せる。

宮崎監督　だいたいコンちゃん（近藤喜文監督）もいざとなると臆病ですから。

井上さん　慎重な方でしたよね。

宮崎監督　作中雫が裾ばっかり気にしててね。自意識過剰で僕はもう嫌でした。

井上さん　座る時はスカート曲げたりなんかしてね。

宮崎監督　実際に人がいない時に、それやる子はそういないですよね。人に見えてしまったからって下品ということはないので、かまわないんです。かえって隠そうとするよりも失礼な感じがしないんですよ。『未来少年コナン』というテレビシリーズで、スカートを履いた子が足をバタバタさせるところを描いたんです。どうしてもパンツが見えちゃうんですが、全然気にならないんですよ。本当に驚くべきことでしたね。スカートから見えたらドキッとするなんていうのは、本当にどうでもよく、そんな固まった考え方とはかけ離れているんです。だから、あのシーンも何か他にやり方があったんじゃないのかなと。あるものをなくしてしまわないで、あるものをあるがままで。

動いて見える瞬間が懐かしい

宮崎監督　仕事のことは、車の中ではなるべく考えないようにしているんです。代わりに何をしているかというと、バスを何台見たか数えているんです。

井上さん　そうしないとどんどん考えてしまうんですね。

宮崎監督　同じ道を20年以上通っていて、飽きない方法は何かというと、路地をのぞいていく事なんですよ。路地をのぞいて、その中に何があるのかということではなくて、どういう風に現れ、どう消えていくのかを見るんです。

井上さん　宮崎さんは動きでものを見ているんですね。

宮崎監督　路地が消えていく瞬間、道をすっとのぞかなくちゃいけないんですよ。

井上さん　すごいね。まさに映像アイ（目）。

宮崎監督　路地裏に入ったらどうなるのか描ければいいんですが、難しくて描けないんです。あと、横を向いてばかりいると、ものすごく危険。

井上さん　確かに（笑）。

宮崎監督　危なくないように前後左右気をつけて。仮に道が14差路あるなら、それを全部見て――。

井上さん　面白いですね。

宮崎監督　そういう事を毎日していると、同じものであっても、毎回見えているものが違うし、ものすごく懐かしい風景にも見えるんです。自分の中で特別何かがあるというわけではないんですが。たまに散歩に出かけた時、わざわざそういう路地に入ったりしますけど、それだとやっぱりただの路地で。要するに、変化している瞬間が面白いんです。それだけのことなんです。

井上さん　でも、それを他の人にもわかってもらうには、宮崎さんに映像を作ってもら

戸締りをし始める宮崎監督と、突如グランドピアノを奏でる井上さん

うしかない。僕らは、おおよそは見えてもやっぱり違う。

宮崎監督　つまり、散歩している時に止まっちゃいけないんです。歩き続けて見ないと。

井上さん　止まっちゃうといけないんですね。

宮崎監督　そうなんです。よく見ようとして止まると、もう風景が死ぬんですよ。動態で見ていると、刻々と変化するでしょう？　だから、いいところがどんどん通り過ぎちゃうんですが、止まるわけにはいかないんです。

井上さん　映画みたい！

宮崎監督　みんなそうなのかもしれないんですけれども、動いているものの方がよく見えるんです。山とか歩いていて「あ、なんかあるな」と思っても、歩きながら「過ぎちゃう、過ぎちゃう」と動いているとなんだかいい景色に。いろいろ実験した結果、本当にそういうものですよ。他にも、遠くに建つ大きなマンションが望めるところがあるのですが、そこが夜になるとすごく華やかなんです。窓にみんな

井上さんの絵は、理屈なしにいい。

色があるように見えて、まるでイバラードですよ。でも、昼間見るとがっかりするんですよね。しかし、それをのぞける路地が二本しかない。もう信号が目の前まで来ている場所だから、危険なんですけれども。

井上さん　「ここから見るとよい」って名所の立て看板置かなくちゃ(笑)。車のスピードがいいとかですか？

宮崎監督　動態で見るのがいい。そうすると感覚が、止まって見るのとは違ってくる。カエルは目の前で止まっている餌があっても食べないんです。人間もカエルと同じで、かえって全然動いていないと、見えなくなるんですね。

こういう妄想は常にある

井上さん　宮崎さんこれ、覚えていますか。（《街の回廊》の絵を見ながら。65ページ参照）本当にいいのかなと、もらってしまったことをすごく気にしていて。映画には出ていなかったけれども、あの時『「バロンのくれた物語」の物語』の本を出されたでしょう。だけど、そこに載っていなかったので、こんないい絵、惜しい、えらいことしてしまったと。

宮崎監督　覚えていないです(笑)。こういう妄想はずっとあるんですよ。でも、理屈を言うと変な感じになります。理屈なしに井上さんの絵はいいんです。

井上さん　宮崎さんは、理屈と理屈のないところの隙間を、どんどん掘り下げていかれるのがすごい。

宮崎監督　本当に理屈のない世界なんですよ。

最初から結末まで出さない

宮崎監督　今進めている企画のために描いているのがちょっとあるのですが。こんなのが成り立つのかどうか、とりあえず絵コンテを描いてみないとわからないんです。

井上さん　いつもそうですよ

「ハウルが飲んだ流星は、一度自由になって『わーい』と飛んでいくがまた戻ってくる、あれがいい。あれは自分の才能から一度自由になって、その上で和解したってことなんですよね」と宮崎さんにお話したことがあるんです。そしたら、宮崎さんがすごく喜んで「えっ、井上さん、それ、わかりますか!? メビウスがね、自分は11歳の時に星を飲んだと言うんですよ」と宮崎さん。才能は、持っているうちにやがて重荷になり自分を縛りつけるものになってくるんです。そこから自由になりたいと思うが、どうにもならず、自分では解き放てなくなってしまう。ハウルはそれを捨て去るのではなく自由にするんですが、自由になった星がまた自分の元に帰ってくる、つまり才能が自分を選び、自分がそれを受け入れるんです。あの流星は、自分の才能というか、運命みたいなものなんです。僕なら星が降ってきたら飲み込まない手はないと思ってしまいますが、それは自分に与えられたものを肯定するということなんです。どうも僕も5歳かそこらの時に星、飲んでますね(笑)。何かの時に「自分は無敵だ」と思えたことのある人は、たぶんみんなそうなんですよ。(井上直久さん談)

2 よもやま話 ～星という名の才能～

ね。冒頭というか、入ったところから話を考えて描き始めている。高畑さんもおっしゃっていましたが、「アニメはやり直しが利かない世界なのに、結末まで出さず、撮りはじめることができるのは、普通の人間だとできない。あれは天才なんです」と僕に力説しておられました。

宮崎監督　天才とかなんとかそんなのではなく、頭の中で最初から結論までいければいいんですけれども、途中でどんどん変わってしまうのはわかっているので。そこまでいかないとわからないことがたくさんあるんです。

井上さん　僕も漫画を描く時、最初の一コマ描いて、次描いてと、あらかじめ全体のストーリーボードは作らないです。40ページとか、きりのいいところまで描くと徐々に話がまとまってくるんです。

宮崎監督　それすごくわかります。僕もそうですから。『風の谷のナウシカ』を連載している時もネームなんか作らなかったですよ。

井上さん　ナウシカは描くのしんどかったですか？　僕も漫画描くのはしんどいですから。絵を描いていると、「頭の中にイメージがたくさんあるんですか」とよく聞かれるんですけれども「いや、入っていません」と答えるんです。描き出してから出てくるんで。たぶん宮崎さんの映画もそうだと思っています。

宮崎監督　作るのか作らないのか決めてもらうだけの絵コンテですから。でも、作品の精度に関わることなので、あんまり殴り描きではわからないですし。でも、ストーリーを全部見通そうと思っても、全然見通せない。そんなの考えてもしょうがないから、とりあえずさっさと描いていくだけです。

井上さん　100カットの絵コンテを映像にすると？

宮崎監督　10分ぐらいじゃないですかね。

井上さん　それで世界の形が見えてきたら面白いですね。

宮崎監督　100コも描いていくとどんどん変なのになっていくんです。初めは暗黙の組み立てられた公式があり、それがただの条件反射みたいにルーティーンになっているんです。そこからどうやって抜け出そうかとずっと続けていくと、わけがわからなくなるんですよ。

井上さん　僕、わけのわからない話大好き。わー楽しみだ。

宮崎監督　ヘタなものになったらしょうがないから、ちょっと見えてきた時に、全体像を描いて、こんな感じになるんだろうなと。そしたら、初めの段階では全然予想もしなかったものが出てくるんですよね。どういう風になっていくのはわかんないです。

井上さん　それを聞くと何か理由を作ってまたこちらに来たくなります。大変でしょうけれども、また面白い映画を作っていただいて。僕もまた全然違う絵を描かないと。

宮崎監督　本当、長生きしてください。奥さんによろしく。

井上さん　お互い元気で、何度でもまたお会いできますように。

3 よもやま話 ～「グリコ体操」～

井上さん　宮崎さんのお隣で一緒にお仕事をした際(65ページ参照)、隣にいないなと思ったら、後ろにある長椅子で寝ていらして(笑)。

宮崎監督　僕は困ると寝てばかりいましたから(笑)。今でも眠たいんですけれどもね。でも、5分だけでも寝るとずいぶん稼働できるんですよ。

井上さん　「何分寝よう」と思って寝ると、催眠術にでもかかったかのように、起きれるもんですよね。

宮崎監督　困ったことに、毎朝6時に起きてしまうので、会社に着いた時には、もう眠いんですよ。

井上さん　早く起きて何をされているんですか？

宮崎監督　僕は変な体操をしてます(笑)。自己流の「グリコ体操」を。手を挙げて耳につけるんです。

井上さん　(実際にやってみて)結構大変ですね(笑)。

宮崎監督　朝、50回やるんですが、その間にもいろんな体操を入れているんです。乾布摩擦じゃなくて、たわしでマッサージとか。

井上さん　50回もですか！　手を上に挙げるのは、人間は普段しない動きなので難しいんですよね。

宮崎監督　朝の日課が重すぎて、会社に着くともう眠いんですよ。一日始まったばかりなのに……。

井上直久さんが創り出すイバラードの世界

How to Create IBLARD

井上直久さんの作品は、幻想的に見えるのに、懐かしく感じさせるリアリティがあります。
そんなイバラードはどのように創りだされていくのでしょうか。
井上さんの解説と共に紐解いてゆきます。

Photo courtesy of Naohisa Inoue

How to Create IBLARD

1

ジェッソと砂で作った地塗りの上に、まず赤を散らす。両端の絵皿には絵具と水、内側のには水だけ入れて、色を薄めるのに使っている。手前左の絵皿に赤らしい赤としてナフトールレッドライト、右にはローズ味のキナクリドンレッド。

2

濁りを防ぐため1の乾燥を待って緑を重ねる。フタロシアニングリーンと、同系の緑にやや黄味を加えたグリーン。最終的にあらゆる色相の色を散りばめるため、画面の色調に対して補色となる色を重ねるといういつものやり方。

3

2が乾いたのを確かめ、透明なオレンジを重ねる。イミダゾロンオレンジと、メーカー試作品のエイプリルオレンジ（仮名）。基本、透明色を重ねるが、その時々の気分により新しい色を試したり順番を変えることもある。

Photos courtesy of Naohisa Inoue

4

色斑の形や大きさに変化をつけるため、白を撒く。地塗り用のジェッソと濃度の変化をつけるため、アクリルガッシュの白を加えてやや不透明にしたものと合わせて２種類。ジェッソを使うのは、上に色をのせやすくするため。

5

白の次は赤紫を重ねることが多いが、今回はオレンジ味が勝ってきたので、透明な青を先に散らす。フタロシアニンブルーの緑味のもの。同系の赤味と両方使うこともある。コバルトブルーは美しいが下の色を覆ってしまう。

6

青の後、細かい白を散らし、さらにもう一度赤をのせている。この時ナフトールレッドディープやキナクリドンマゼンタなど、赤紫系の色を使うことが多いが、この時は１と同じ元気のよい黄味の赤も使っている。

How to Create IBLARD

7

さらに薄めの白を散らして、今回は全体をソフトにまとめる。絶妙なバランスに仕上がった時は、そのまま何も手を加えず、完成作品にしてしまいたい気持ちに駆られるが、描き加える楽しみを思って先に進む。

8

何かの形に見えた"気がする"箇所に明暗を加えて、その形が残るように加筆していく。この時光源の方向を決め、形を輪郭ではなく、明暗で表現するように彩色する。陰影にはウルトラマリンブルーなど青紫系を使う。

9

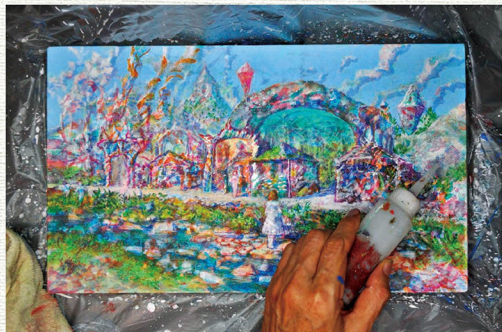
草など植物は白で形を描き、乾いたら上から透明の緑やオレンジをかぶせる。水の部分に透明な青を重ね、人物を入れてみる。比較で建築や植物などの大きさが具体的になり、空間のスケールとストーリー性が生まれてくる。

Photos courtesy of Naohisa Inoue

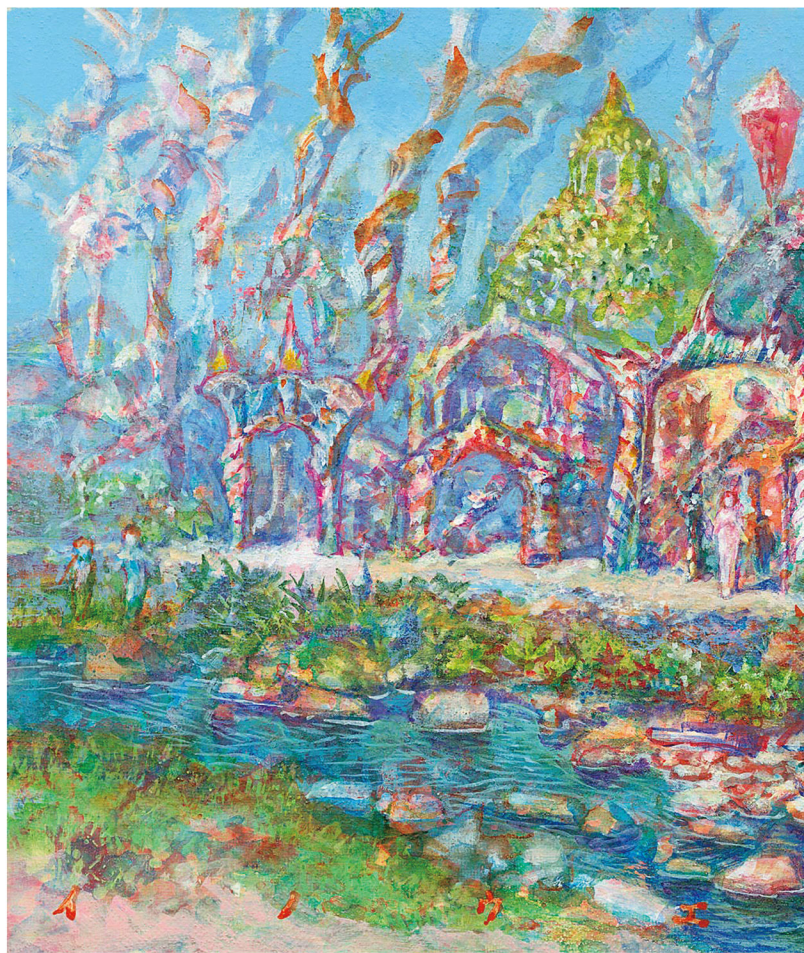
10

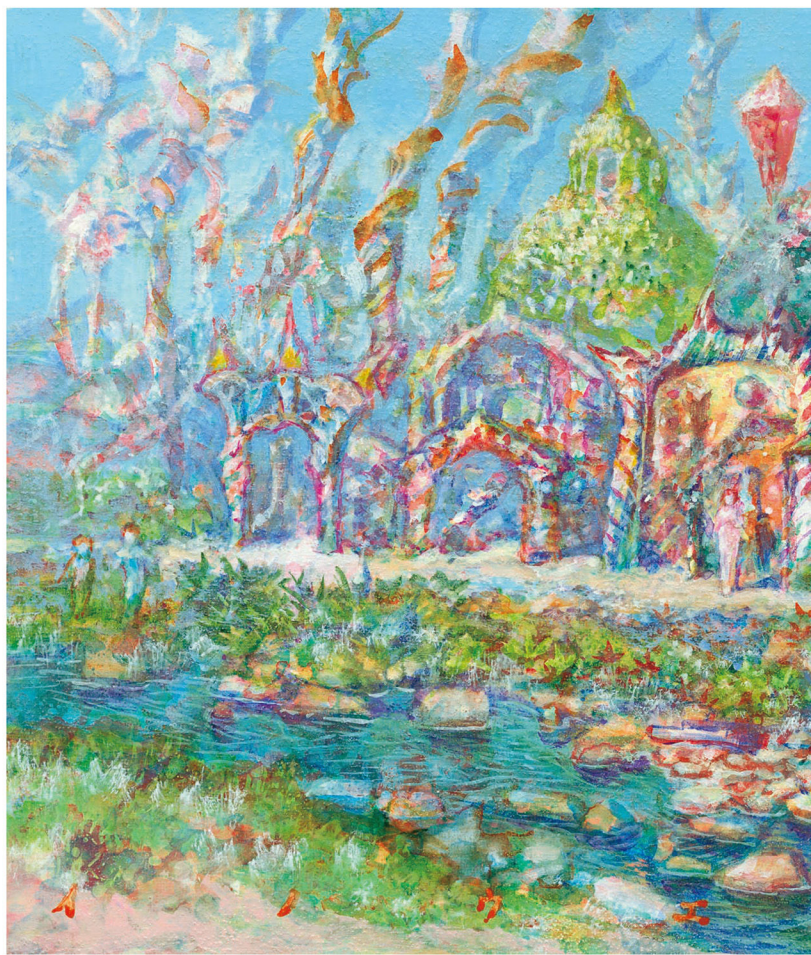
左から右へ川に沿って道を作る。空を塗る時、気に入った色の地模様を生かし、ねじり飴のような形にして残す。アーチの形から、温室や植木市のような連想に繋がり、道に沿って色とりどりの小さな露店が並ぶ景色になる。

11

遠景の左奥に大きい構造が多く、近くになる右が逆に小さいので、屋根の形などを直して遠近感を整える。乾いたアクリル絵具を取るには、アルコールを布につけて拭いたり、このように画面に直接かけて拭き取ったりする。

12

道を画面右まで通し、中央左上の三角形の樹に鮮やかな透明黄緑をかぶせる。これはニッケルアゾイエローという、見た目には黄土色だが薄めると澄んだレモンイエローになる透明色と、フタロシアニングリーンとの混合。

《川辺のフェア》2015
左に二人の子供、中央に女性の点景人物、水面の細かい描き込みも入り、ひとまずの仕上がり。サインを入れる。川向こうに見つけた初夏の植木市に向かう、少しの不安とわくわくする期待感。

《川辺のフェア》2015

画面中央右上のアーチ、ドーム状の大きな温室のようなものの存在感が強く、意味ありげで気になるので、白で若々しい木立を描き加えてみた。塗りつぶすことはせず、柱から葉が伸び温室や中の木がそのまま育ったつもり。

《川辺のフェア》2016

少女を手前向きに変えた。川へおりる道、脇道、渡れる飛び石を加筆して安心感を演出、露店にも鮮やかな色で細部を描き込んだ。植物と画面全体に透明な赤、オレンジをかぶせて、心満ちた嬉しい帰り道になった。完成。

IBLARD Collections

井上直久さんのこれまでの作品をまとめたコーナーです。
これまでに出版されたものやすでに絶版になってしまったもの、
デザインアイデアまでさまざま。グッズやゲームなどもご紹介します。

※製造・販売が終了し、入手困難な商品もあります。

「ソルマプレス」という
名を自分で名付けました。

画集『井上直久作品集イバラード 1981』の
限定版の中の挿絵 No.291

画集『井上直久作品集　イバラード 1981』
ソルマプレス 自費出版 1981

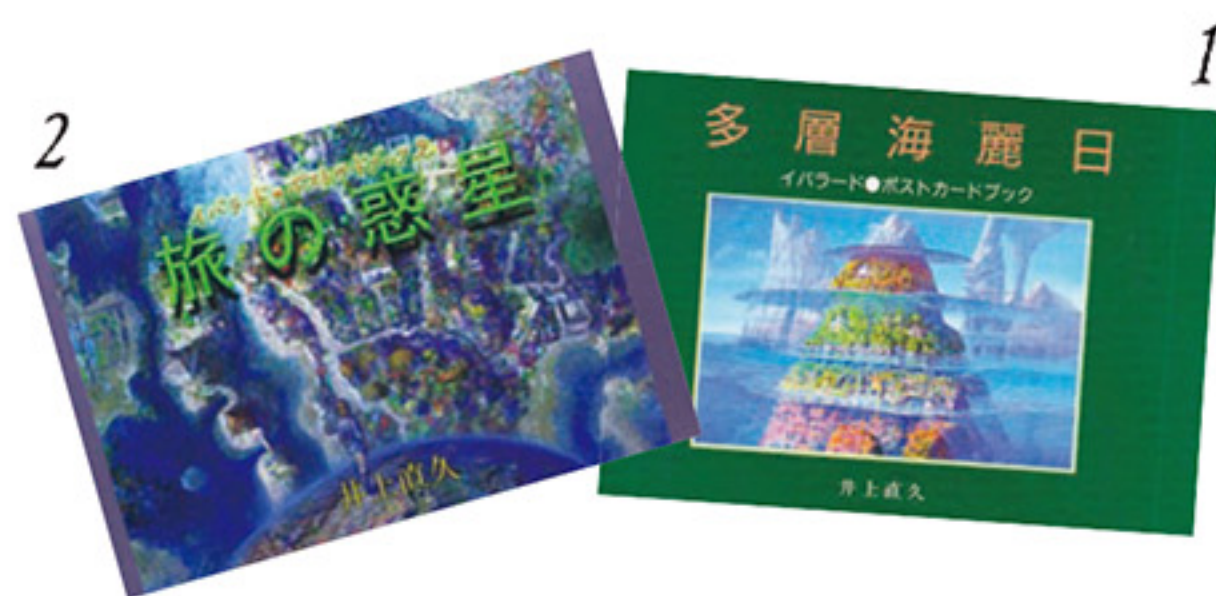
もともとは鉛筆手書き、A4 の紙で 8 頁の小さな折り本形式で、一章一章書いては友人に配っていました。そして、最終的には自費出版した最初の画集に『イバラード消息』として収録しました。

1. 画集『イバラード博物誌』架空社 1993
2. 画集『空の庭、星の海 イバラード博物誌Ⅱ 』架空社 1996
3. 画集『ジパングの岸辺 イバラード博物誌Ⅲ』架空社 1999
4. 画集『ここが、その街 イバラード博物誌Ⅳ』架空社 2003
5. 画集『水わく丘 イバラード博物誌Ⅴ』架空社 2008
6. 画集『思い届く日 イバラード博物誌Ⅵ』架空社 2012

絵本『イバラードの旅』講談社 1983

1. 単行本 『イバラード物語』青心社 1985
2.3. 単行本 『イバラード物語 ラピュタのある風景』増補版＆愛蔵版 青心社 1995
4. 単行本 『イバラード物語 ラピュタのある風景』新装増補版 青心社 2009

《イバラード絵巻》1997
ロール紙プリンターで制作された作品。横幅は 8m 超。
この絵は P157 まで続いています。

1. 大判画集『世界はあなたのコレクション』架空社 2001
2. 大判画集『旅誘う光の粒』架空社 2014

1. ポストカードブック『多層海麗日』架空社 1999
2. ポストカードブック『旅の惑星』架空社 2010

単行本『めげゾウ日和
井上直久のアクリリック』
架空社 2009

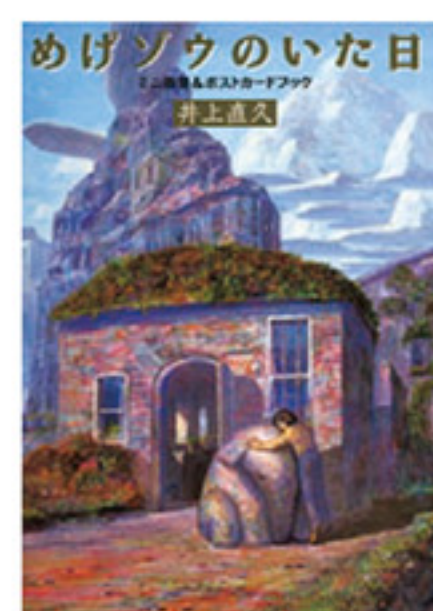
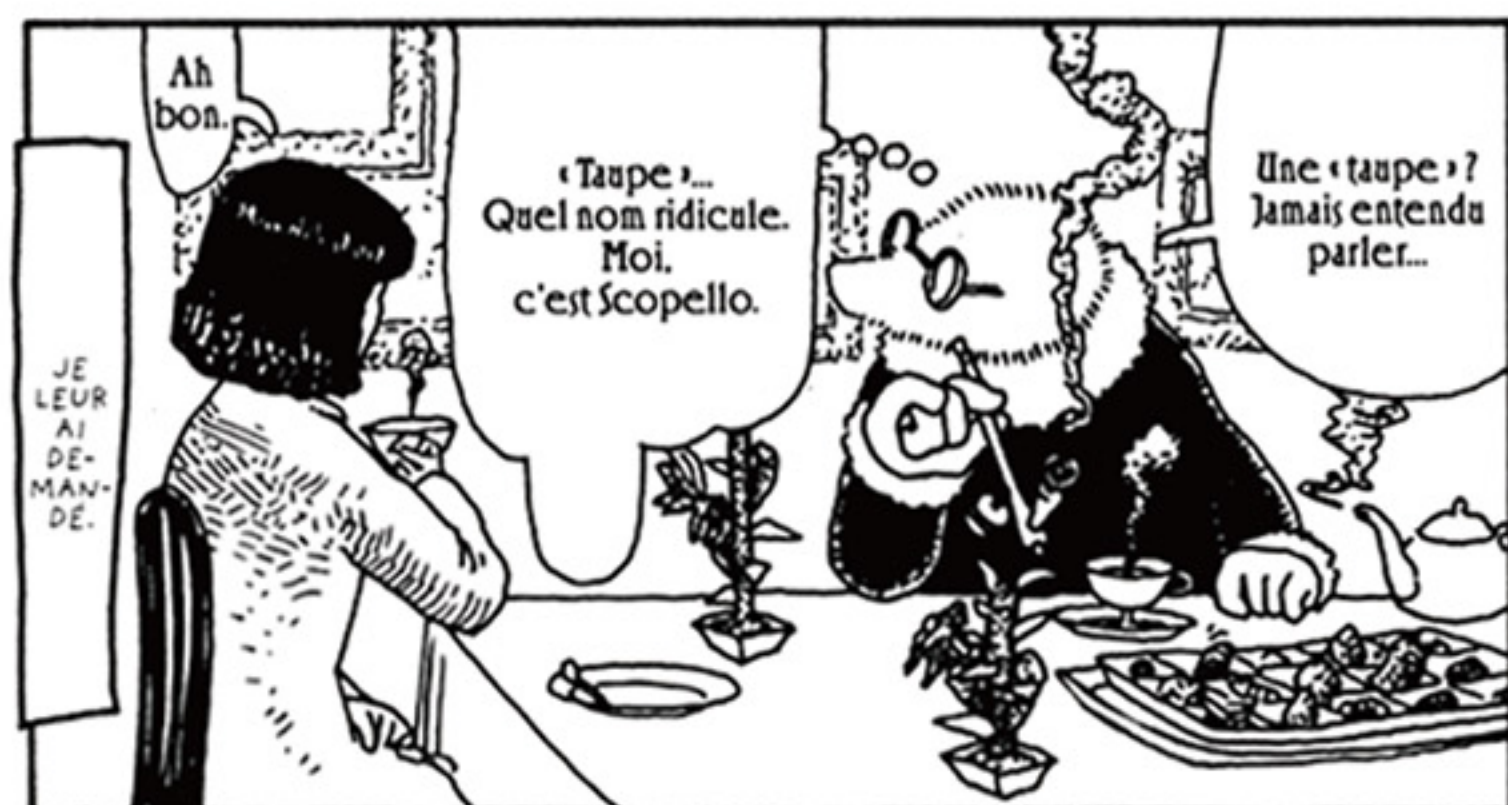
絵本『星をかった日』
架空社 2006

画集『虹化石の街へ 井上直久画集』
サンリオ 2001

大型本『「バロンのくれた物語」の物語』
映画『耳をすませば』より
(ジブリ THE ART シリーズ)
スタジオジブリ 1995

コミック『イバラード物語』
フランス語版 KANKÔ 2008

漫画『ドラゴンファイヤー』
青心社 1987

文庫『迷路の街で聞いた話 IBLARD
Traveler's Guidebook』
講談社プラスアルファ文庫 2002

ポストカードブック
『めげゾウのいた日 ミニ画集 &
ポストカードブック』サンリオ
2001

フランス語版『イバラード物語』のカットの一部。

『Barn Stormer』
LP レコード 12 インチ盤 <E4244>
自主制作盤 ギターによる独演集 1983
Produced by Trio Los Aires
Recorded at 456 studio,Ibaraki
Engineered by Masao Kida
Sound co-ordinator: Isato Nakagawa
Cover art: Naohisa Inoue
Liner art: Katsuhisa Toda, Erika Hayashi, Takako Houei, Hiroshi Hata, Naohisa Inoue
Photography and Art direction: Katsuhisa Toda

CD-ROM 画集『イバラードの旅』シンフォレスト 1996

CD-ROM『イバラードの世界』シンフォレスト 1998

CD-ROM『イバラードを見た日 Visions of IBLARD』
株式会社アートスペース 2003

CD-ROM『イバラードを見た日 Visions of IBLARD』(サンプル)
株式会社アートスペース

Play Station
『イバラード ラピュタの孵る街』
システムサコム 1997

CD ゲーム・ミュージック
『イバラード ~ ラピュタの孵る街』
ワンダースピリッツ 1997

イメージ・CD アルバム
『イバラード～イバラード博物誌より～未来 MUSIC』
徳間ジャパンコミュニケーションズ 1995

IBLARD Collections

DVD & Blue-ray『イバラード時間』
ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社
2007

ＶＨＳ・カラー・ステレオＨｉＦｉ『イバラードの旅』
時間：45 分
原作：井上直久
主演：浜丘麻矢
演出、脚本：伊藤正美
サウンドデザイン：TSP
ハイビジョン撮影、CG 監修：ソニー PCL
スタジオ撮影：テイクシステムズ
制作・著作：テレビ朝日 /1999 年 3 月・BS ハイビジョン放映作品

キーホルダー（めげゾウ、ハネめげ、ノナ、
スコッペロ、メーキンソー、多層海、惑星、市電）
株式会社アートスペース

ジグソーパズル 1000 ピース 51.5 cm × 72.8 cm
井上直久 KONAMI 1993

アートスペース主催のイバラード展での
賞品と参加賞

めげゾウぬいぐるみ
テレビ朝日
1997

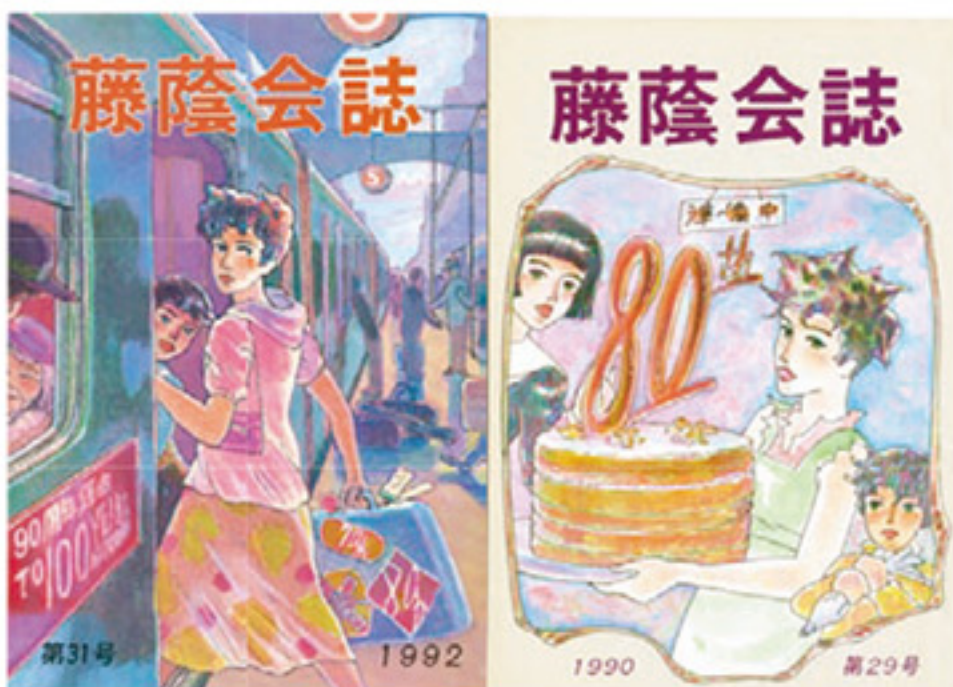
お手玉になったメーキンソーとスコッペロ
ジブリ美術館 2015

右：3D 制作＝シンクラボラトリー 杉山 誠『3-D イバラード』架空社 1998
左：3D 制作＝シンクラボラトリー 杉山 誠『3-D イバラード 2』架空社 1998

イバラード展でのプレゼントグッズ
めげゾウ飴

高校教師退職後、カリフォルニアにある「加州日本語学園協会」からの依頼でイラストを制作。1･2年生用、2・3年生用、そして5年生用の教材にイラストを描きました。犬は犬種がわかりやすいように、子供は学年別に年齢相応に、などたくさんの注文がありました。そのおかげで漫画執筆の際、役に立ちました。

加州日本語学園協会
（CAJLS：California Association of Japanese Language Schools）の5年生用の「わたし達の日本語」挿絵 1992

僕の孫のプレゼント用に作った包装紙です。

藤蔭会という、大阪府立春日丘高等学校卒業生の会の表紙の挿絵 1992

オリジナル郵便ハガキ

普通の石に陰影を絵具でつけ、めげゾウに見えるようにしたもの

NewYork 展の記念バッジ　2004

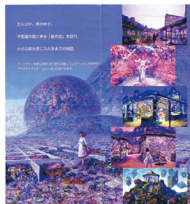
《フェアの宵》

鉄銅芸術家の堀田節也さん作の額に絵を入れました。

近所にモグラ塚があり、当時幼稚園児だった息子と、バケツとスコップを持って、モグラ堀りに行きました。その思い出を元に描いた作品です。漫画『イバラード物語』に続いてますね。

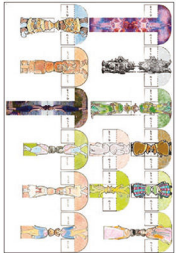
《襟飾りの少女》

《塔と少女》

オリジナルの陶器によるチェス

プラネタリウム番組「星の店」－ STAR SHOP －
原作：井上直久（絵本作品「イバラード博物誌」）
企画・脚本・監督：近清武
製作：ミノルタプラネタリウム株式会社
上映時間：約 25 分
初上映：2003/3
上映館：豊川市中央図書館ジオスペース館（プラネタリウム）、
秋田ふるさと村（プラネタリウム）
イバラードの世界観をベースに、科学とファンタジーを融合させたプラネタリウム番組。テラフォーミング後のある惑星に作られた（イバラード風）街で、主人公の少女が、「星の店」を探し、小さな星を買うまでのお話。イバラードでは、心で感じることが現実になることがあるという。主人公の少女が、手に入れた小さな星が育ってゆくプロセスと、自らの未来を重ねながら自分たちが暮らす、地球～太陽系、についても学んでゆく、科学とファンタジーが融合したストーリー。

いばらきの郷土すごろく
価格：400円
1988
問い合わせ先：
青少年課(上中条青少年センター)
茨木市上中条 2-11-22
TEL：072-622-5180

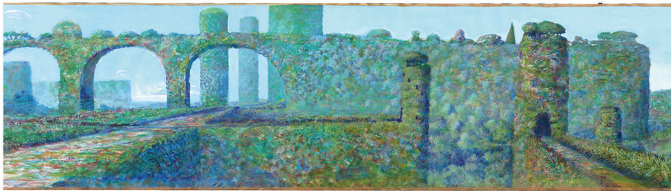
右の「けふふるゆきの　いやしけよごと」
は万葉集の大伴家持の歌からです。
左の「ひとしれすこそ　おもひそめしか」
は百人一首からです。

手書きカルタ 2012

やくそくすごろく
茨木市が市内の小学生に配布した物
1995

《夢の庭》

《町の我が家》

《灯りともる日》

手製の縁付き（モデリングペーストの上に金色絵具をのせています）の作品

Photos courtesy of Naohisa Inoue

《雲近き村》2014

浄土宗 大念寺（だいねんじ）

大阪府茨木市安威３丁目 17 番地３号

TEL：072-643-7678

URL：http://dainenji.jimdo.com/

圓通寺 (えんつうじ）　洛北幡枝、
後水尾院の山荘を
前身とする借景庭園がある

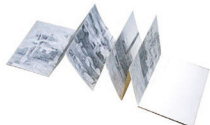
円通寺（圓通寺）

京都府京都市左京区岩倉幡枝町 389

TEL：075-781-1875

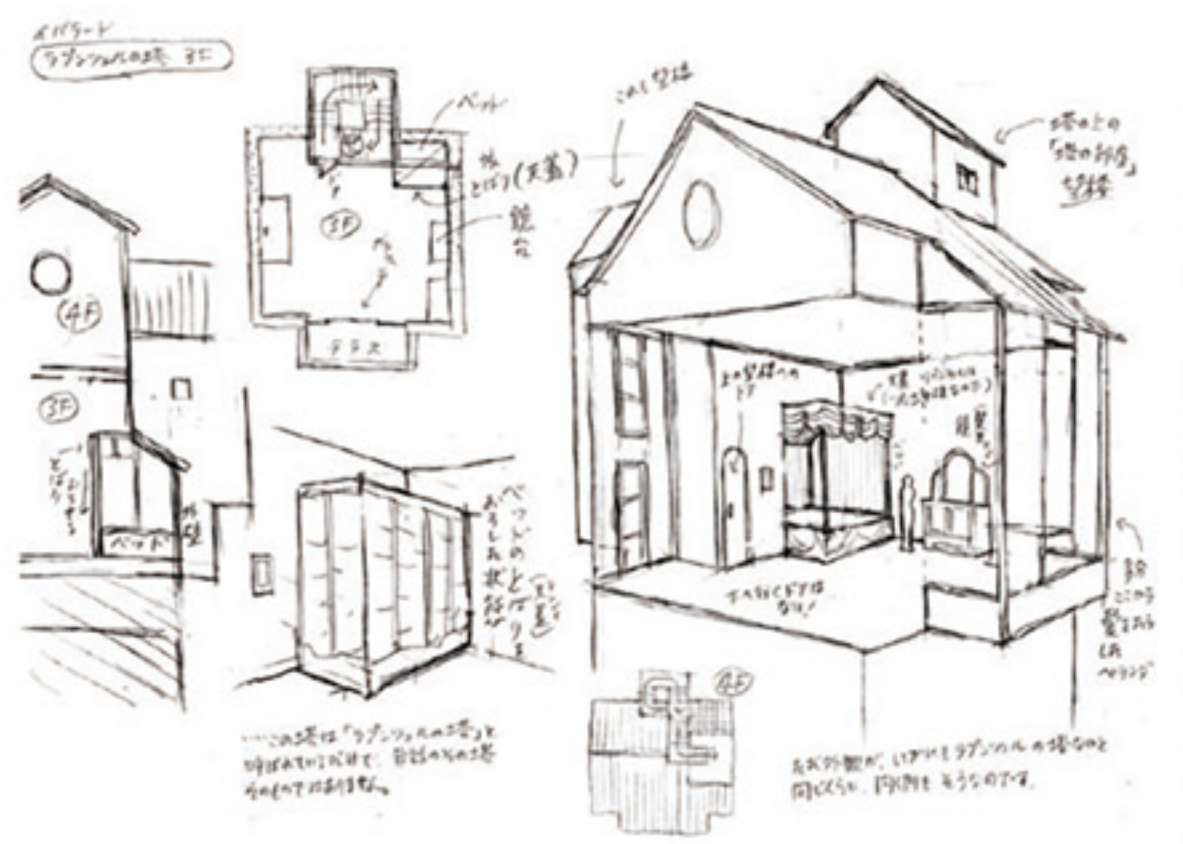
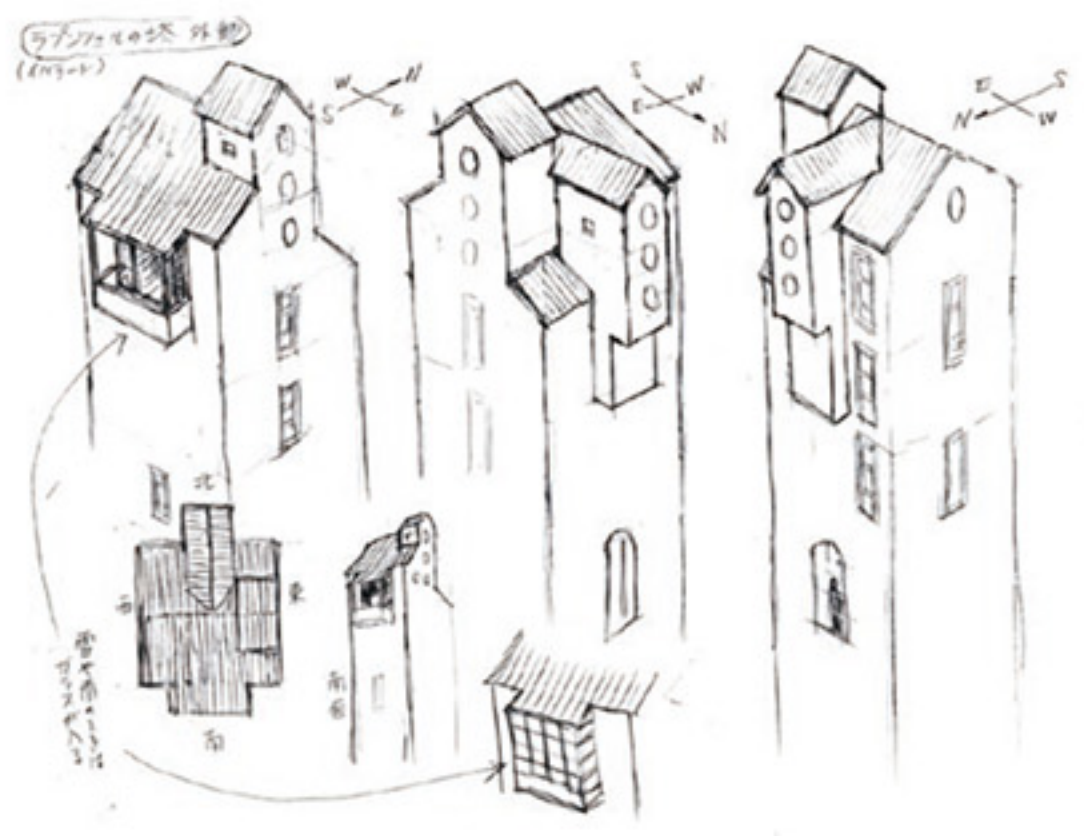
拝観料：大人・大学生・高校生 500円 /
中学生・小学生 300円

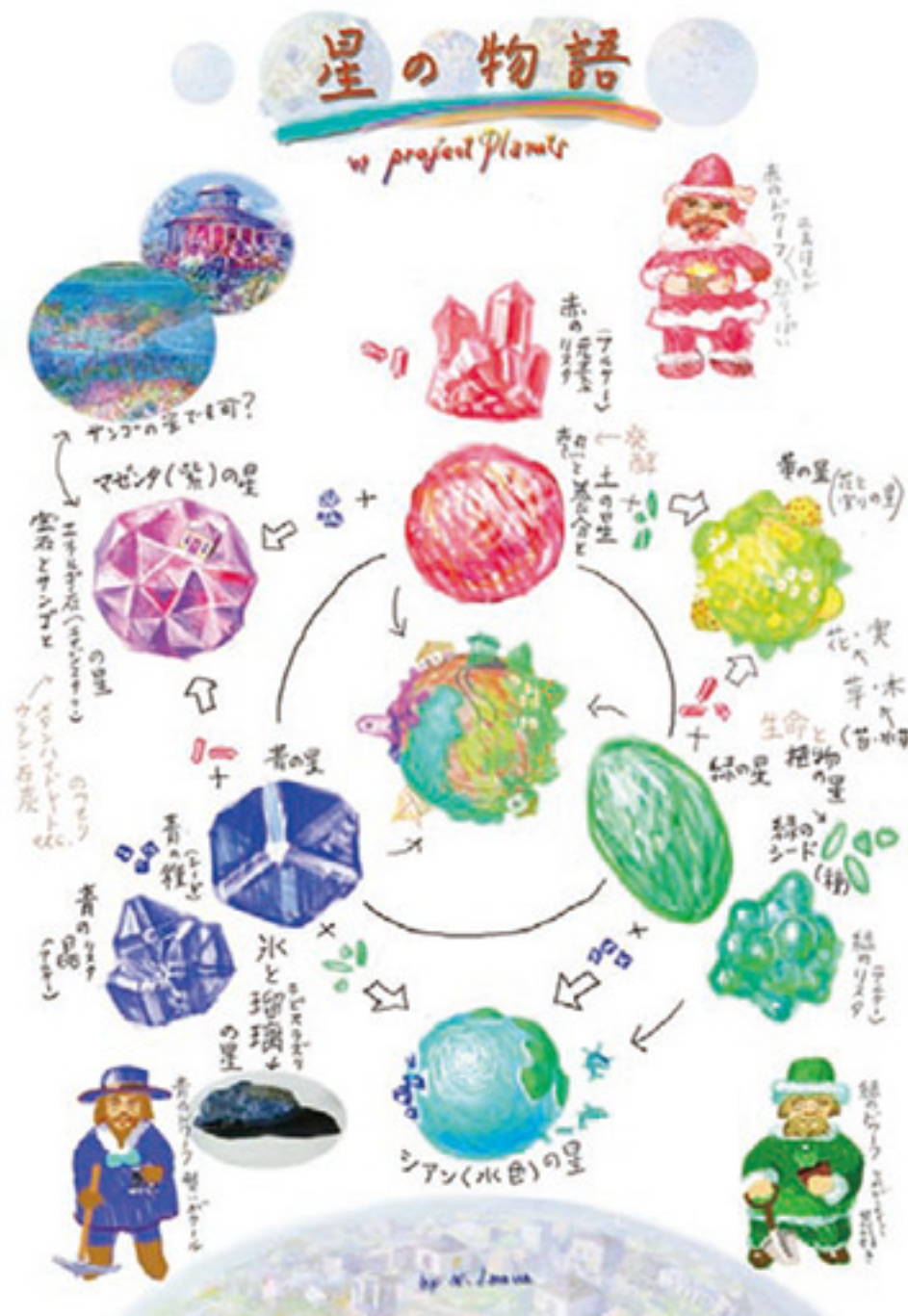
拝観時間：10:00 -16:00

未完成の六曲屏風

折本ので描いた円通寺

Photos courtesy of Naohisa Inoue

作品《借景庭園》のイメージの元となった圓通寺庭園 2002/11/24

折り本《圓通寺庭園》1990

ゲーム製作の作図
ラプンツェルの塔の中のイメージ案

個展の展示用、陶の家でできた街を走らせるための、市電模型原図

ペン描きの老人は、高校教師時代、同僚の先生からの「パソコンのロールプレイングゲームを作ってみよう」との提案で描いたキャラクター案です。少女像「白いアリス」は、高校退職後に京都修学院、ブティック・ミネでの４人展に出展した作品です。鉛筆描きの老人は、漫画『イバラード物語』を出版した後ぐらいに、続編のキャラクター候補として描いた遊びスケッチです。

『星をかった日』の
シミュレーションゲームの
アイデア案

イバラードアイテムの井上さんのアイデア案

実際に販売された井上さんの絵画とコラボレーションしたISBITのジャケット。裏地に井上さんの作品《多層海星月夜》がプリントされている

今回使った絵 3点（加工アリ）

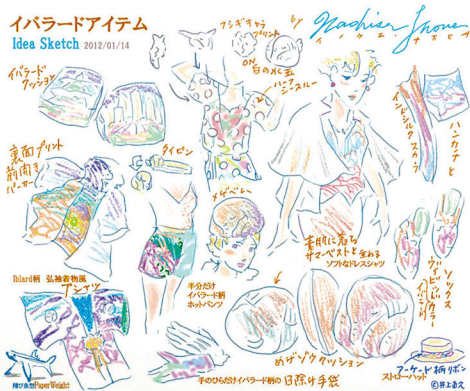
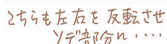
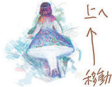
←ソデの部分 左サイドを反転して使用

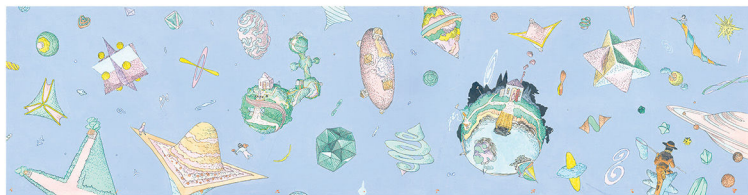
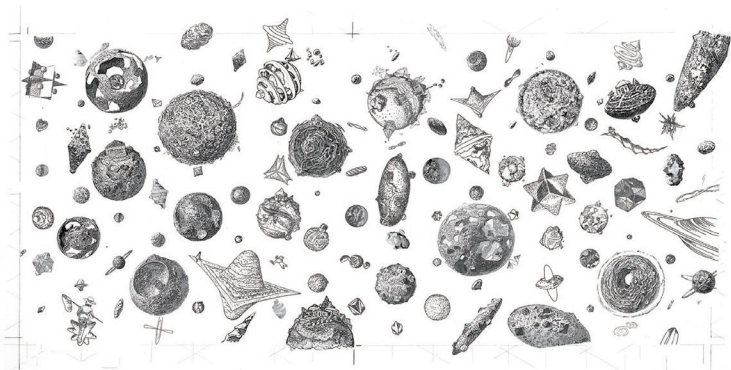
女のコの位置を変えてあります。

上へ ↑ 移動

こちらも左右を反転させソデ部分に……

背中のセンターに入れるように……

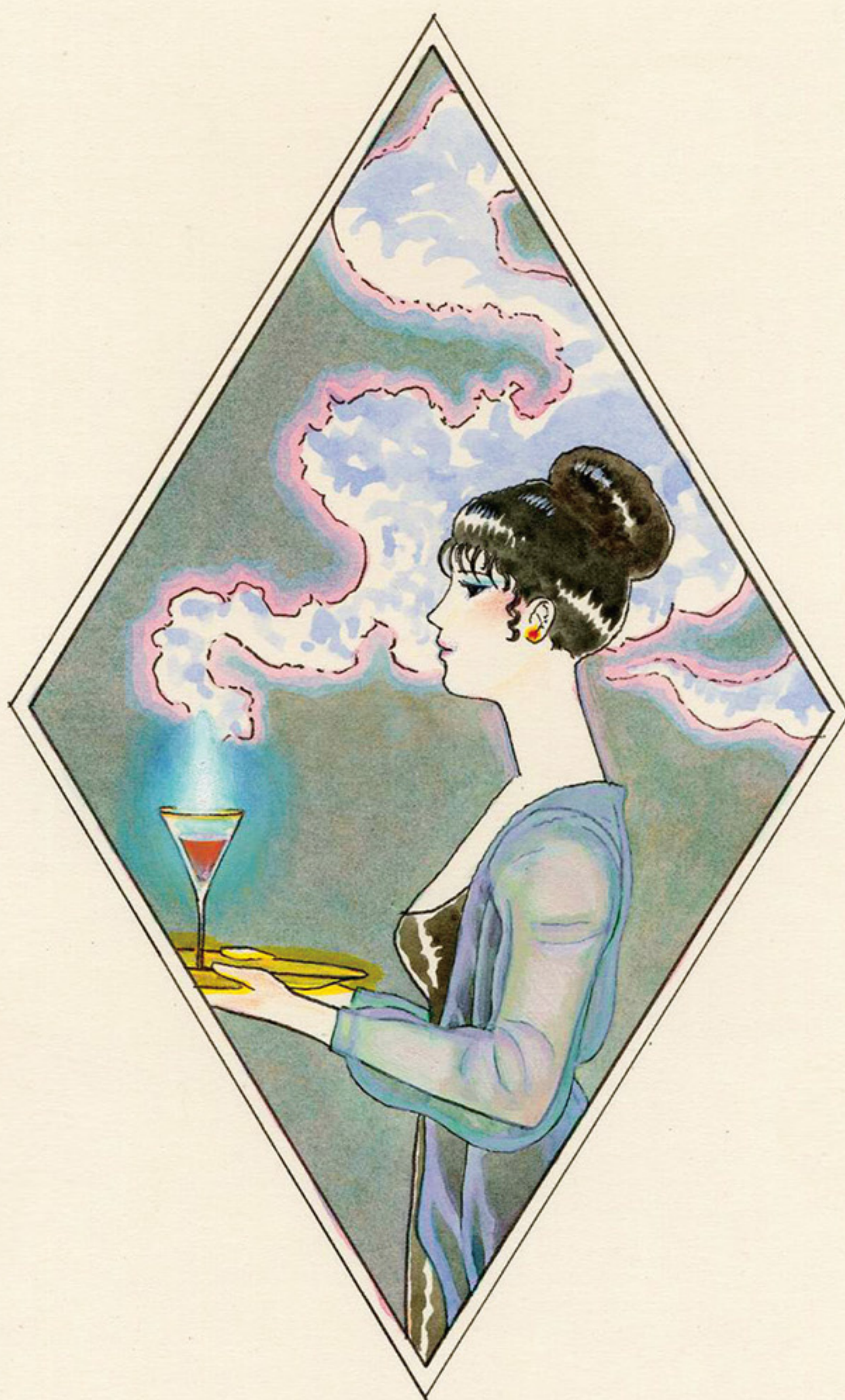
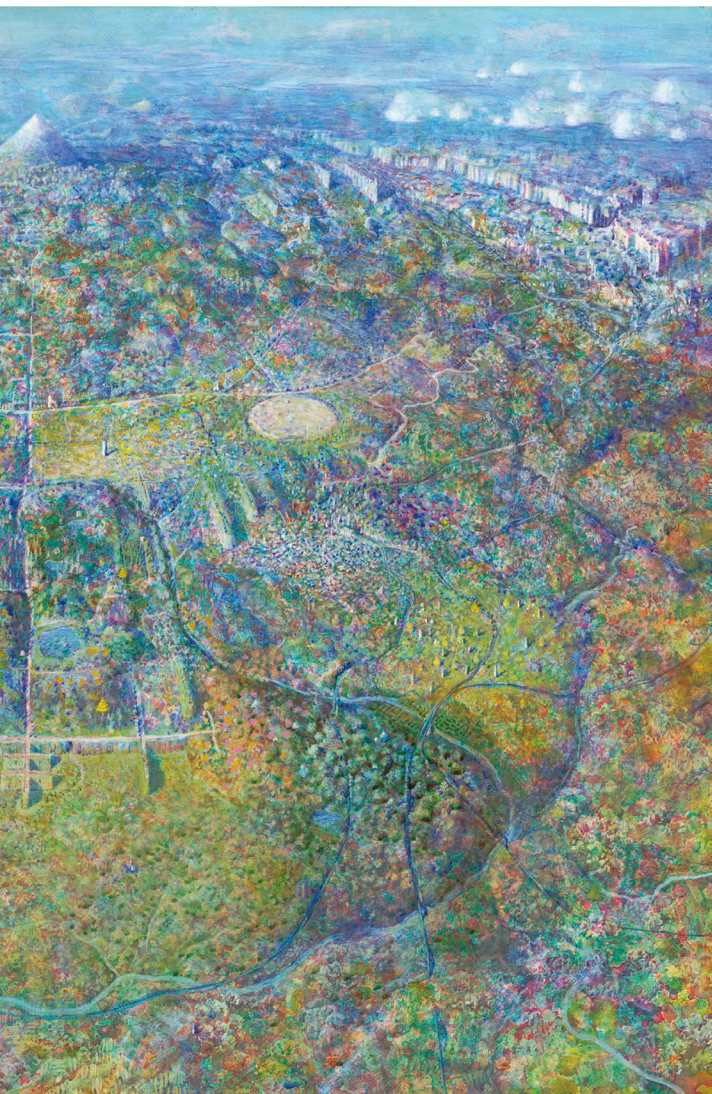
そういう事もできますのでもし、どうしても…というときは、相談して下さい。

2012、3月7日 井上直久

イバラードのアイテムの井上さんのアイデア案

《GinGa》2012

イバラード博物誌Ⅵ「思い届く日」の見返しページのための画像

《魔法使いの棚》2001

漫画『イバラード物語』の 15 ページの貴重な線画。一コマの絵を描いたら、次、と最初に描いた絵からストーリーを次々と考えていくスタイルの井上さん。後から「よいこの漫画入門」のような本を読み、最初にストーリー全体を考えてから描くんだと初めて知って、驚いたそうです。

《イバラード鳥瞰》1996

あとがき　山野違友梨

鮮やかな色がカンバス上に散らばり、まるで夜に広がる星のよう。黒く果てしなく広がる大空は、いにしえの人々にとって、自由に描けるカンバスだったのではないでしょうか。昔の人たちが星と星とを結びつけて、動物、人、ものなどを思い描き、大きな空で遊んでいたように、井上直久さんもまた色鮮やかなカンバス上で、実に豊かな物語を繰り広げ、作品を創りだします。

井上さんの絵を見ていると、自分だけの物語を心の中でワクワクと繰り広げられ、思いっきり自由な感覚の世界へ羽ばたいているかのような気分を味わいます。そして、なんだか言い知れぬ懐かしさのようなものも。それは、井上さん自身の記憶にも誘われて、いつの間にか絵を見るこちら側にも同じように想像力、空想力の自由を与えられ、私たちの記憶までもが引き起こされるかのようです。井上さん自身が一人一人の鑑賞者の手を引いてイバラードをめぐっているかのように、もしくは誰もがイバラード目になれたかのように。

この本は、井上さんの絵である表紙から始まり、ページをめくって読み進めていくことで、関係者、ご家族、井上さん自身を通して、井上さん、そしてイバラードについて、よりよく理解を深め、読み終わった後には、以前とはまた違う世界の素晴らしさ、不思議さ、面白さに気づく――、きっと気づけば、「世界はもっとキレイにみえる」。そうなったら、素敵でいいなという想いを込め、ページ構成をしました。

この本が制作されるいきさつについて少しだけ書いておこうと思います。そこには、幼い頃の思い出、全ての出来事がタイミング良く折り重なったこと、そして多くの方があたたかく手を差し伸べてくださったことが、非常に大きいです。

当時、学校の進級のための課題で何を制作しようかと悩んでいました。そんな時、たまたま立ち寄った古書店の棚で、映画『耳をすませば』のパンフレットを見つけました。手に取り、その末尾のページに行き着いたところ、井上直久さんのインタビューページに出くわしたのです。私の趣味の一つがパンフレット収集なのですが、ジブリ作品の看板映画の一つである『耳をすませば』は、なかなか手に入る機会がありませんでした。ただ、その時偶然にでも手に入ることができたのは奇跡に近いかもしれません。

まだ課題の方針も何も定まらず、ただもんもんと悩んでいた私の頭の上に光が射したような、衝撃的な力を秘めていました。というのも、私が生まれて初めて観た映画が『耳をすませば』だったから、なおさらです。

私は当時3つだったので、その映画がどのように映ったのかは、はっきりとは覚えていません。しかし、その時の私の様子を両親が何度も聞かせてくれました。映画館入場前はうろちょろして落ち着きがなかったのにも関わらず、上映中は瞬きを忘れているかのごとく見入り、エンディングの曲が始まると一人でスタンディングオーベーションをし、興奮のあまり真っ先に座席の一番前に走って、「カントリーロード」を熱唱したらしいのです。その記憶が私の頭の片隅に潜在しているのかは分かりませんが、大切な思い出であることには変わりません。

初めて観た映画のパンフレットに出会えたのは、本当に不思議な出来事にしか思えませんでした。私の原点である映画に関われていた、「井上直久さん」についてもっと詳しく知りたいと、純粋にその思いが強くなりました。それからというもの、インターネット、画集などを手当たり次第調べました。しかし、想像していたよりも情報があまりにも少なくて、どうやってご本人とコンタクト取ればいいのか、途方に暮れていました。

２０１５年12月。銀座三越で井上さんが個展を開かれるという情報を手にし

ました。先行き不安になりかけ、悩んでいた矢先に、吉報とはまさにこのことではないでしょうか。個展当日、緊張のあまり、どうやって声をかけるべきか悩みました。断られてしまったら、私の「進級課題」もろともパーになってしまいます。でも、「いいですよ。イバラードを知ってもらう機会があるのは僕にとっても喜びです」そうおっしゃってくださった井上さんの言葉は今でも鮮明に思い出せます。こんな、一鑑賞者にすぎない、その上社会人ですらない、無名の学生である私なんかに、こうも心広くお応えしていただけるなんて夢にも思いませんでした。井上さんに関わられた方々もとても素敵な人たちで、取材過程ではさまざまな方にお会いし、貴重なお話を伺いました。編集の経験のない私にこのような機会を与えてくださった井上さんに、深く感謝いたします。

　本当にいろんなことがたっくさんありましたが、こうして、ようやく一冊の本にまとめることができました。たくさんの方々への感謝の気持ちと同時に、心底ほっとしています。

　そしてもう一つ、とてもタイムリーな出来事がありました。それは、映画『耳をすませば』が、このムックの制作中に再放送されたのです（２０１７年1月現在）。観るのは人生で3度目となったのですが、今あらためて観ると……こう表現してしまうのはなんですが、主人公とシンクロしてしまう部分が多いようにも感じ、笑ってしまうほどでした。この作品が生まれた偶然のような運命に、心の底からお礼を言いたいです。

　そして、制作にあたり欠かすことができない、大変お世話になった人がいます。私がこのお話を進級制作にと話を持ち出した際、私の「全力を見せてほしい」と背中を押して、応援してくださった高山太郎先生。この方は、私にとって『耳をすませば』に出てくる「西司朗」さんのような存在でした。進捗や取材原稿があると、一番に見て知ってほしいとばかりに、いつも明け方近くでも構わずに、連絡してしまっていました。この場をお借りし、お詫びをしたいです。本当にお世話になりました。そして、遅くまで学校で作業させてくださった先生方、携わってくださった方たち、応援してくださったみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

　最後に、井上さんが作品で提示されているメッセージを、この本を読んでいただくことにより、より深く、より広く、少しでもより多くの方に、伝えることができたらと願います。

《アトリエの窓辺》1998

IBLARD 井上直久 ー世界はもっとキレイにみえるー

IBLARD Naohisa Inoue ー See Things with IBLARD Eyes ー

2017年　8月21日 初 版 発 行
2017年11月21日 電子版発行

監修

井上直久

編集・制作

山野邉友梨

発行人

青木治道

発行

株式会社 青心社
550-0005
大阪市西区西本町 1-13-38 新興産ビル 720
電話：06-6543-2718
FAX：06-6543-2719
振替：00930-7-21375
http://www.seishinsha-online.co.jp

First edition 2017

Published August 21, 2017

Supervisor

Naohisa Inoue

Producer&Editor&Design&Photography

Tomona Yamanobe

Publisher

Harumichi Aoki

Published by

Seishinsha Co., Ltd,
Shinkosan Bldg. 720
1-13-38 Nishi Honmachi
Nishi-ku ,Osaka 550-0005
http://www.seishinsha-online.co.jp

Printed in Japan

Special thanks to:

株式会社スタジオジブリ、株式会社アートスペース、ホルベイン株式会社、
ミノルタプラネタリウム株式会社、株式会社ピンポイントギャラリー、
圓通寺、学校法人専門学校東京ビジュアルアーツ、
宮崎駿さん、鈴木敏夫さん、野中晋輔さん、男鹿和男さん、たむらしげるさん、
北見隆さん、中村由利子さん、松尾清憲さん、小室和之さん、宝永たかこさん、
内堀法孝さん、福岡敏郎さん、西須由紀さん、前野眞さん、宮脇周作さん、
後藤隆さん、近清武さん、伊藤彰宏さん、小杉弘明さん、春日敏夫さん、桂悟郎さん、
小谷美慕子さん、井上博子さん、高山太郎さん、こばやしみゆきさん、
制作に携わってくださったみなさま

NOTICE

111 ページ、宮脇周作さんのインタビュー内におきまして、井上さんがルノアールを例にしたエピソードを話された記述があります（本文 3 段目、13 行目〜）。が、後日井上さんより、《「クリムソン・レーキ」という色が出来たばかりの頃、これを使ったルノアールの絵を、“赤すぎるんじゃないか”と言った人に、“そのうち褪せてちょうどよくなる”とルノアールが返した、というのは話した記憶がありますが……》というご指摘がありましたが、今なお心に留めているエピソードとしてお話いただいた宮脇さんのご記憶を尊重し、取材時の発言に則した内容で掲載いたしました。